

1. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成17年度発掘調査概要

はじめに

国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所は、京都西南部の交通事情の改善のため、京都第二外環状道路の建設を計画した。同道路は、大山崎町から長岡京市域を北上し、京都市域に至るものである。長岡京市域には古代の都である長岡京跡が広範囲に所在しており、しかも、縄文時代から中世にいたる集落遺跡も多数分布している。今回の調査は、同道路の建設に先立ち、影響を受ける遺跡の状況を明らかにするために実施したものである。

平成17年度の調査は、長岡京市下海印寺西条地区と尾流地区の二か所で実施した面的な発掘調査と、同市奥海印寺片山田～調子八角に至る約2.2kmの間で行った試掘調査に分かれる(付表1)。

年度当初の計画では、奥海印寺高山地区と新郷地区の試掘調査、下海印寺上内田地区の本調査を予定していたが、諸般の事情により、次年度以降に調査することとした。

奥海印寺片山田～調子八角の試掘調査は、長岡京跡右京第851次調査・下海印寺遺跡22次調査・伊賀寺遺跡の調査として実施した。調査地点は、友岡、調子八角、下海印寺川向井・上内田・菩提寺、奥海印寺駿河田・火ノ尾・荒堀・片山田、高台の12地区で、これらの地区内に計42か所のトレンチを設定して調査を実施した。試掘調査の結果、大多数の地区では顕著な遺構・遺物は認められなかったが、調子地区および尾流地区での調査において、多大な成果を得た。調子地区では、弥生時代中期から古墳時代初頭における川跡および古代における柱穴群を検出し、周辺に同時期の集落跡が存在していることが窺われた。尾流地区の試掘調査では、長岡京期の可能性が高い川跡もしくは溝跡が検出され、近辺に分布している西山田遺跡との関連が注目された。

西条・尾流両地区の発掘調査は、平成16年度に行った試掘調査の結果を受けて実施したもので、弥生～古墳時代、奈良～平安時代の遺構が検出されることが想定された。西条地区の調査は長岡京跡右京第852次調査および下海印寺遺跡23次調査として実施し、尾流地区の調査は長岡京跡右京第862次調査および下海印寺遺跡24次調査として実施した。調査の結果、両地区で、弥生時代の溝、古墳時代の竪穴式住居跡、古代における掘立柱建物跡や溝を確認した。

現地調査は、調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員戸原和人・増田孝彦・竹原一彦・岩松保、専門調査員竹井治雄、主査調査員柴暁彦が担当した。現地の調査期間は、平成17年5月23日～平成18年2月27日までを要した。総調査面積は4,250m²である(第1図)。

本調査で使用した座標値は、国土地理院第IV系で、周辺での調査成果との整合性を持たせるため日本測地系を使用した。

調査にあたっては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センタ

- 一・地元自治会、近隣住民の方々の御協力、御指導を得、多くの方々の参加を得た。^(注1)
 なお、調査に関わる経費は、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

付表1 平成17年度第二外環状道路建設に伴う調査一覧表

右京第次	試掘・本掘	大字	番号	地区名	調査期間	調査面積 (㎡)	概要
852	(1)本掘	下海印寺	13	西条	6.8～10.21	970	掘立柱建物跡・柵列・ 竪穴式住居跡
862	(2)本掘	下海印寺	14	尾流	11.7～2.23	1,280	竪穴式住居跡・流路・ 土器溜まり
851	(3)試掘	奥海印寺	1	片山田	5.23～6.8	110	顕著な遺構なし
			2	荒堀	6.7～6.29	90	顕著な遺構なし
			4	火ノ尾	7.1～7.22	300	小泉川の旧流路
			5	駿河田 (左岸)	7.6～7.22	90	小泉川の旧流路
			6	駿河田 (右岸)	9.26～10.28	170	小泉川の旧流路
			高台	3	高台	7.27～8.12	160
		下海印寺	7	菩提寺	5.23～6.10	110	小泉川もしくは菩提寺 川の旧流路
			8	尾流	7.28～9.1	200	長岡京期の可能性のある 流路。土馬・ミニ チュア竈出土
			9	上内田	1.20～2.27	250	小泉川の旧流路
			10	川向井	5.23～6.3	110	小泉川の旧流路
		友岡	11	友岡	6.6～7.27	140	小泉川の旧流路
		調子	12	調子	11.21～2.10	270	奈良～平安時代の柱 穴、弥生～古墳時代の 土器を含む流路跡多数

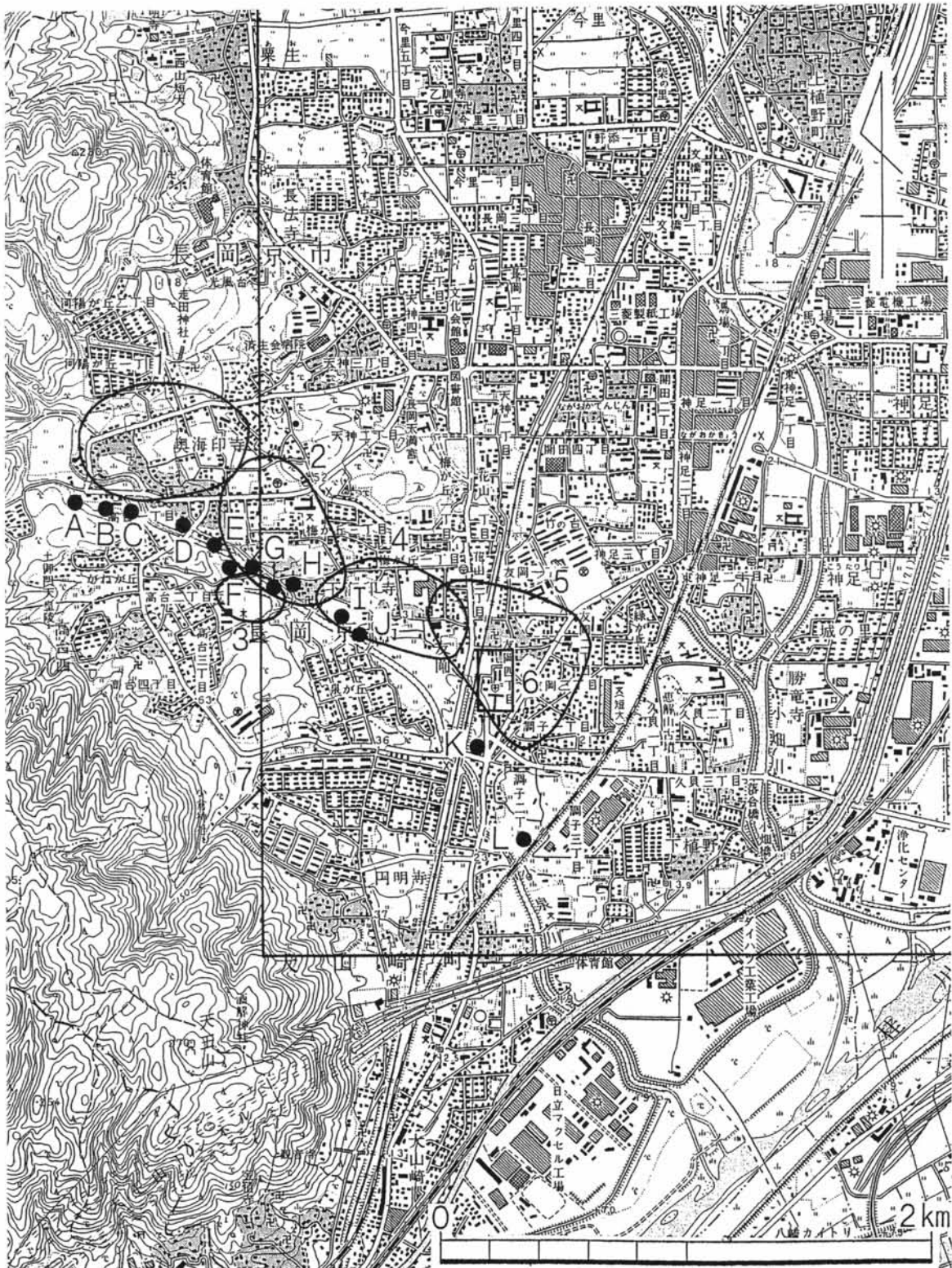
(1) ^{ながおかしやう}長岡京跡右京第852次・^{しもかいいんじ}下海印寺遺跡第23次

1. はじめに

長岡京市下海印寺西条地区では、平成16年度の試掘調査(長岡京跡右京第842次)により、弥生～奈良・平安時代にかけての土器片が出土するとともに柱穴列などを確認した。今回の調査は、その周囲を拡張して、面的発掘調査を行ったものである。

調査地は、長岡京跡では右京七条四坊十四町、西京極大路(旧条坊呼称では、右京七条四坊十六町、西京極大路)に相当し、長岡京跡右京第852次調査として実施した。この調査地は、縄文時代を主体とする下海印寺遺跡の範囲内にもあたり、下海印寺遺跡第23次調査となる。また、長岡京の祭祀場として著名な西山田遺跡に隣接する。西条地区の発掘調査は、平成17年6月8日～10月21日までの間を要し、約970㎡の調査を行った。

調査は排土置き場が十分に確保できなかったことから、北半の調査(北トレンチ)を行った後、南半部(南トレンチ)の上土で北半部を埋め戻して全体の調査を行った。



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000西南部・東南部を基に作成)

- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|----------|----------|
| 1. 奥海印寺遺跡 | 2. 下海印寺遺跡 | 3. 西山田遺跡 | 4. 伊賀寺遺跡 | 5. 友岡遺跡 |
| 6. 鞆岡廃寺 | 7. 長岡京跡 | | | |
| A: 片山田遺跡 | B: 荒堀地区 | C: 高台地区 | D: 火ノ尾地区 | E: 駿河田地区 |
| F: 菩提寺地区 | G: 尾流地区 | H: 西条地区 | I: 上内田地区 | J: 川向井地区 |
| K: 友岡地区 | L: 調子地区 | | | |

(直線区画部は長岡京跡の推定範囲)

2. 調査概要(第2図・図版第1)

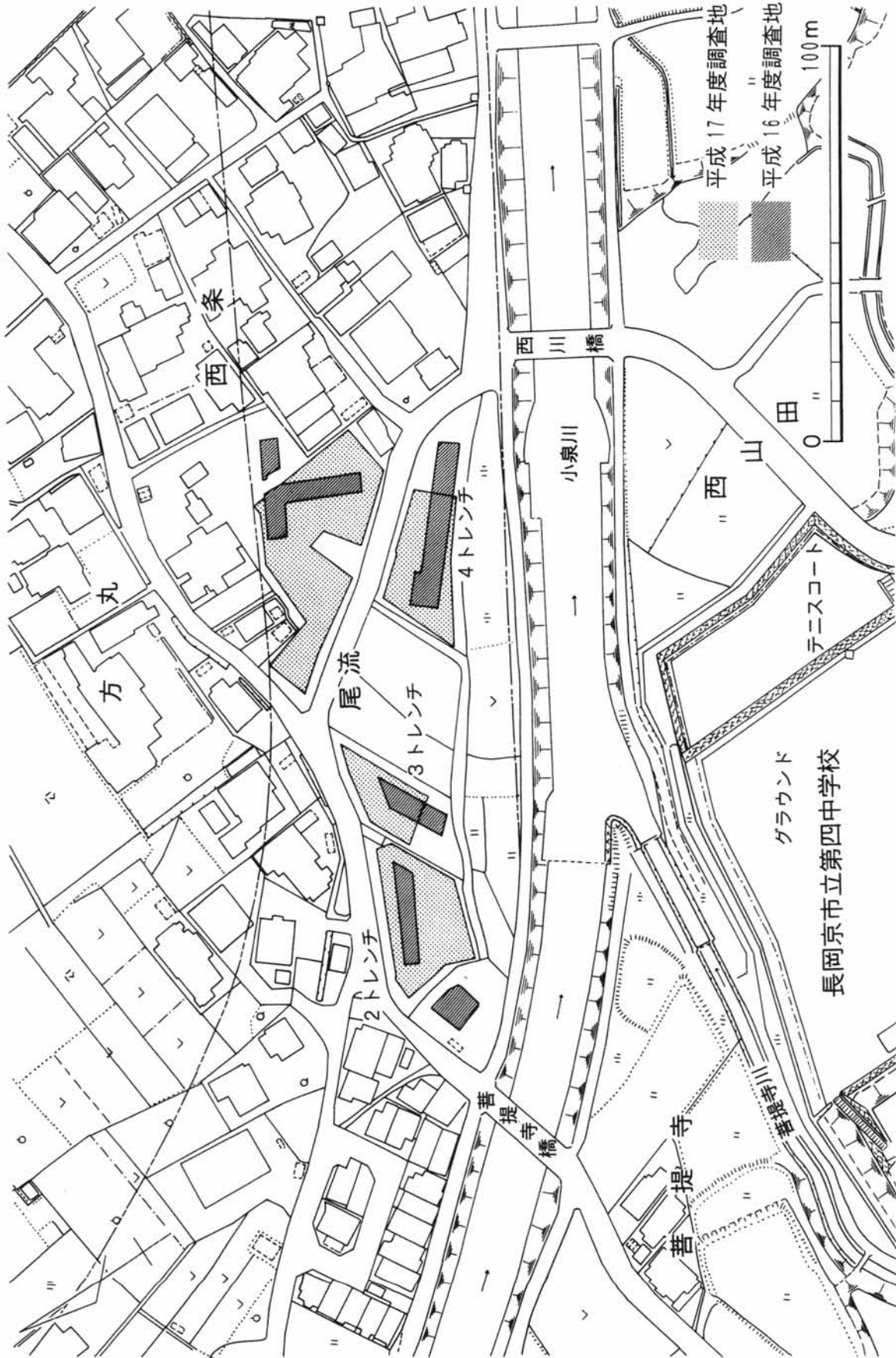
今回の調査地は、小泉川の東岸に形成された段丘上に立地しており、調査地の西辺を画する市道の南辺に沿って、段丘崖面が観察できる。この段丘崖面の西側には、時代によってその流路を変えた小泉川の砂礫層が厚く堆積しており、この上位に弥生時代～近世の遺構が分布している。

調査地北半部では、標高37m前後に、淡黄茶色礫混じり土(西壁24層)があり、この下面が段丘礫の地山となり、遺構検出面となっている。調査地の南半では、標高36.8m付近に、淡黄褐色砂質土(南トレンチ西壁9層)が堆積しているが、調査地の南端付近ではやや下る地形となり(斜面S X51)、9層の下に11～13層が堆積しており、弥生時代～奈良・平安時代の土器片が含まれていた。13層下面より柱穴をはじめとする遺構が掘り込まれていた。13層の下には15～17層が堆積しており、この下位が段丘礫の地山と判断する18・19層である。15～17層には細かな土器片が包含されているが、形状が分かるものはなく、その詳細は不明である。この斜面S X51は調査地の南辺から約5.5mにわたって、約1mの比高差を有する崖面となり、尾流地区の調査トレンチへと続いていくものである。

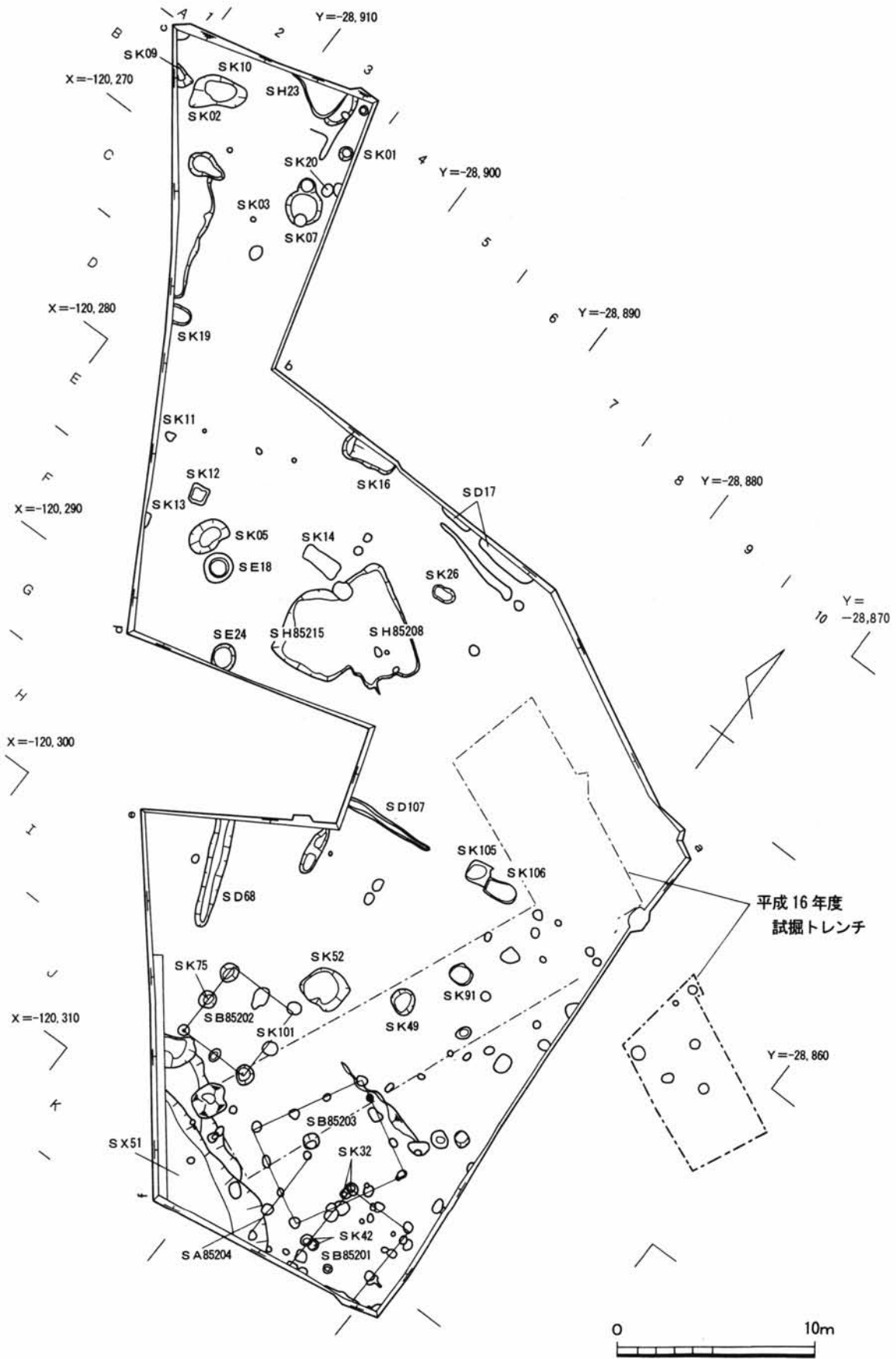
後述のように、北半では現代の土坑が大半であるのに対して、南半では掘立柱建物跡をはじめとし、多くの柱穴や土坑を検出した。これは、北半が後世に大きく削平を受けて、かつてあった遺構群が消失したためと考えられる。土層の観察によると、調査地の南端付近で観察される11～13層には、弥生時代～奈良・平安時代にいたる土器片が含まれており、当時の生活面を覆う包含層である。これに対応する土層が、調査地の北半では認められないことから、北半部分は南半と比べて、人為的もしくは自然の影力による削平の度合いが大きかったと推測され、それゆえ、大半の遺構が消失したと判断するものである。

調査により、掘立柱建物跡3棟、柵列1条、竪穴式住居跡と判断される遺構2基、そのほか、竪穴式住居跡の可能性のある土坑、現代の土坑多数を検出した。特に、現代土坑は、調査地の北半で多く見つかっており、大正時代末頃から平成元年まで、この地で「野鍛冶」を営んでいた加茂家に関連する遺構である。加茂家は、この地で鋤・鍬などの打ち物類、鎌・鉞などの刃物、鍛造農具全般の製造・修理を行っており、長岡京市教育委員会により詳細な報告がなされている^(注2)。以下、主要な遺構について概述する。

竪穴式住居跡S H85208・15(第3・7図、図版第5-(1)・(2)) 調査地の中央部やや北側、6・7-E・F区で検出した竪穴で、竪穴式住居跡と判断されるものである。土層の観察から、竪穴式住居跡S H85208が竪穴式住居跡S H85215に後出するものである。それぞれの床面では、明瞭な形で支柱穴を検出できなかった。床面で検出したピットの深さは、4～15cm程度の深さしかなく、支柱穴としては浅いものである。竪穴式住居跡S H85208が5.0m×3.5m、検出高が最大で30cm、竪穴式住居跡S H85215が4.2m×4.2m、検出高は最大で30cmである。竪穴の埋土中からは土師器と須恵器杯身・杯蓋片が出土したが、床面での遺物の出土はなかった。竪穴の西辺には竈状の焼土が分布しているが、焼土内および周辺からは炭化物の出土がなく、竈と認定しがたい点もある。しかし、焼土の内部から甑の破片が出土しており、竈と認定した上で報告するも

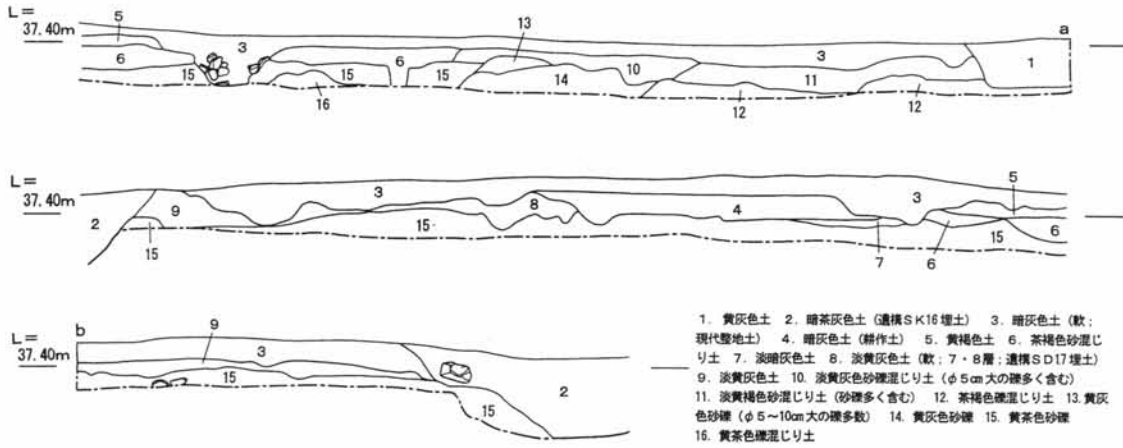


第2図 西条・尾流地区トレンチ配置図

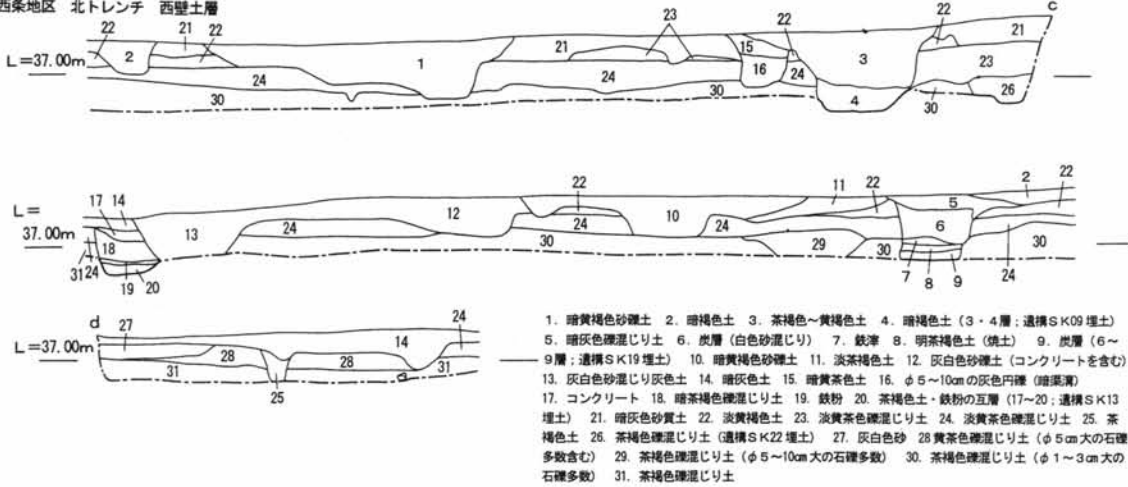


第3図 西条地区検出遺構平面図

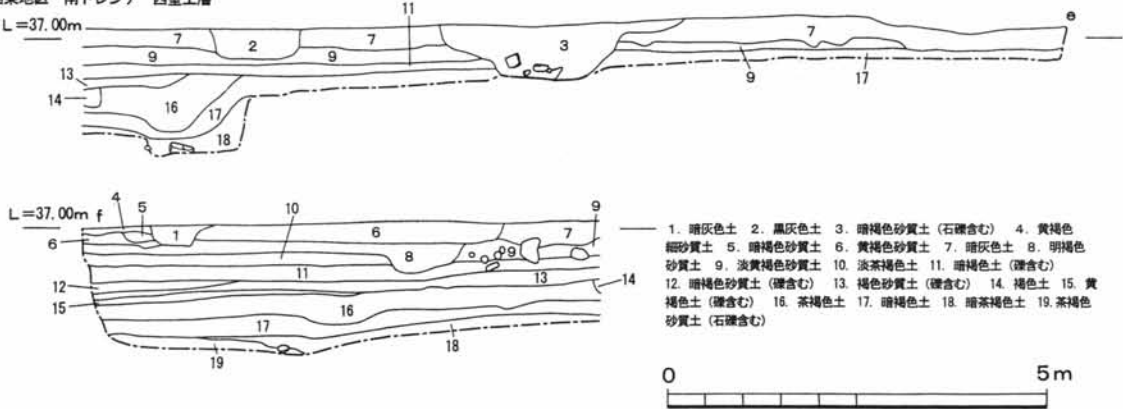
西条地区 北トレンチ 北壁土層



西条地区 北トレンチ 西壁土層

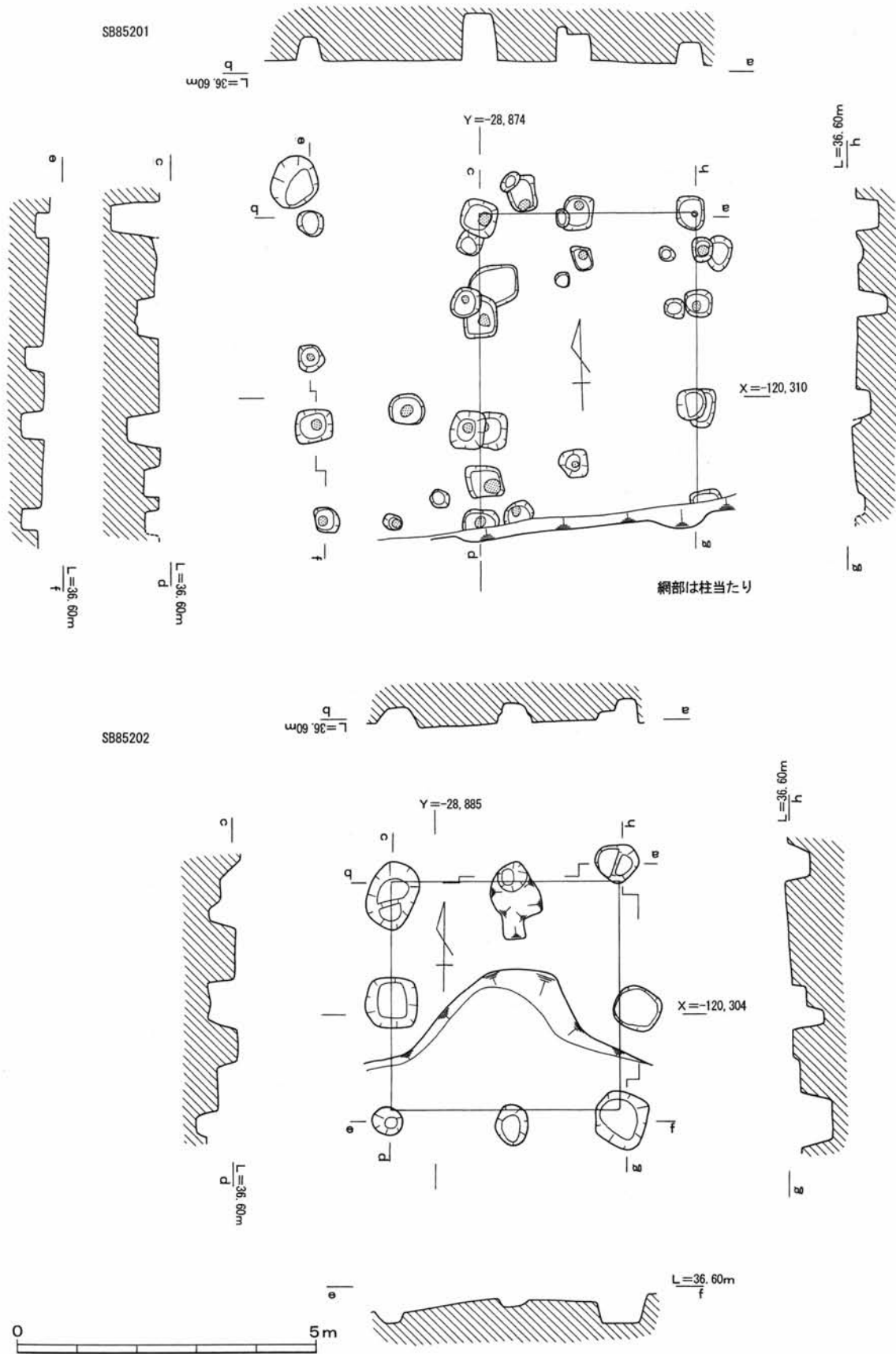


西条地区 南トレンチ 西壁土層



第4図 西条地区北トレンチ北壁・西壁、南トレンチ西壁土層図

のである。この竈は、竪穴との位置関係から、竪穴式住居跡SH85208に伴うものと判断される。規模は、長さ1m、裾部の幅90cm、上底の幅55cmである。煙道・焚き口部を確認するために、サブトレンチを設定したが、その断ち割りのため、煙道・焚き口部の北辺部を消失してしまった。



第5図 西条地区掘立柱建物跡遺構実測図

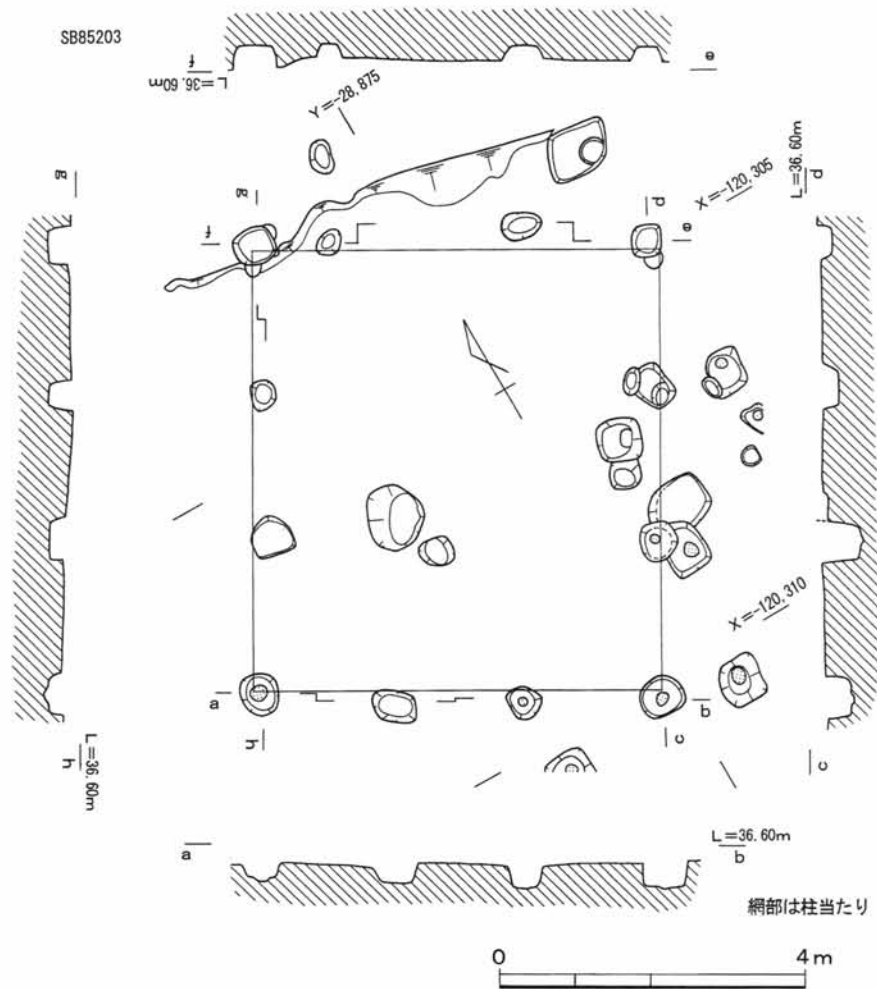
図上では、幅25cm程度の焼き口に復原できる。

竪穴式住居跡 S H 23 (第3図、図版第5-(3)) 調査地の北端部、3B区で検出した土坑で、東西3m、南北3mの平面形が三角形に検出した。埋土中から須恵器片が出土しており、方形竪穴式住居跡の一部である可能性がある。

掘立柱建物跡 S B 85201 (第3・5図、図版第3) 調査地の南端、9・10-J・K区で検出した掘立

柱建物跡で、東西2間、南北3間以上の南北棟に復原できる。主軸はほぼ真北を向いており、桁行・梁行ともに柱間は1.8mである。柱穴は50~60cmの方形を呈する。一部の柱穴には柱穴が切り合っており、建て替えもしくは重複した建物があるものと判断される。柱穴の埋土中から第9図6・7の須恵器杯身片が出土しているが、柱穴の切り合い関係を認定する以前に出土したものであり、先後のいずれの柱穴から出土したものは認定できなかった。柱筋が同じ方向に揃うこと、柱穴の大きさも同程度であることから、建て替えもしくは重複した建物は近接した時期のものだと判断される。奈良~平安時代のものと捉えられる。

掘立柱建物跡 S B 85202 (第3・5図、図版第4-(1)) 調査地の南端付近の西側、7・8-I・J区で検出した掘立柱建物跡で、2間×2間に復原できる。柱穴の並びはほぼ真北を向いている。柱当たりを検出できなかったため、やや不確かなところがあるが、柱間1.8m程度に復原できる。柱穴は一辺70cm~110cmの円形に近い隅丸方形を呈しており、掘立柱建物跡 S B 85201より一回り大形の柱穴を有する建物である。柱穴の規模から、総柱の倉庫状の建物と判断されたが、中央の柱穴を検出することはできなかった。他の柱穴と比べて浅かったために、削平を受けて消失したとも考えられる。掘立柱建物跡 S B 85201の西北隅に位置する柱穴は、掘立柱建物跡 S B 85202南東隅に位置する柱穴を基準にすると、北に1.1m、西に8mの位置にあたる。柱穴内から



第6図 西条地区掘立柱建物跡遺構実測図

第9図の土師器甕(9)、土師器鍋(10)が出土しており、長岡京期から平安時代初頭のものと同判断される。

掘立柱建物跡S B85203(第3・6図、図版第4-(2)) 8・9-J・K区で検出した、3間×3間の掘立柱建物跡で、主軸は北で東に約30°振れている。柱間は南北が1.95m、東西が1.8mである。柱穴は径40~60cmの円形を呈する。掘立柱建物跡S B85201の柱穴と切り合い関係を有しており、掘立柱建物跡S B85201に後出するものである。各柱穴から土師器小片が出土しているが、時期を決定できる遺物は出土していない。

柵列S A85204(第3・5図、図版第3) 調査地の南端、8-J・K区で検出した柵列である。掘立柱建物跡S B85201の西側2.7mの位置に設けられた柵列で、4基の柱穴を確認し、南北4間以上の柵列である。ほぼ真北を向いており、柱間は1.2m程度に復原できる。柱穴は一辺40~50cmの方形を呈しており、掘立柱建物跡S B85201のものより一回り小さい。北端の柱穴は、掘立柱建物跡S B85201の北辺と柱筋を揃えるため、同建物との関連が想定される。

土坑S K26(第3・7図、図版第6-(1)) 竪穴式住居跡S H85208・15の北東部、7E区で検出した平面がだ円形の土坑で、長軸1.15m、短軸0.75m、検出高15cmを測る。内部に土師器高杯が破碎されて埋まっており、接合するとほぼ完形に復原できたが、杯部と柱部との接点は失われていた(第8図15・16)。

溝S D107(第3図、図版第7-(2)) 調査地のほぼ中央、7・8-G区で検出した溝で、ほぼ東西方向に設けられており、東で北に約2°振れる。幅55cm、検出高は最大で8cmで、断面「U」字状を呈した浅い溝である。長さ4.8mにわたって検出した。遺物は出土しなかった。

溝S D68(第3図、図版第6-(2)) 調査地の中央やや南側、6・7-H・I区で検出した南北溝で、幅0.9~1.1m、検出高は最大で10cmで、5.6mにわたって検出した。内部から土師器片が出土している。

土坑S K49(第3図) 調査地の南半のほぼ中央、9H区で検出した。直径1.2m、検出高35cmで、平面が円形に近い土坑である。埋土は暗褐色礫混じり土で、奈良~平安時代の土師器高杯片、須恵器甕体部片が出土している。

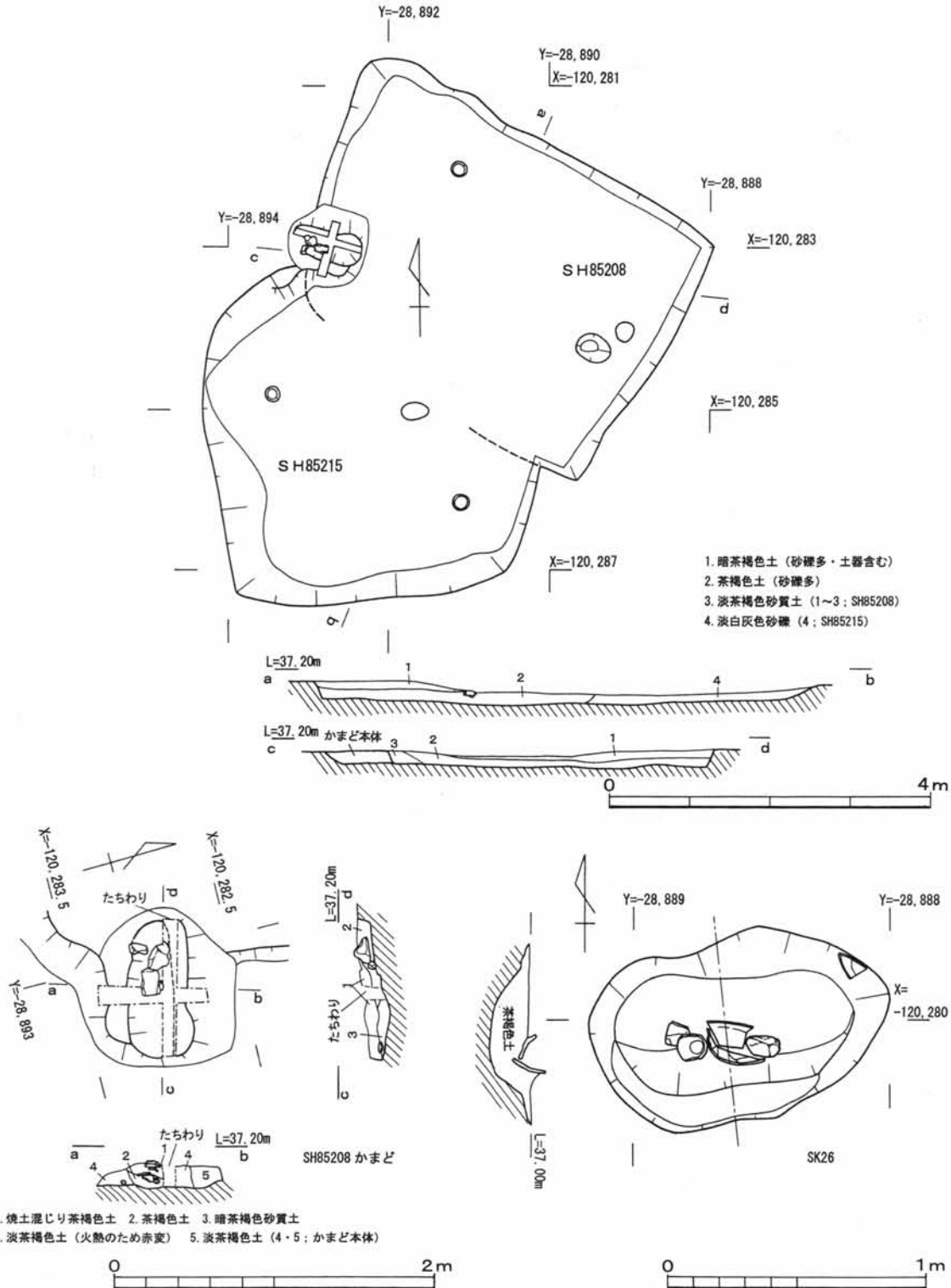
斜面S X51(第3図) 調査地の西南隅、8・9-J・K区で検出した斜面で、比高差約1mを測る。この斜面を埋める土砂からは、弥生時代後期を中心とする土器片が多く出土した。

土坑S K91(第3図) 9H区で検出した土坑で、平面形は隅丸方形を呈する。規模は、1.1m×1.05m、検出高14cmである。埋土は暗褐色礫混じり土で、土師器小片が出土している。

土坑S K105・106(第3図、図版第6-(3)) 調査地中央部、9G区で検出した土坑で、重複関係を有するものである。土坑S K106が後出する。土坑S K105の東端はサブトレンチによる断ち割りのため確認できなかった。規模は、土坑S K105が長さ1.2~1.4m(推定)、幅1.1m、検出高約25cm、土坑S K106が幅0.8~0.9m×1.7m、検出高約20cmである。両土坑の埋土から古墳時代須恵器杯身片・杯蓋片、土師器小片が出土した。土坑S K106から出土した遺物は、第8図11・14の土器が図化できた。

土坑SK10(第3図) 調査地北端2B区で検出した土坑で、土坑SK02と重複しており、土坑SK02に先行するものである。幅1.2m、長さ0.6mで、検出した深さ約30cmである。内部から緑釉陶器片をはじめとして、須恵器・土師器小片が出土しており、奈良時代末から平安時代前期のものと思われる。

今回の調査地北半部は、平成元年まで、加茂家により鍛冶屋が営まれていたところであり、そ



第7図 西条地区竪穴式住居跡SH85208・85215、土坑SK26遺構実測図

れに関連する遺構を多数検出している(第3図)。

土坑SK02(第3図、図版第7-(1)) 調査地の北西部、2B区で検出した土坑で、1.5m×2.2m、検出高約50cmである。内部には現代陶磁器類・瓦が廃棄されていた。土坑SK10を切っ
て設けられる。

土坑SK05(第3図) 5F区で検出した土坑で、長軸2.1m、短辺1.15~1.5m、深さ約45cmの
隅丸方形を呈する。内部からは現代の陶器片が出土した。

土坑SK07(第3図、図版第7-(2)) 3B区で検出した土坑で、長辺1.4m、短辺1.05m、検
出高15cmの土坑に、現代の甕が据えられていた。

土坑SK09(第3図) 調査地の北端部付近、1B区で検出した土坑で、現代陶磁器片、棧瓦が
出土している。現代の廃棄土坑である。

土坑SK16(第3図、図版第7-(3)) 5D区で検出した土坑で、北半は調査地外にある。長
さ2.8m、幅1m以上、検出高約70cmである。現代の廃棄土坑で、土坑内には大量の鍛冶関連の
鉄素材などが廃棄されていた。

土坑SK19(第3図、図版第15) 3D区で検出した土坑で、平面形は長さ1.2m以上、幅95cm
の長楕円形を呈し、検出高約10cmを測る。西半はトレンチ外にのびる。トレンチ西壁で土層の堆
積を見ると、深さ65cmの土坑であり、埋土は上から、炭層(約30cm)、鉄滓(約10cm)、焼土(約
10cm)、炭層(約15cm)が堆積していた。

土坑SK52(第3図) 調査地中央部やや南側、8H・I区で検出した土坑である。2.1m×2
mの隅丸方形で、検出高40cmである。埋土は暗褐色土で、現代の陶器片が出土している。

鍛冶関連遺構SK11(第3図、図版第9-(1)) 4E区で検出した焼土で、径50cm、深さ7~
8cmにわたって焼土が拡がっていた。鍛冶に伴う火床に関するものであろう。

鍛冶関連遺構SK12(第3図、図版第9-(2)) 4E区で検出した土坑で、50cm×70cmの方形
状に、黒色をした鉄粉が薄い膜となり幾重にも重なっていた。土坑の深さは8cmである。土坑の
周囲は、幅12~22cmの範囲にわたって熱を受けて赤化していた。熱した鉄をカナトコの上で叩い
たときに、鉄表面の酸化鉄が飛び散り、薄い膜状に堆積したものと判断される。

鍛冶関連遺構SK13(第3図、図版第9-(3)) 4F区で検出した土坑で、鍛冶関連遺構SK
12と同様の鉄粉の堆積を示すことから、カナトコまわりの土坑であろう。平面的には最下面の鉄
粉の堆積だけを検出したに留まったが、調査地西壁の土層の観察では、上から、コンクリート、
暗茶褐色礫混じり土が厚さ約40cmで堆積していた。径80cm程度、深さ55cmの穴を穿ち、内部で火
を焚いた後、埋め戻した状態である。

鍛冶関連遺構SK14(第3図、図版第8-(2)・(3)) 竪穴式住居跡SH08・15の西側、5・6
E区で検出した遺構で、全長2.1m、幅85cmの平面長方形に検出した。東西で構造が異なり、東
側は東西95cm、南北85cmの方形に2か所セメントが打たれており、西辺のセメントの境界付近に
は、径9cmの穴がセメントに穿たれている。何らかの基礎をなしていた状況である。西半には、
セメント基礎より50cmの空間を空けて50cm×55cmの方形状に鉄粉が固まって堆積していた。この

状況は、鍛冶関連遺構SK12と同じであり、カナトコ周辺に飛び散った鉄粉の堆積と判断された。総じて、東側のセメント基礎には鍛冶関連の電動工具が据えられおり、その西側にはカナトコが据えられていたと推定される。

井戸SE18(第3図、図版第8-(1)) 5F区で検出したモルタル製の水槽で、径1.5m、検出高30cmの円形の土坑中に、径約1mのモルタル製の水槽が据えられている。モルタルの厚さは約10cmである。加茂家の水回りに関連するものであろう。

井戸SE24(第3図) 5F区で検出したもので、径1.25mの円形を呈し、検出高は約35cmである。現代の陶器片が出土している。

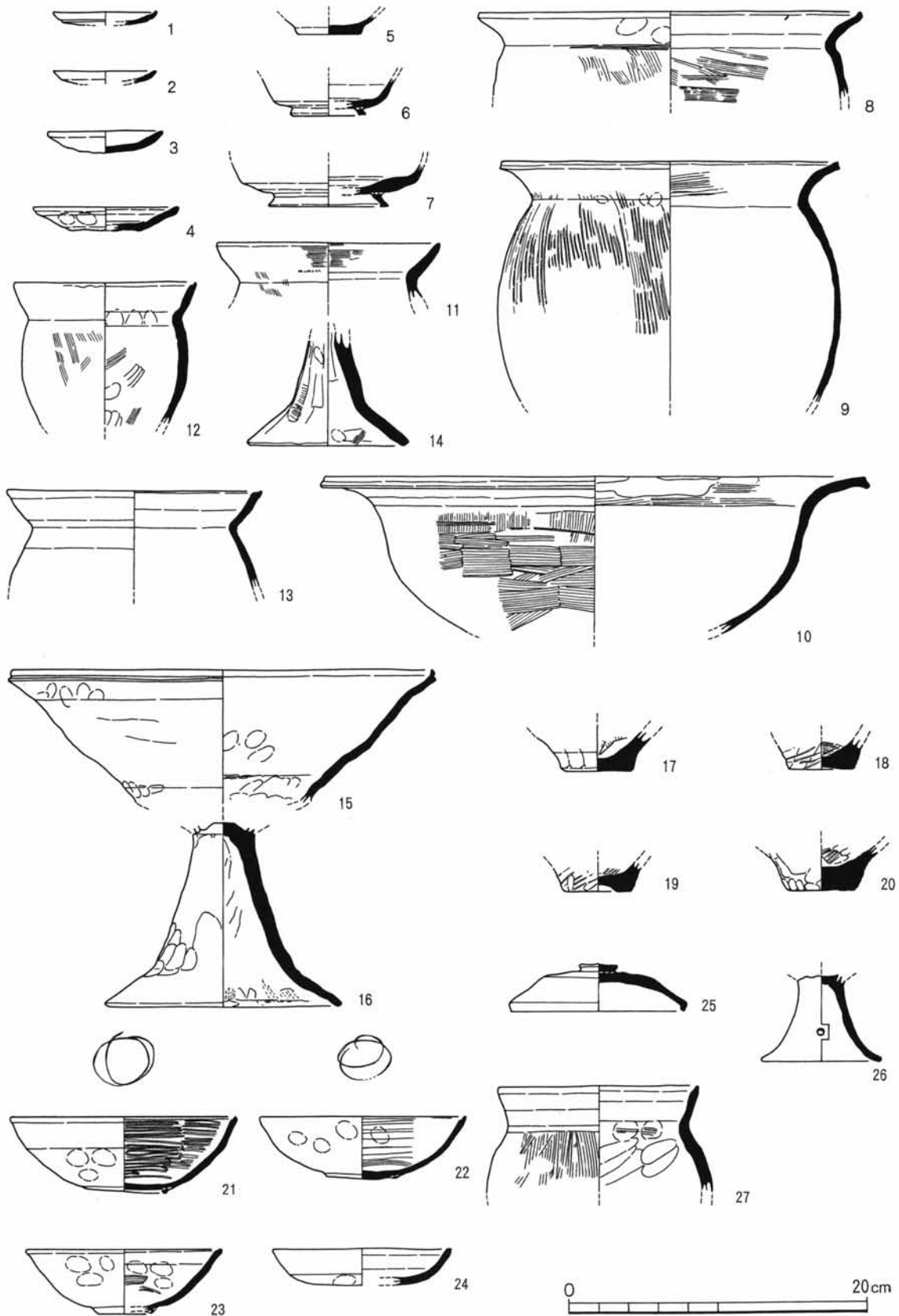
以上のように、調査地の中央部から北半では現代より古い段階の遺構の分布は希薄であり、後世の削平により大多数の遺構は消失した可能性が高い。

3. 出土遺物(第8図、図版第10)

遺物は、弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代、中世、近世の土器が出土した。細片が多く、実測図を作成できたのは、第9図に示したもので、ほぼ全てである。1～20は各遺構から出土したもので、21～27は包含層中もしくは遺構精査時に出土したものである。

1・2の土師器皿は、調査地の北端部の土坑SK07から出土した。ともに径7.0cmで、器高0.8～0.9cmを測る。底部の屈曲部に段を有するものである。3の土師器皿は、その北側の土坑SK01から出土したもので、径7.7cmで、器高1.4cmを測る。1・2と比べてやや大形のものである。近世初頭のものとして判断される。4～10は奈良～平安時代の土器である。4は土坑SK20から出土した土師器皿で、口径9.8cm、器高1.6cmを測る。平坦な底部から体部が屈曲して立ち上がり、口縁端部には面を有している。体部は指オサエにより調整している。5は土坑SK10から出土した緑釉陶器の椀底部で、底部は糸切りがなされている。底部径4.2cmを測る。6・7の須恵器杯は、掘立柱建物跡SB85201の柱穴から出土したものである。柱穴の切り合い関係を確認する以前の検出時に出土したため、いずれの柱穴から出土したものは不明である。6は柱穴SK42から出土した須恵器椀で底径5.0cmを測る。7は柱穴SK32から出土した須恵器杯で底径8.0cmを測る。8の土師器甕は土坑SK10から出土したもので、体部から「く」の字に屈曲する口縁がつき、口縁端部は上方にわずかに肥厚している。口径25.8cmを測る。9・10はともに掘立柱建物跡SB85202を構成する柱穴から出土した。9の土師器甕は柱穴SK75出土で、口径23cmを測る。球形に近い体部から、「く」の字に屈曲した口縁が付き、口縁端部は強くヨコナデされているため、やや外反気味になっている。10は柱穴SK101より出土した土師器鍋で、口縁部径36.4cmで、外面にはススが付着している。これらの土器は、長岡京期とも考えられる土器群である。

11～16は古墳時代の土器である。11の土師器甕は土坑SK106から出土し、口径15cmを測る。12・13の土師器甕は竪穴式住居跡SH85208の埋土から出土した。12は口径12.4cm、13は口径17.6cmを測る。14は土坑SK106出土の土師器高杯脚部で底径11cm、器高7.5cmを測る。15・16の高杯は、土坑SK26から出土したものである。明らかに同一個体であるが、杯部と柱部の接合点



第8図 西条地区出土遺物実測図

はなかった。口径29cm、器高21.3cmに復原できる大型品である。

17～20の弥生土器甕底部は、すべて調査地南西端で検出した斜面S X51から出土したものである。17の底部外面は板状の工具で面を作っており、18～20はタタキ目が残る。17・18の内面は、ハケ状工具を回転させて蜘蛛の巣状のハケメがあるのに対して、19・20は縦方向のハケメが見て取れる。これらは弥生時代後期のもので、この斜面下に位置する尾流地区の調査(長岡京右京第862次調査)で、多くの同時期の弥生土器が出土している。17は底径5.0cm、18は底径4.4cm、19は底径4.8cm、20は底径4.4cmを測る。

21～23は瓦器椀で、2 B・3 B地区の包含層中で出土した。21は口径15.2cm、器高5.1cm、22は口径14.0cm、器高4.2cm、23は口径13.2cm、器高4.5cmを測る。24は土師器皿で、6・7 H区で出土した。口径12.0cm、器高2.5cmを測る。25は須恵器坏蓋で、口径11.7cm、器高3.3cmで9 J地区より出土した。26は須恵器高杯脚部で、底径8.0cmで3 A・B地区より出土した。27は土師器甕で口径13.4cmで6・7-E・F区の包含層中および精査中に出土した。

4. 小結

今回の西条地区の調査では、ほぼ真南北に主軸をもつ掘立柱建物跡・柵列を検出した点が特筆される。これらの建物跡などは、東・南方向に拡がる様相を示し、掘立柱建物跡S B85201が南北棟であることを考慮すると、調査地の東・南側には正殿に比定されうるような東西建物が存在している可能性が高い。これらの遺構群は、柱穴から出土した遺物から、長岡京期を中心とする奈良～平安時代の範疇で捉えられるものである。この調査地は、長岡京の条坊復原でみると、右京七条四坊十四町にあたり、近傍に西京極大路が想定される位置にある。長岡京の西端に関しては、今までの調査では西京極大路の検出は見えていないが、近年、西京極大路に面した町にまで、南一条条間南小路が造営されていることが判明しており、部分的ではあるが、長岡京はその西端付近まで建設されていたことが明らかとなっている^(注3)。今回検出した掘立柱建物跡群が長岡京期のものであるならば、長岡京の西南域における都城の建設状況を示す資料として重要である。また、西側約20mのところ、今年度に調査を実施した長岡京跡右京第862次調査の尾流地区4トレンチでは、ほぼ南北を向く溝S D03を約10mにわたって検出しており^(注4)、西条・尾流地区周辺に正方位を指向する遺構群が分布している可能性も認められる。

さらに、西山田遺跡との関係も重要である。今回の調査地の西側には西山田遺跡が所在しており、小泉川を挟んだ対岸約120m西南方では、多量の土馬やミニチュア竈、墨書人面土器が出土した流路跡が調査されている^(注5)。これらの土製品は、長岡京における国家的な祭祀が行われた際の遺物と評価されており、西山田遺跡は国家的な祭祀場と考えられている。今回の調査地は、この祭祀場に隣接していることから、国家的な祭祀場に附属する施設である可能性も指摘できよう。

近年、長岡京の条坊計画についても研究が進展しており、調査地近辺に西京極大路が想定されているところでもある。今後の周辺の調査が期待される。

(岩松 保)

(2) ^{ながおかきょう}長岡京跡右京第862次・^{しもかいんじ}下海印寺遺跡第24次・^{にしやまだ}西山田遺跡

1. はじめに

調査地は長岡京跡右京七条四坊十四町、西四坊大路(旧条坊では右京七条四坊十六町、西四坊大路)にあたり、下海印寺遺跡の範囲内にある。下海印寺遺跡では、今までに縄文時代後期の土坑や集石遺構、古墳時代の竪穴式住居跡や奈良～平安時代の掘立柱建物跡などが調査されており、そのほか、遺物だけであるが、旧石器時代のナイフ形石器なども発見されている。また、調査地と小泉川を挟んだ対岸にある沖積段丘斜面には、墨書人面土器・土馬・ミニチュア竈などがまとまって出土した西山田遺跡があり、長岡京西端部の祭祀場として知られている。

今回の調査地は、昨年度実施した試掘調査で、弥生時代後期の土坑・土器集積遺構、古墳時代の流路跡、時期不明の小ピットなどを検出しており、その性格を明らかにするために面的調査を実施したものである。

調査地は、昨年度の4か所の試掘調査トレンチのうち、遺構、遺物の検出が顕著であった2～4トレンチの周囲を拡張して実施した(第2図)。

調査の結果、竪穴式住居跡3基、掘立柱建物跡、溝、多数の土坑を検出した。調査面積は約1,280㎡で、調査期間は平成17年11月7日～平成18年2月23日である。

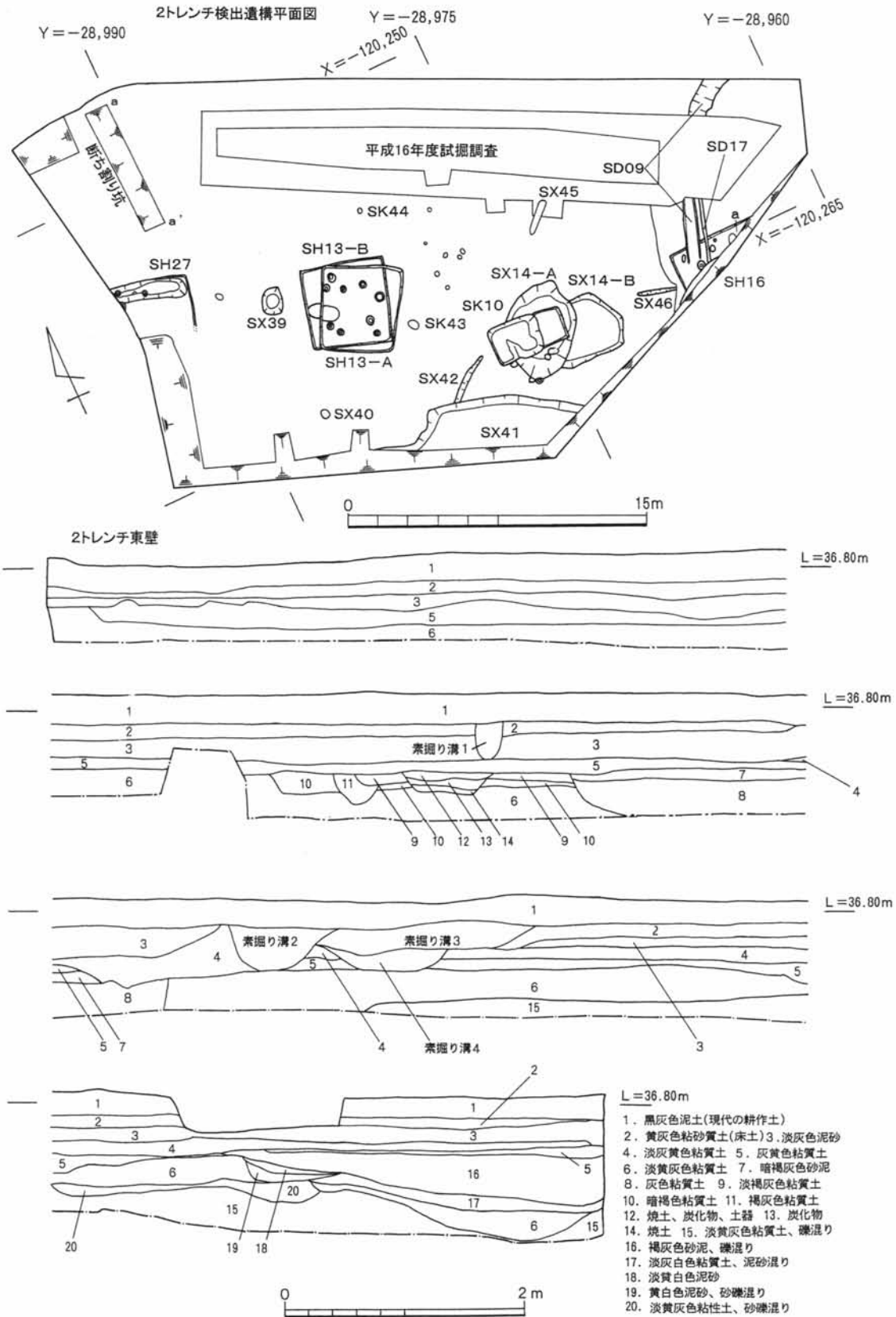
2. 調査概要

(1) 2トレンチ(第9図、図版第12)

平成16年度試掘トレンチの中央南端部から弥生土器甕がほぼ一固体分を出土したことにより、この広がりを目指すために、500㎡のトレンチを設定した。この結果、弥生土器の土器溜まりSX45などを確認した。このほか、中・近世の素掘り溝2条、土坑1基、古墳時代の竪穴式住居跡4棟、土坑、弥生時代の土坑、縄文時代の焼土坑、時期不明の遺構などを検出した。なお、竪穴式住居跡SH13は、建て替えにより、主軸の方位がわずかに異なる2基の住居が重複しており、その重複関係から先行するものをSH13-A、後出のものをSH13-Bとした。

調査区の基本層位をみると、2～4層は近世・中世の遺物包含層で、その下面である5層上面で、素掘り溝、土坑が検出された。5層は、土師器、須恵器、緑釉陶器などの遺物が含まれる平安時代の遺物包含層である。5層下からは古墳時代、弥生時代の遺構が検出された。6・16層はこの遺構の基盤層(沖積層)であり、縄文時代の遺物(土器類)が出土した。特に6層には多く含まれていた。なお、トレンチ北辺で幅5～7mにわたって近世以前の遺構が見られないのは、ほ場整備に伴って削平を受けたことによるものである。

溝SD09(第9図) トレンチの東端、3層から切り込む、南北方向に湾曲してのびる素掘り溝である。幅は、0.5～1.0m、深さ0.4mを測り、断面椀状を呈する。堆積土は、2層と3層の混合層である。近世の地境に伴うものである。



第9図 尾流地区2トレンチ検出遺構平面図、東壁土層図

土坑SK10 (第9図) 土坑SX14-Aを切り込む方形の土坑である。一辺1.2m、深さ0.4mを測り、断面は垂直に立ち上がり、底辺は水平である。堆積土は暗黒褐色泥土である。遺物は現代の陶磁器、瓦、レンガなどの遺物が夥しく出土した。水田あるいは畑地に伴う水溜め・肥溜め遺構と考えられる。

溝SD17(第9図) トレンチの東端、SD09下層で検出した南北方向に直線的にのびる素掘り溝である。幅は、0.2m前後、深さ0.2mを測り、断面椀状を呈する。堆積土は、青灰色砂質土である。中世の水田に伴うものである。

落ち込み遺構SX41(第9図) トレンチの南東隅、2層から切り込む落ち込み遺構である。深さ0.4mを測り、南側に下がる。堆積土はSK10に酷似する。恐らく、水田の一筆を拡張した祭の痕跡と考えられる。

溝SX42・46(第9図) 土坑SX14の東側と西側で検出した素掘り溝である。溝幅は、0.2～0.3m、深さ0.1mを測り、断面皿状を呈している。堆積土は淡灰色砂質土である。出土遺物は無かった。

土器溜まりSX45(第10図) トレンチの中央やや東側で検出した北東から南西方向の溝状遺構である。長さ2m、幅0.5m、深さ0.4mを測る。断面は椀状を呈し、堆積土は淡灰褐色砂質土である。溝内には弥生時代後期の土器が密集しており、ほぼ完形品に近い甕・壺・鉢などが重なりあって出土した。中央部南側では30cmの自然石一石が平坦面を上にして置かれていた。人為的に埋められたものと考えられる。この遺構の性格については、土器の廃棄土坑、あるいは、竪穴式住居跡内に穴を穿ちその中に土器を寄せ集めた遺構と考えられる。

竪穴式住居跡SH13-A (第11図、図版第11-(3)・12-(2)) トレンチ中央部、5層灰黄色粘質土下層で検出した方形の竪穴式住居跡である。東西4.2m、南北4m、深さ0.15mを測る。壁面は南壁を除き、垂直に立ち上がり、壁溝は確認できなかった。住居内の埋土は、主に淡暗褐色粘質土であり、炭化物・土器の碎片が含まれる。特に、西辺中央部では、焼土、炭化物が集中しており、その中から土師器、須恵器がまとまって出土した。この分布状況は、火災によるものでなく、竈が存在していた範囲を示しているものと思われる。床面から支柱穴を4個確認した。柱穴は円形を呈し、直径0.25～0.4m、深さ0.4mを測る。柱間寸法はP.51～P.55が1.85m、P.55～P.50が1.90m、P.50～P.53が1.80m、P.51～P.53が2.10mを測り、不揃いである。住居跡の時期は、出土した須恵器杯身や土師器からみて6世紀前半代と考えられる。

竪穴式住居跡SH13-B(第11図、図版第11-(3)・12-(1)) SH13-Aに重複して検出した方形の竪穴式住居跡である。東西4.1m、南北4.0m、深さ0.1mを測る。壁面は垂直に立ち上がり、SH13-Aと同様、壁溝は確認できなかった。住居内の埋土は、淡暗褐色粘砂質土であり、炭化物・土器の碎片がわずかに含まれる。西辺中央部では、焼土、炭化物が馬蹄形に広がり、その中心に土師器甕が出土した。また、西壁面北側では、土師器椀がまとまって出土した。やはり、SH13-Aと同様、竈が存在していた範囲を示しているものと思われる。床面から支柱穴を4個確認した。柱穴は円形を呈し、直径0.3～0.45m、深さ0.4mを測る。柱間寸法はP.54～P.48が

1.85m、P.48～P.56が1.80m、P.56～P.52が1.95m、P.54～P.52が1.85mを測り、四辺が割合揃っており平行四辺形を呈する。住居跡の時期はSH13-Aと同様、6世紀前半代のものと思われる。

竪穴式住居跡SH16(第11図、図版第13-(1)) トレンチ東端で検出した方形の竪穴式住居跡である。東西4.3m、南北1.7m以上、深さ0.2mを測る。壁面は垂直に立ち上がり、壁溝は無かった。住居内の埋土は、主に淡褐灰色粘質土、暗褐色粘質土である。北辺の中央部に、焼土、炭化物が集中しており、その中から土師器甕・椀、須恵器杯身がまとまって出土した。13層(炭化物)、14層(焼土)は、明瞭に分層できるが、固定された竈の本体は見つからなかった。住居跡の時期は出土した須恵器杯、土師器から、6世紀前半代のものと思われる。

土坑SH27(第12図) トレンチ西辺中央で検出した方形の土坑である。竪穴式住居跡の可能性のあるものの、遺存状況が悪く特定できなかった。検出部で、東辺1.5m以上、北辺2.5m以上、深さ0.1mを測る。土坑内の埋土は、主に淡緑灰色砂質土である。北辺部では、溝状にのびる土坑があり、上層は砂礫、下層は淡黄灰色粘砂質土が堆積する。

土坑SX14-A・B(第13図、図版第12-(3)) トレンチ東南部で不定形な土坑を2基重複して検出した。土坑SX14-Aは土坑SK10によって大きく削平を受けている。長軸4.0m、深さ0.5mを測り、断面は椀状を呈し、埋土は主に暗褐色粘質土である。出土遺物は古墳時代の土師器の細片である。土坑SX14-Bは長軸3.0m、深さ0.3mを測り、断面は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。土坑内には大礫が混在する。出土遺物は古墳時代の土師器、須恵器である。土坑SX14-AとSX14-Bは、形態、規模、埋土などが類似しているが、性格については不明である。時期については、古墳時代後期であるが、重複関係から土坑SX14-AがSX14-Bよりわずかな時間差であるが新しいものと考えられる。

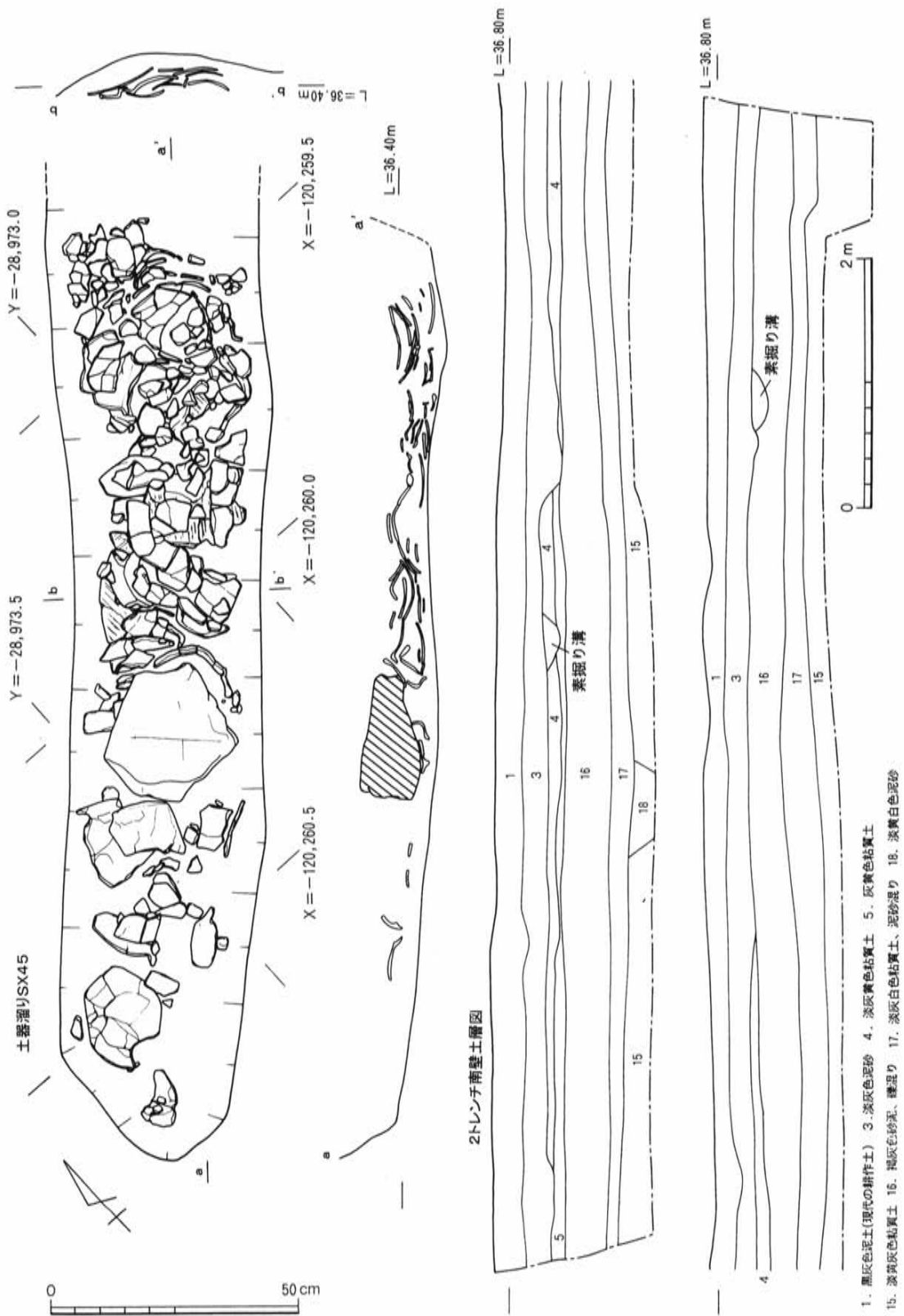
土坑SX39(第13図、図版第14-(3)) SH13の西側で検出した不定形な土坑である。最大長1.1m、深さ0.1mを測り、断面は皿状を呈し、埋土は茶褐色粘砂質土である。出土遺物は土師器細片が1点あった。

土坑SK43(第13図、図版第14-(1)) SH13の東側で検出した円形の土坑である。直径0.4～0.5m、深さ0.1mを測り、断面は皿状を呈する。埋土は暗茶褐色粘質土、暗茶褐色粘砂質土である。埋土内から弥生土器1個体分、自然石1個が出土した。

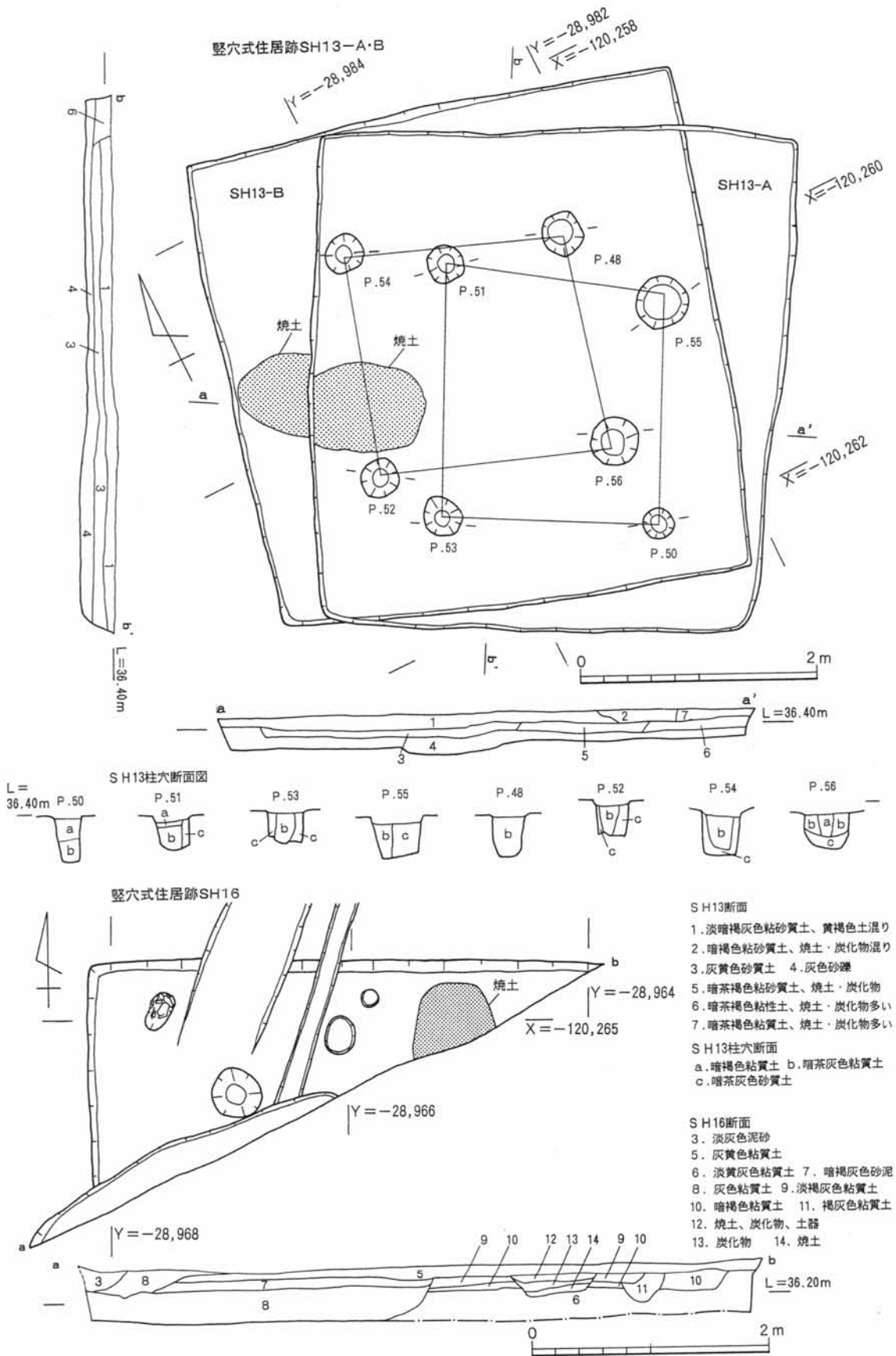
土坑SK44(第13図、図版第14-(2)) SH13の北側で検出した円形の土坑である。直径0.35m、深さ0.3mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘質土、茶褐色粘質土である。土坑内から弥生土器甕の肩部が出土した。時期は、弥生時代後期である。

(2) 3 トレンチ(第14図)

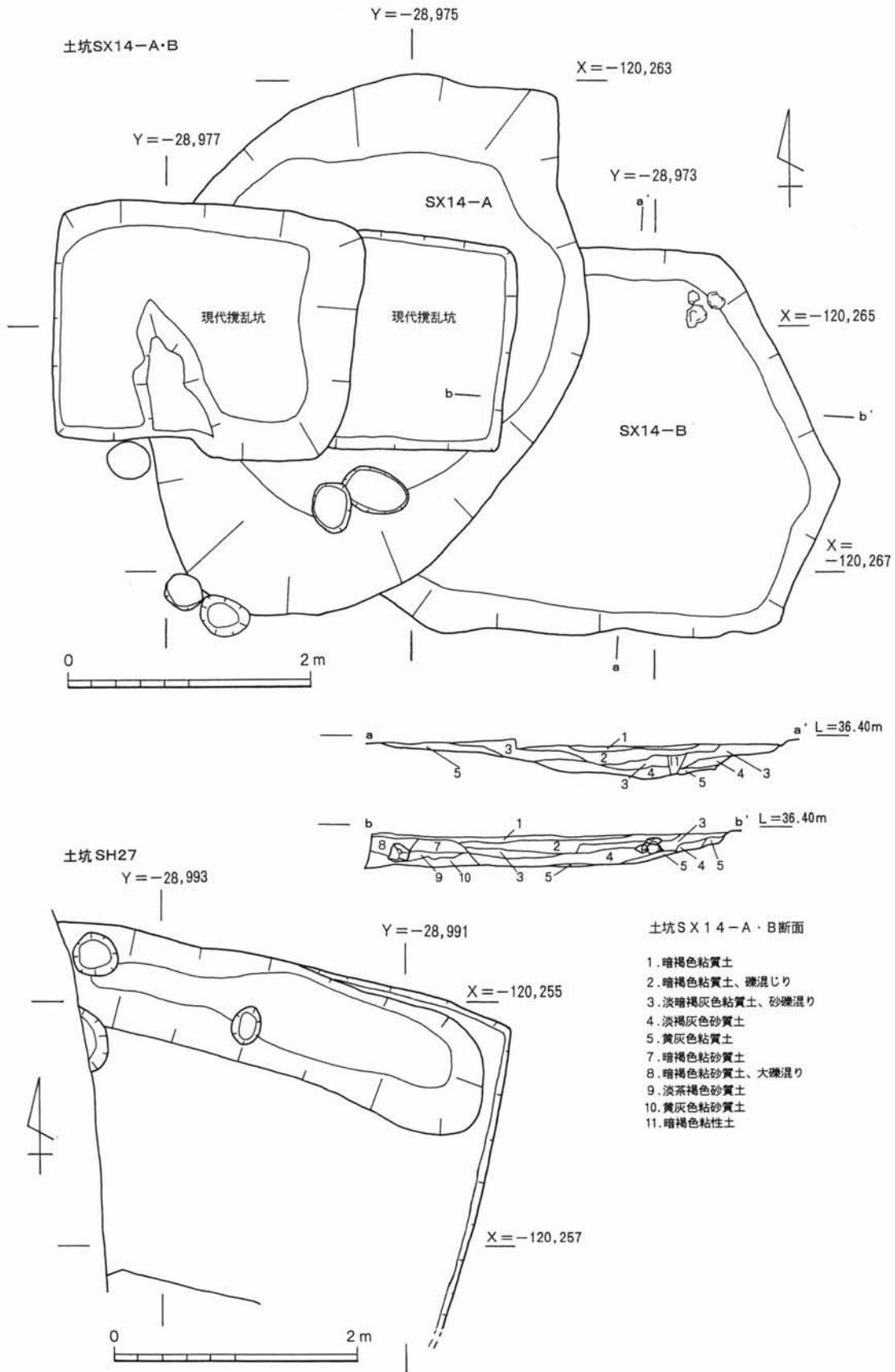
平成16年度試掘調査では、素掘り溝、土器類などが確認されており、この成果を受けて230m²のトレンチを設定した。調査の結果、中・近世の素掘り溝4条、木製暗渠排水溝、柱穴群を検出した。柱穴は、柵列あるいは竪穴式住居跡の主柱穴と思われるものを含め10数個を確認した。柱穴のいくつかには土器の細片が出土したのがあり、古墳～平安時代までのものと考えられる。



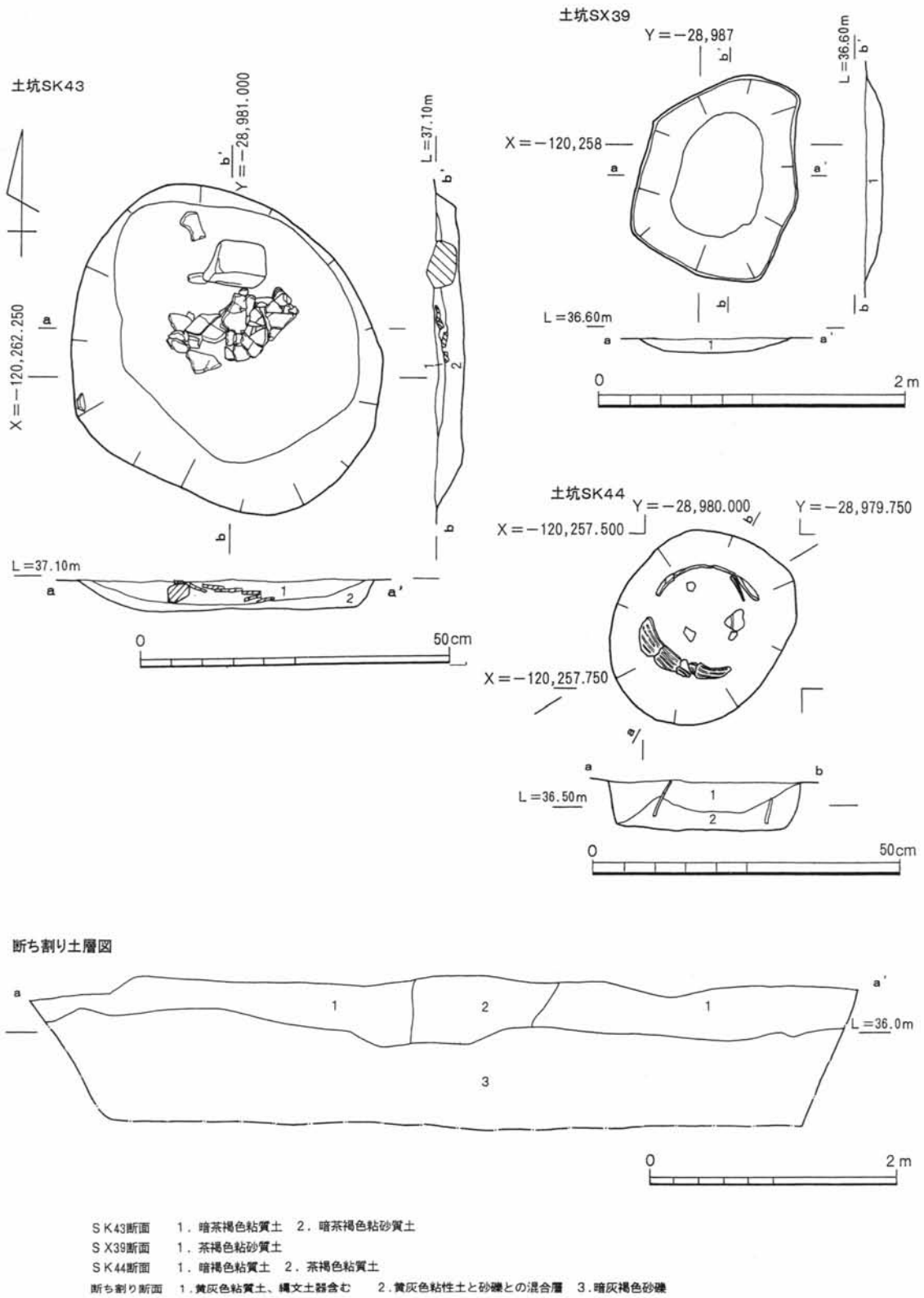
第10図 尾流地区2トレンチ土器溜まりSX45遺構平面図、南壁土層図



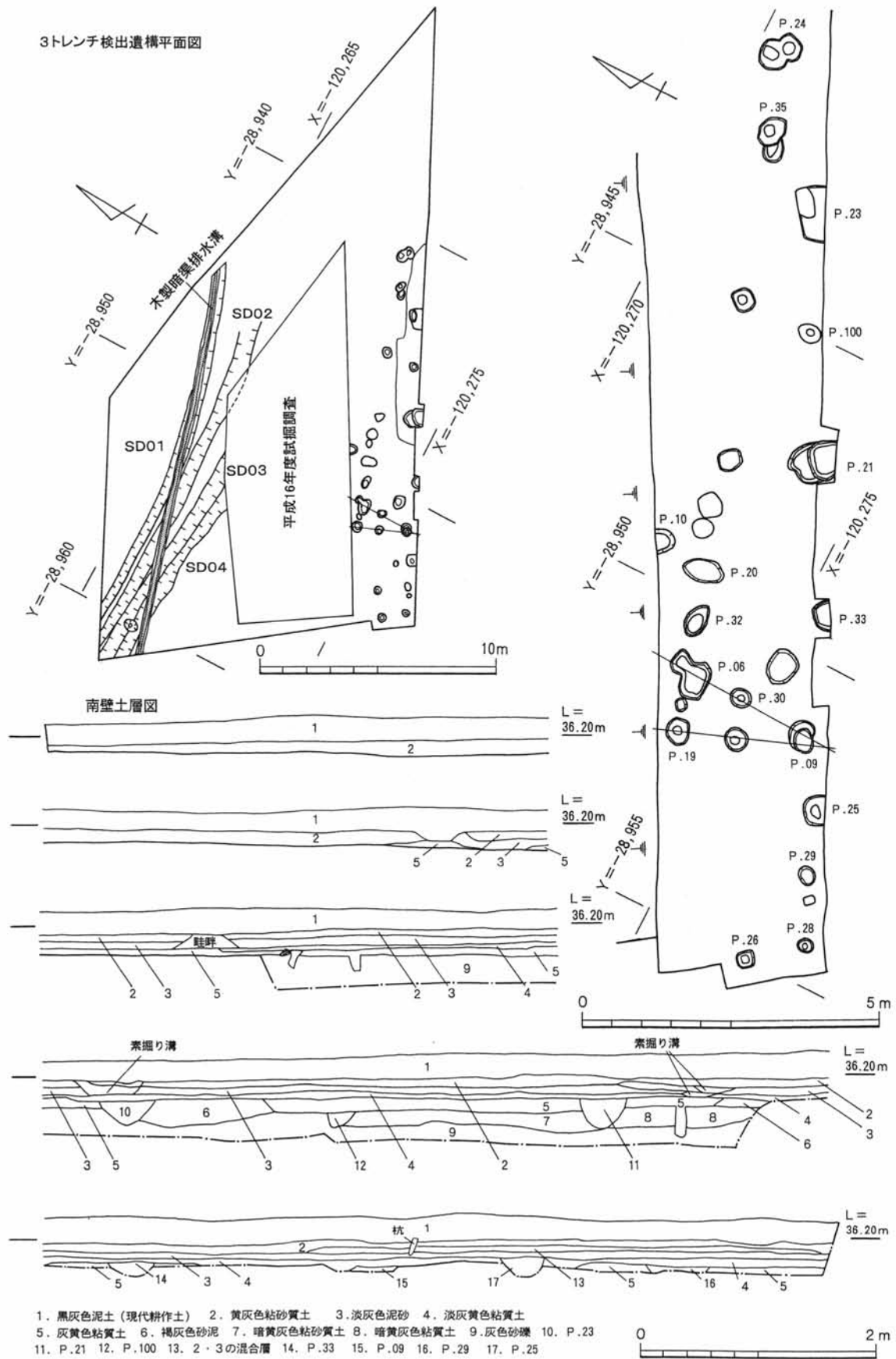
第11図 尾流地区2トレンチ竪穴式住居跡SH13-A・B、SH16遺構実測図



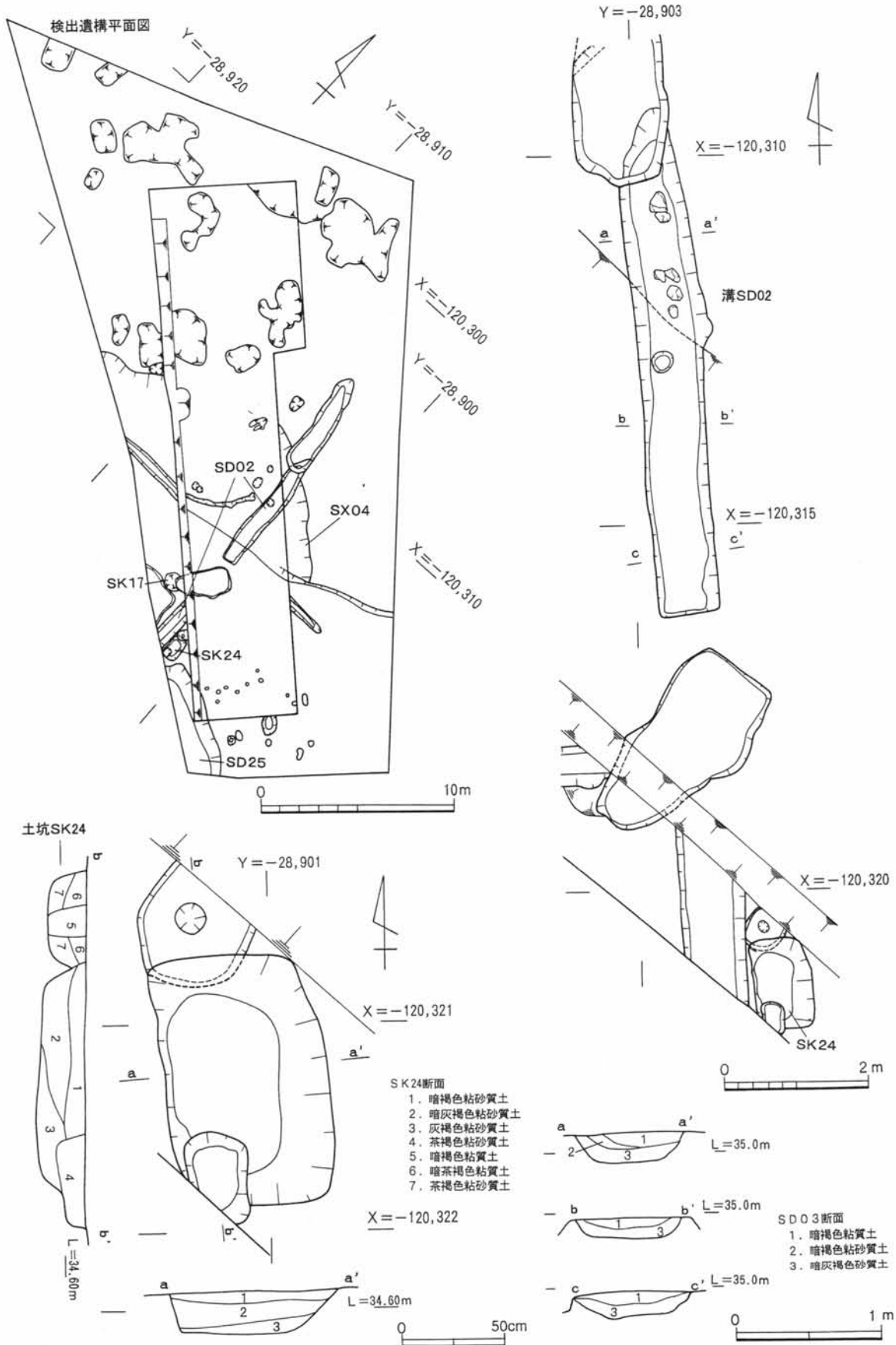
第12図 尾流地区土坑S X 1 4 - A ・ B、竪穴式住居跡S H 2 7遺構実測図



第13図 尾流地区2トレンチ土坑SK43・44、SX39遺構実測図、断ち割り土層図

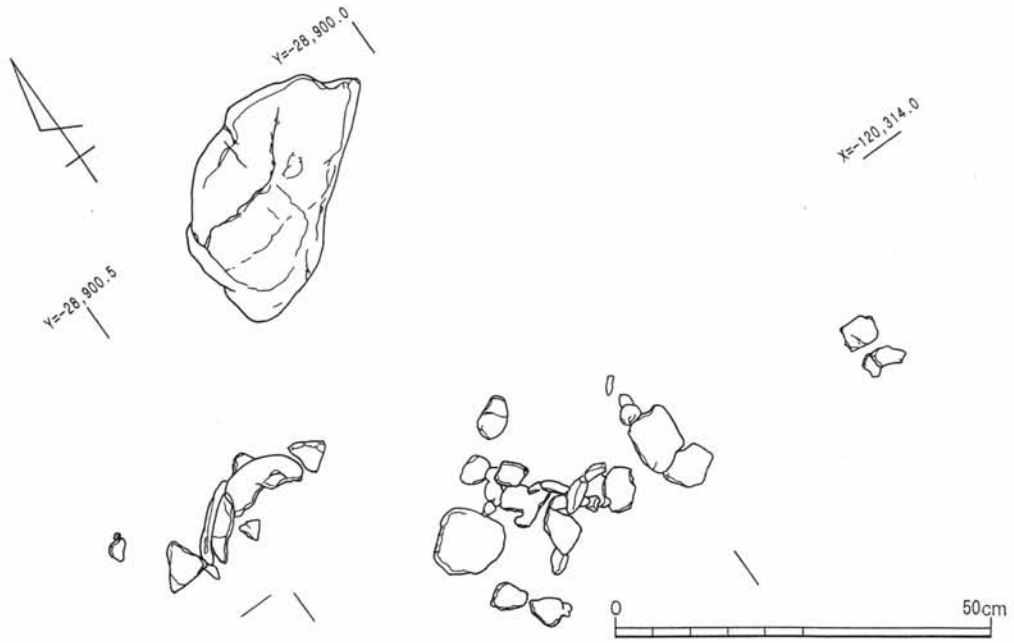


第14図 尾流地区3トレンチ検出遺構平面図、柱穴群実測図、南壁土層図



第15図 尾流地区4トレンチ検出遺構平面図、溝SD03・土坑SK24遺構実測図

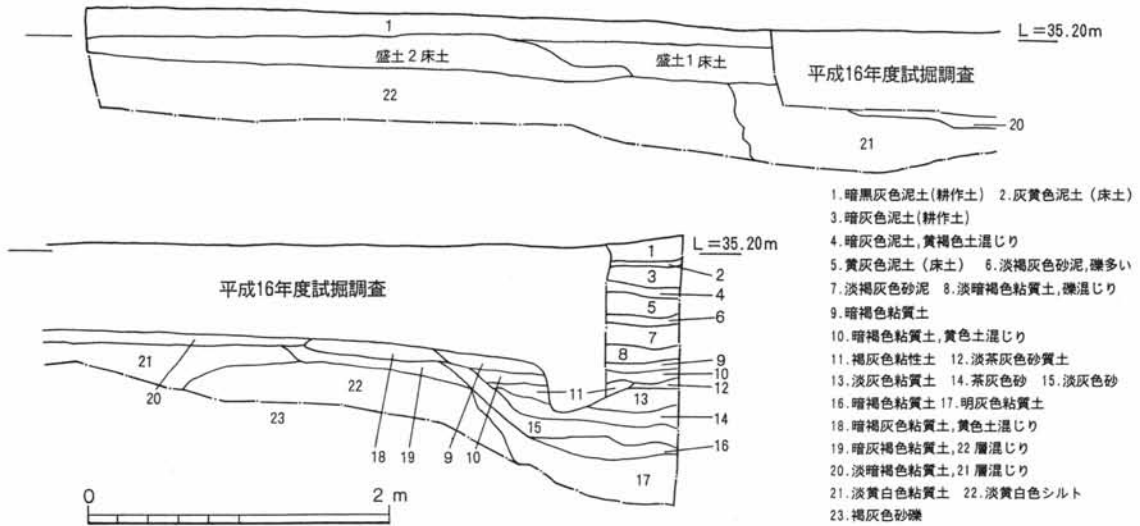
土坑SX04



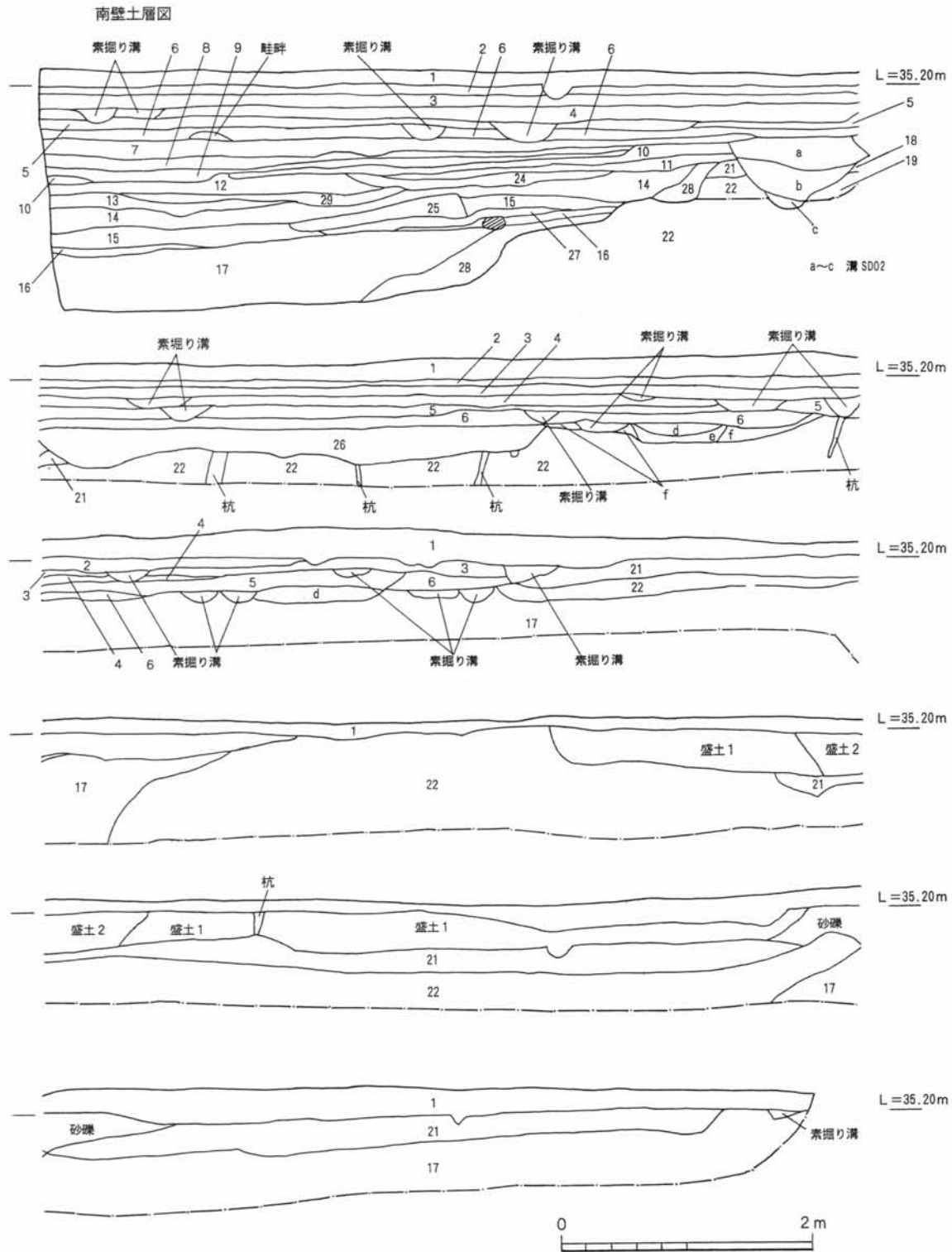
溝SD25



東壁土層図



第16図 尾流地区4トレンチ溝SD25、土坑SX04遺構実測図、東壁土層図



第17図 尾流地区4トレンチ南壁土層図

木製暗渠排水溝(第14図、図版第15-(1)) トレンチの北部から素掘り溝群を切って出土した東西方向、ほぼ直線的に走る暗渠排水溝である。検出長17m、溝幅0.2m、深さ0.25mを測り、断面箱状を呈する。溝内には幅15cmの板材を組み合わせて導水管としている。これは、水田に伴うものでなく、住宅に関連する排水・導水管として利用されたと思われる。時期は素掘り溝群との重複関係から近世である。

素掘り溝群S D01~04(第14図) トレンチ北半部で検出した。東西方向にのびる素掘り溝群である。幅は、0.2~0.5m、深さ0.1~0.2mを測り、溝の断面は椀状を呈する。埋土は、淡灰色粘砂質土であり、腐植土が混じる。これは、水田、畑地に伴う溝である。時期については、S D01とS D02、S D03とS D04はそれぞれ重複しているが、先後関係は見出せない。時期は土師器、染付椀の破片がわずかに出土し、近世と思われる。

柱穴群(第14図、図版第15-(2)・(3)) トレンチ南部から纏まって出土した円形の柱穴群である。柱穴は直径0.2~0.4m、深さ0.1~0.3mを測る。柱筋を復原すると、①P.09・40・19と②P.09・30・06は3層下面で検出されており、一列に並ぶ。①は直径0.2~0.25m、柱間寸法1.6m・1.3mを測る。②は直径0.2~0.4m、柱間寸法1.8m・1.3mを測り、ほぼ真南北方向である。①と②は規模、形態が類似し、P.09が重複していることから、建て替えがあったものと想像される。時期は土師器細片が出土しているが、中世あるいは古代であると思われる。

P.21~23は4層下面から検出されており、柱穴内やその周辺から古墳時代の土師器、須恵器の破片が出土している。これらの柱穴は竪穴式住居跡の主柱穴であることが推察される。

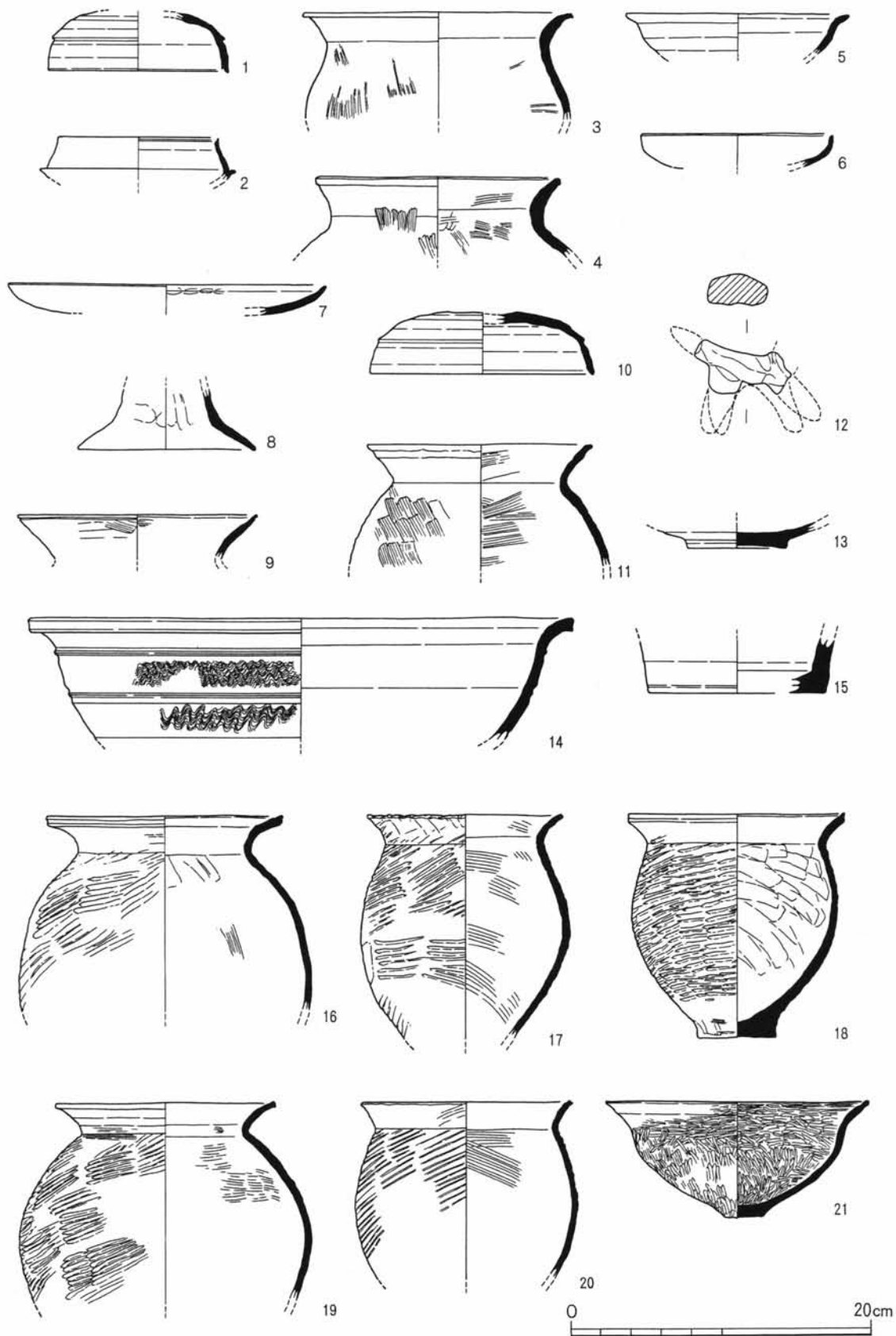
(3) 4 トレンチ(第15図、図版第16-(1))

平成16年度試掘調査では、素掘り溝、柱穴などが確認されており、この成果を受けて550m²のトレンチを設定した。調査の結果、中世~古墳時代の溝3条・土坑、弥生時代の土坑など、時期不明の小柱穴群を検出した。溝S D03と土坑S K24は古代に属し、長岡京跡を考察する上で重要な資料と思われる。

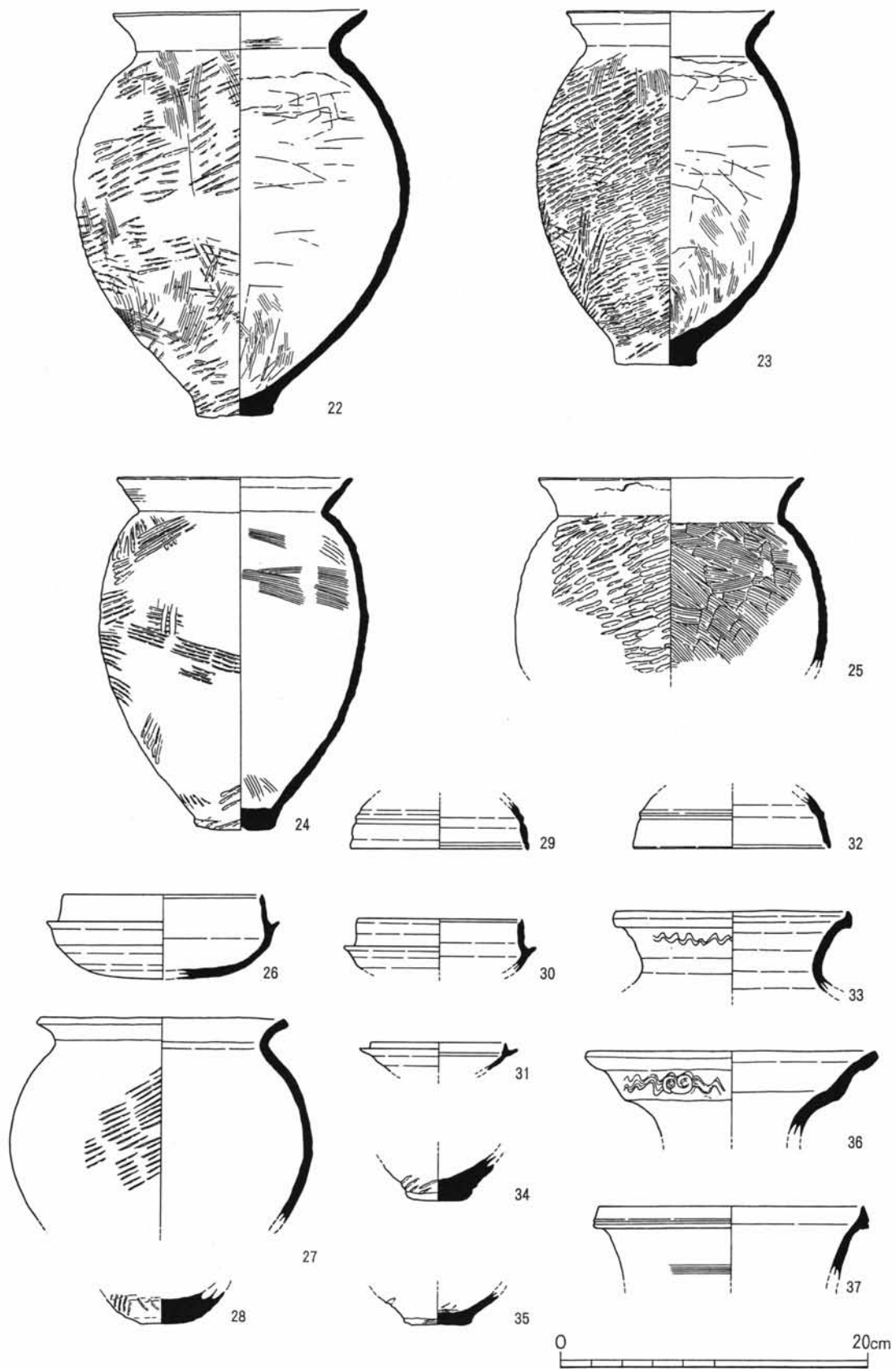
調査区の基本層位は、1~7層は近世・中世層で、素掘り溝が多数検出された。盛土1・2は大礫を含む砂礫層であり、トレンチ北東側の幅5mにわたって分布し、近世以前の堆積層(3~7層)がまったく見られない。これは、ほ場整備に伴って削平を受けてことによるものと思われる。7・8層は古代~弥生時代の土器類が含まれる。9~17層は溝S D25の堆積土である。21・22層は洪積段丘層である。

溝S D03(第15図、図版第16-(2)・(3)) トレンチ中央で検出した南北方向の素掘り溝である。方位は北で4°西に傾く。検出長10m、幅0.8~1.0m、深さ0.4mを測る。断面は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質土(上層)、暗褐色粘砂質土(中層)、暗灰褐色砂質土(下層)である。上層では中礫・大礫が混入している。出土遺物は細片であるが、上層、中層から土師器や須恵器の小片が出土した。溝の時期は、平安時代に属するものと思われる。

土坑S K24(第15図、図版第17-(3)) 溝S D03の南端で東側に隣接して検出した方形の土坑である。長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘砂



第18図 尾流地区出土遺物実測図(1)



第19図 尾流地区出土遺物実測図(2)

質土(上層)、暗灰褐色粘砂質土(中層)、灰褐色粘砂質土(下層)である。この土層は、溝S D03と酷似しており、土坑の時期は、平安時代のものである可能性が高い。出土遺物には土師器・須恵器の細片がある。

溝S D25(第16図、図版第17-(1)・(2)) トレンチ東南隅で検出した東西方向の素掘り溝である。検出長10m、幅1.5m以上、深さ0.8m以上を測る。埋土は、河川堆積の様相を呈し流路の可能性もある。土師器や須恵器杯身が出土した。古墳～平安時代に属するものと思われる。

土坑S X04(第16図、図版第18) 溝S D03の下層から出土した長楕円形の土坑である。埋土は主に淡褐灰色粘砂質土である。弥生土器甕、壺、高杯が出土した。

3. 出土遺物(第18・19図、図版第19・20)

2 トレンチでは竪穴式住居跡S H13-A・S H13-B・S H16から時期を決定する土器が出土した。

竪穴式住居跡S H13-Aからは須恵器杯身(2)、土師器甕(3)、土師器鉢(5)、竪穴式住居跡S H13-Bからは、須恵器杯蓋(1)、土師器甕(4)、土師器杯(6)が出土した。2は口径10.6cmを測る。口縁部は受部からやや内傾気味に立ち上がる。竪穴式住居跡S H16からは土師器高杯杯部(7)、土師器高杯脚部(8)、土師器甕(9)、須恵器杯蓋(10)、土師器甕(11)が出土した。土器溜まりS X04からは、弥生土器甕(16～25、ただし21は鉢)が出土した。灰黄色粘質土およびその上面からは土馬(12)、緑釉陶器碗(13)、須恵器器台坏部(14)、須恵器杯壺(15)が出土した。

3 トレンチでは遺物包含層(茶褐色土)から須恵器杯身(26)が出土した。

4 トレンチでは土坑S X04から弥生土器甕(27)、弥生土器底部(28)、溝S D25から須恵器杯蓋(29)、須恵器杯身(30)、須恵器杯身(31)、弥生土器底部(34・35)が出土した。遺物包含層からは須恵器杯蓋(32)、須恵器壺(33・37)、弥生土器壺(36)が出土した。

4. 小結

土器溜まりS X04や土坑S X04はその性格が現時点では明確にできないが、人工的なものであることから、弥生時代後期の集落跡がこの近辺に存在していたことが窺える。

古墳時代後期の竪穴式住居跡3基、溝S D25などが検出された。その中で建て替えがあったことは、下海印寺遺跡の南端において、溝S D25が旧河川とすれば、この縁辺部での集落の景観がより明確になってきたと言える。

3 トレンチの柱穴群については、中世・古代・古墳時代の3時期以上であることが明らかになった。今後の南側の調査を待って、具体的な建物跡の復原が期待される。

溝S D02、土坑S K24などはほぼ真南北方向からわずかに西へ振れており、明確な時期を示す遺物が少ない中で土馬が出土したことにより、西山田遺跡との関連性を考察する貴重な資料を得たものと思われる。

(竹井治雄)

(3) ^{ながおききょう}長岡京跡右京第851次・^{しもかいいんじ}下海印寺遺跡第22次・^{いがじ}伊賀寺遺跡

1. はじめに

第二外環状道路建設予定地内の奥海印寺片山田から調子地区にいたる総長2.2kmの間において、12地点で試掘調査を実施した。

現地調査は、平成17年5月23日～平成18年2月27日までを要した。この一連の試掘調査は、長岡京跡右京第851次調査として実施した。

2. 調査の概要

①片山田地区(第20～22図、図版第21)

奥海印寺片山田地区の調査対象地は山裾に位置し、ここに数軒の住宅が建てられていたため、中央に道路を挟んで北側は3段、南側は1段の雛壇が形成されていた。それぞれの平坦面に5本のトレンチを設定して調査を行った。調査面積は約110m²で、調査は平成17年5月23日～6月8日の間に実施した。

現地表面の標高は55～59mを測る。各トレンチとも、地表下1～2mで、傾斜面となる旧表土を確認した。この旧地表面を埋める土砂は山側から崩落したものであり、土砂中から奈良～平安時代の土師器を数点確認したが、これらに関連する遺構は確認できなかった。

京都府遺跡地図には、今回の調査地の北西側に奈良・平安時代の須恵器窯跡(鈴谷窯跡)が記されているが、これに関連する遺物・遺構は確認できなかった

②荒堀地区(第20・23・24図、図版第22・23)

奥海印寺荒堀地区の調査対象地は山裾の丘陵上に位置し、住宅跡地の調査である。調査対象地に5か所のトレンチを設定し、平成17年6月7日～6月29日までの間に調査を実施した。試掘調査の面積は約90m²である。

現地表面の標高は55～56mを測る。5か所のトレンチとも、地表下1mまで竹藪の客土および宅地造成による盛土である。1トレンチでは、竹を燃やした焼土坑と小規模な溜め池を確認した。遺物などは確認できなかったが、竹の繊維の遺存状況や、地元住民の聞き取りにより、ともに現代のものと判断された。2トレンチでは、竹藪の客土および宅地造成による盛土を除去したところ、幅0.3～0.4mの素掘り溝を検出した。層序から、造成以前の地割りと判断された。各トレンチとも、旧地表面下1～1.5mにわたって断ち割ったが、厚く砂礫が堆積していた。この砂礫からは遺物の出土はなかった。

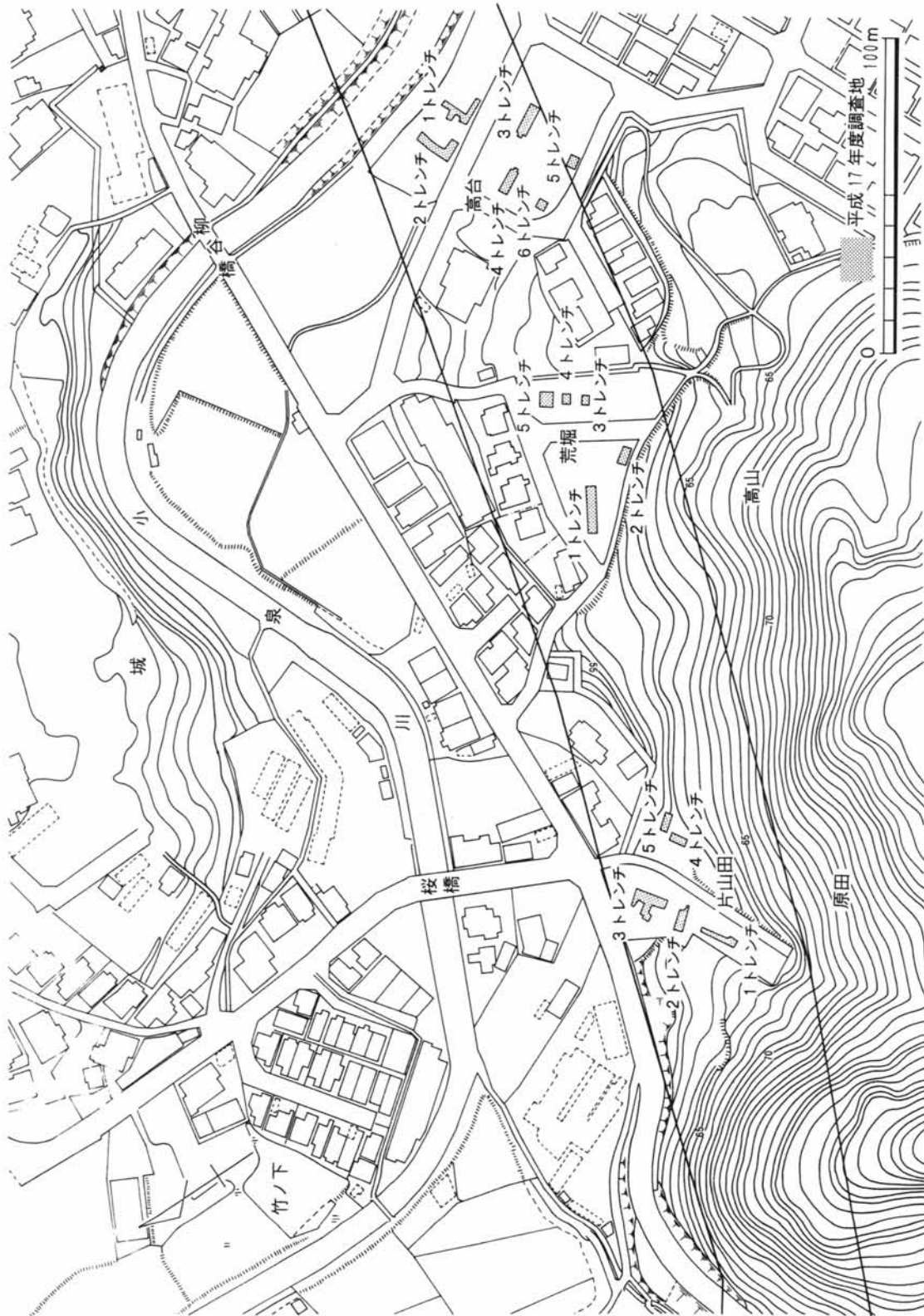
③高台地区(第25～26図、図版第24)

高台地区の試掘調査は、対象地内に6か所のトレンチを設け平成17年7月27日～8月12日の間に実施した。調査面積は160m²である。

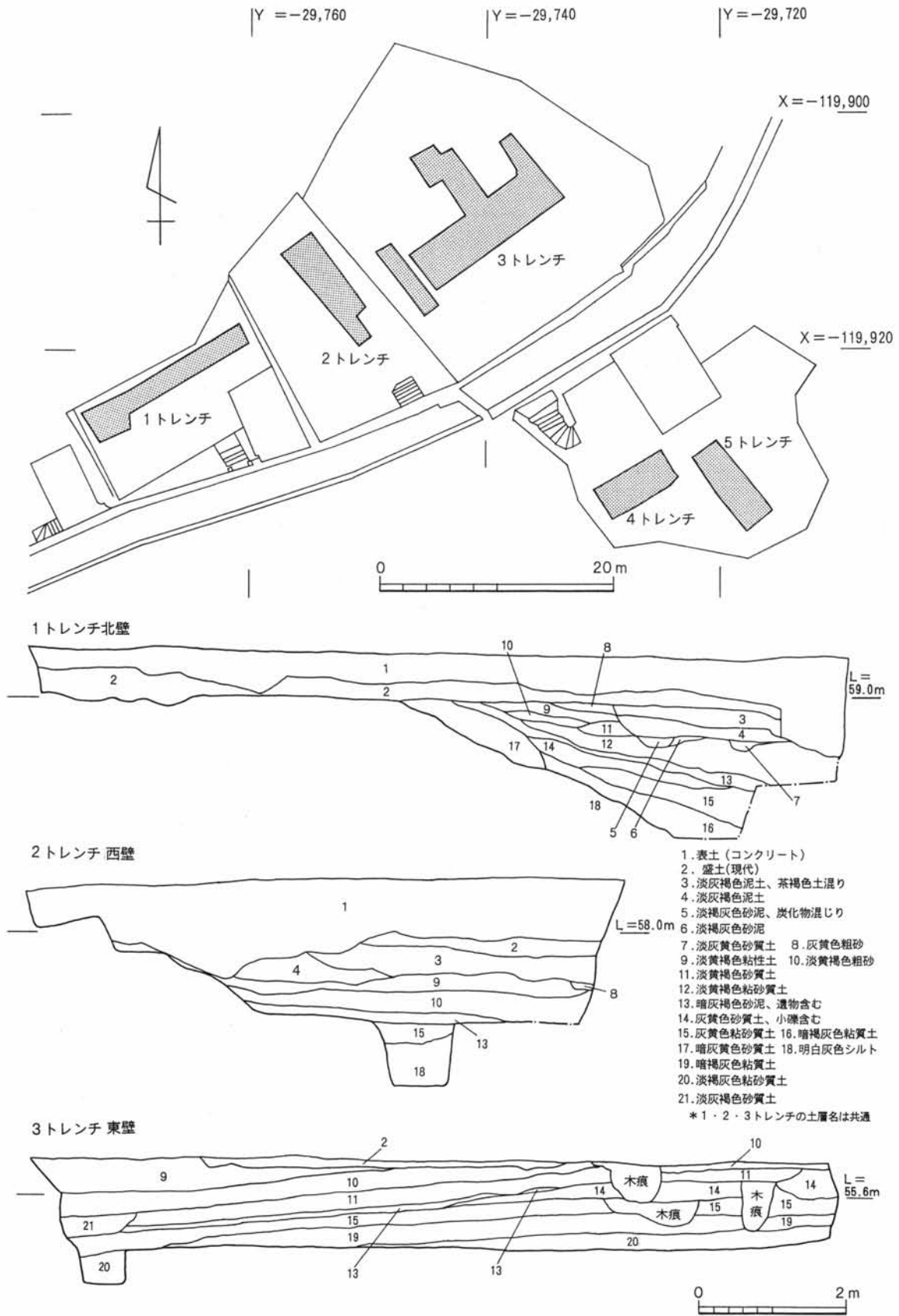
現地表面の標高は40～44mを測る。1～6トレンチのすべて、宅地造成による盛土が、地表下

2.0～3.5mに及んでいた。この盛土は近隣の藪の客土で、竹の根が混在していた。各トレンチとも、盛土以下の層序はシルト、礫層であり、「山土」の様相を呈する。遺物・遺構は検出できなかった。

(竹井治雄)

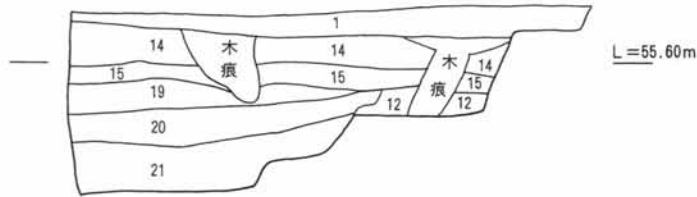


第20図 片山田・荒堀・高台地区トレンチ配置図

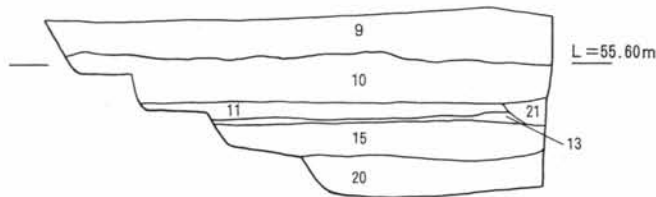


第21図 片山田地区トレンチ配置図、1トレンチ北壁・2トレンチ西壁・3トレンチ東壁土層図

3トレンチ南壁

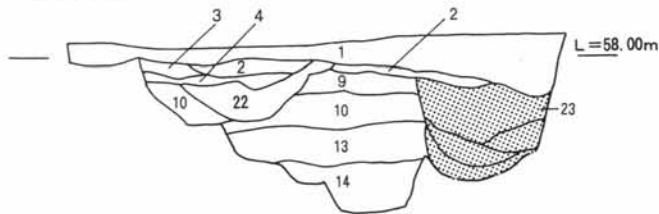


3トレンチ北壁

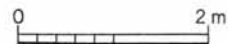
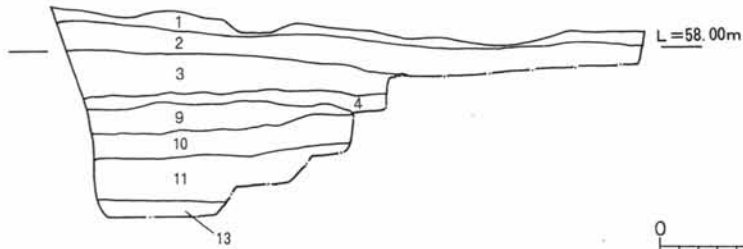


*3トレンチの土層名は21図に共通

4トレンチ南壁



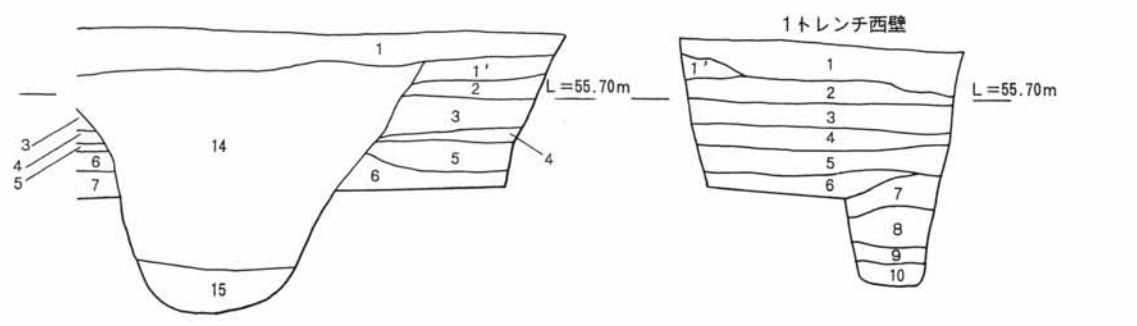
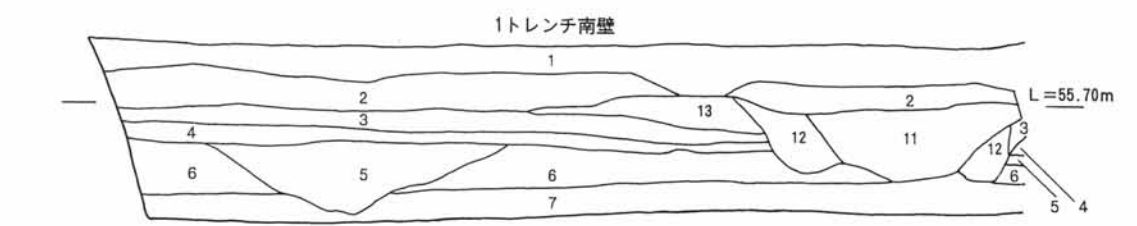
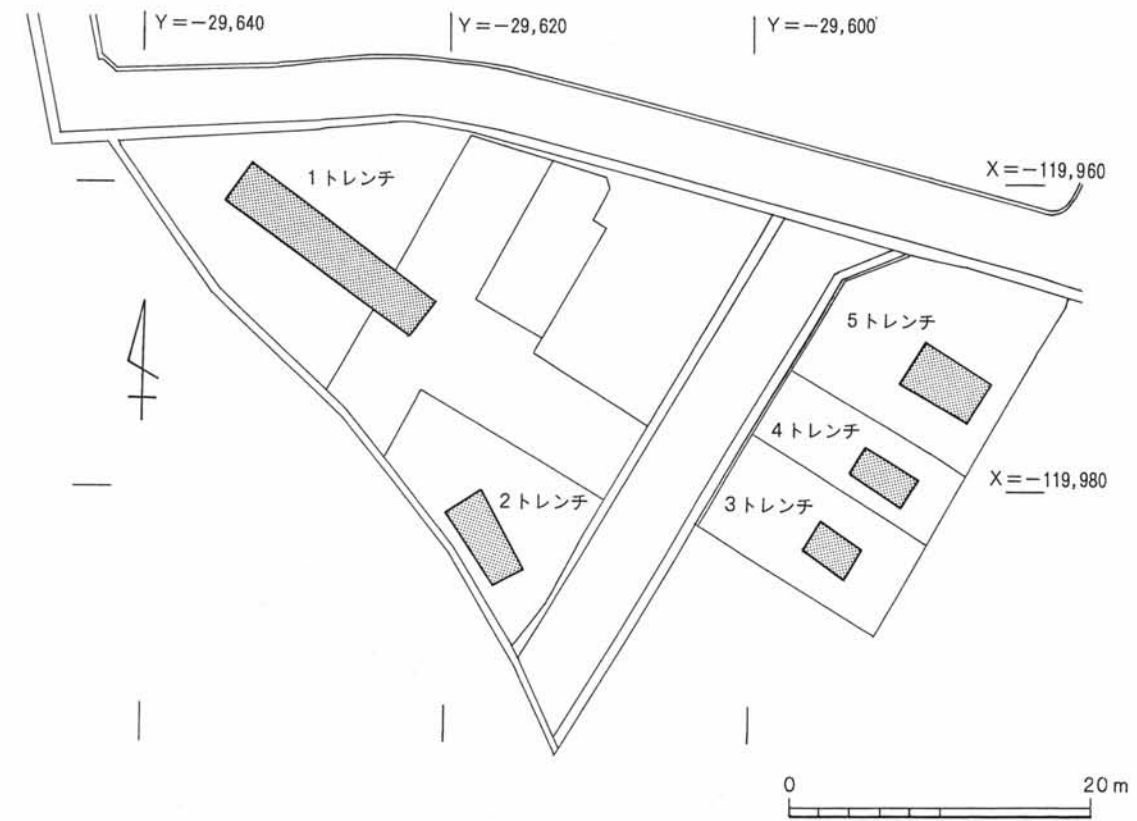
5トレンチ西壁



- 1.表土(コンクリート) 2.盛土(現代) 3.淡灰褐色泥土、茶褐色土混り
- 4.淡灰褐色泥土 9.淡黄褐色粘性土 10.淡黄褐色粗砂
- 11.淡黄褐色砂質土 12.淡黄褐色粘砂質土 13.暗灰褐色砂泥、遺物含む
- 14.灰黄色砂質土、小礫含む 15.灰黄色粘砂質土
- 20.淡褐灰色粘砂質土 21.淡灰褐色砂質土
- 22.暗灰褐色砂泥 23.現代攪乱坑

*4・5トレンチの土層名は共通

第22図 片山田地区3トレンチ北壁・南壁、4トレンチ南壁、5トレンチ西壁土層図

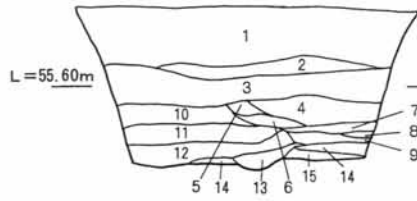


- 1. 表土 1' 旧表 2. 黄褐色粘質土 (盛土 I) 3. 明黄褐色砂質土 (盛土 II) 4. 茶褐色粘砂質土
- 5. 黄褐色粘砂質土, 礫混じり 6. 黄褐色粘性土 7. 灰褐色砂質土, 礫混じり 8. 灰褐色砂礫
- 9. 明黄灰色砂質土 10. 茶褐色砂礫 11. 黄灰色砂泥 12. 黄褐色粘砂質土 13. 明黄灰色砂質土 (溝)
- 14. 淡黄灰色粘質土, 礫混じり 15. 茶褐色砂礫

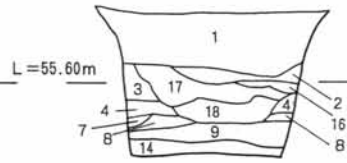


第23図 荒堀地区トレンチ配置図、1 トレンチ南壁・西壁、3 トレンチ南壁・西壁土層図

3トレンチ南壁

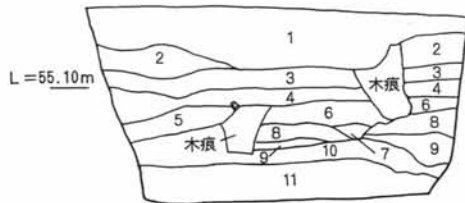


3トレンチ西壁

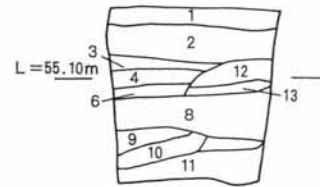


- 1.表土、黒灰色泥土 2.黄褐色粘質土、小礫混じり(盛土I) 3.旧表土(盛土II)
 4.暗灰色粘質土(泥土) 5.暗灰色粘性土 6.暗灰色粘性土、黄褐色土混り
 7.暗灰色シルト 8.淡灰色シルト 9.淡黄灰色シルト 10.黄褐色粘質土、礫混り
 11.黄灰色砂泥(耕作土) 12.黄褐色粘砂質土 13.明黄灰色砂質土(溝)
 14.淡黄灰色粘質土、礫混り 15.茶褐色砂礫 16.暗灰褐色シルト
 17.灰褐色泥土 18.暗灰褐色泥砂

4トレンチ南壁

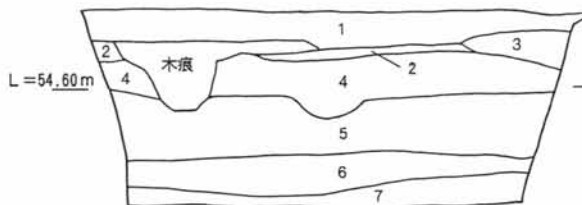


4トレンチ西壁

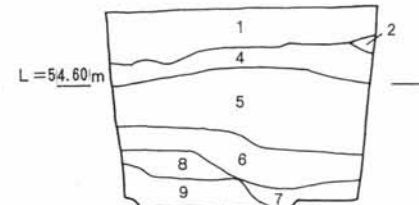


- 1.表土、黒灰色泥土 2.黄褐色粘砂質土 3.暗黄褐色泥土 4.黄褐色砂礫、粘質土混り
 5.灰褐色砂礫 6.淡黄褐色砂礫 7.淡灰色泥砂 8.淡暗灰褐色シルト
 9.灰褐色シルト 10.茶褐色砂礫 11.茶灰色シルト 12.黄灰色粗砂礫 13.灰黄色粗砂

5トレンチ南壁



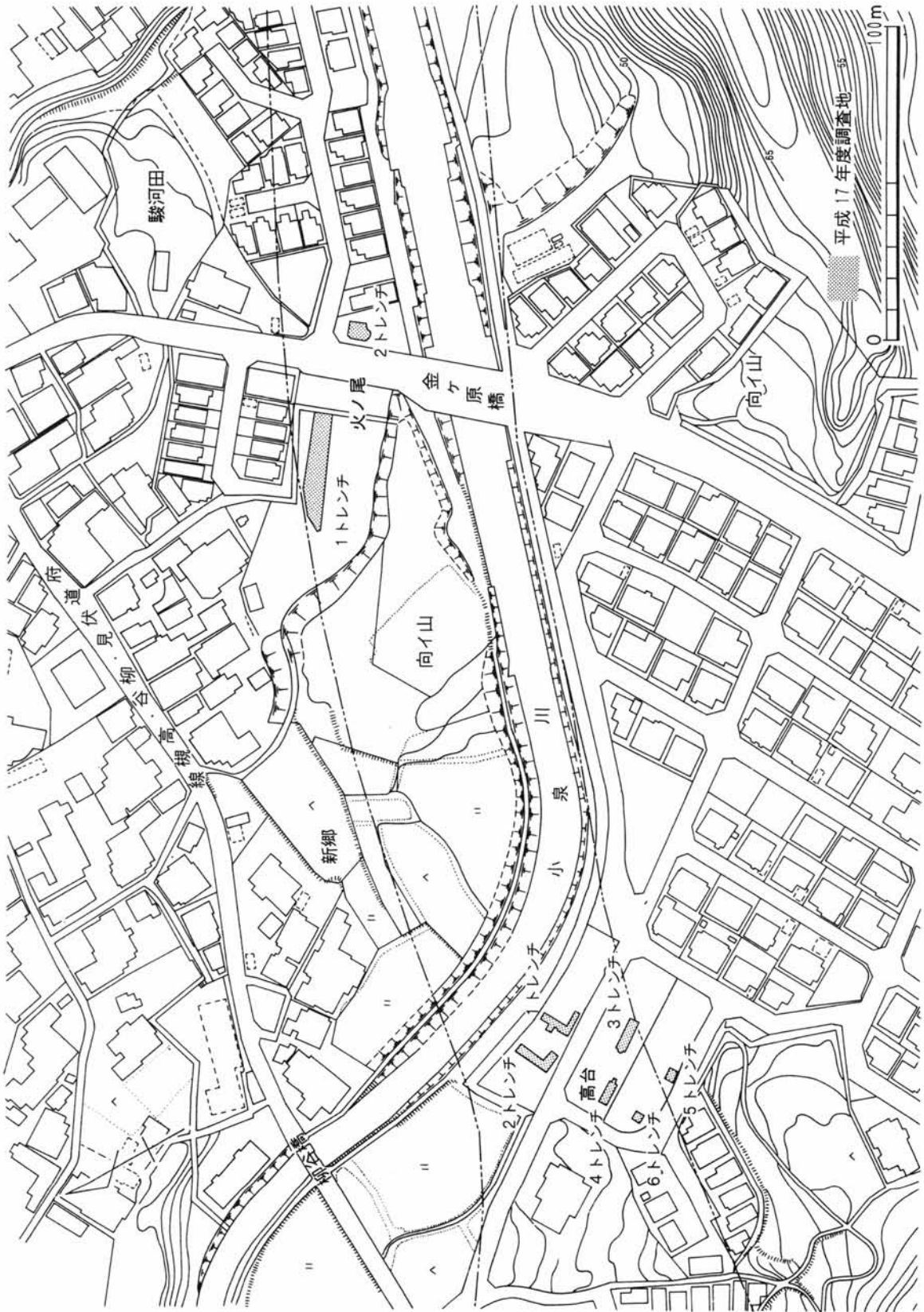
5トレンチ東壁



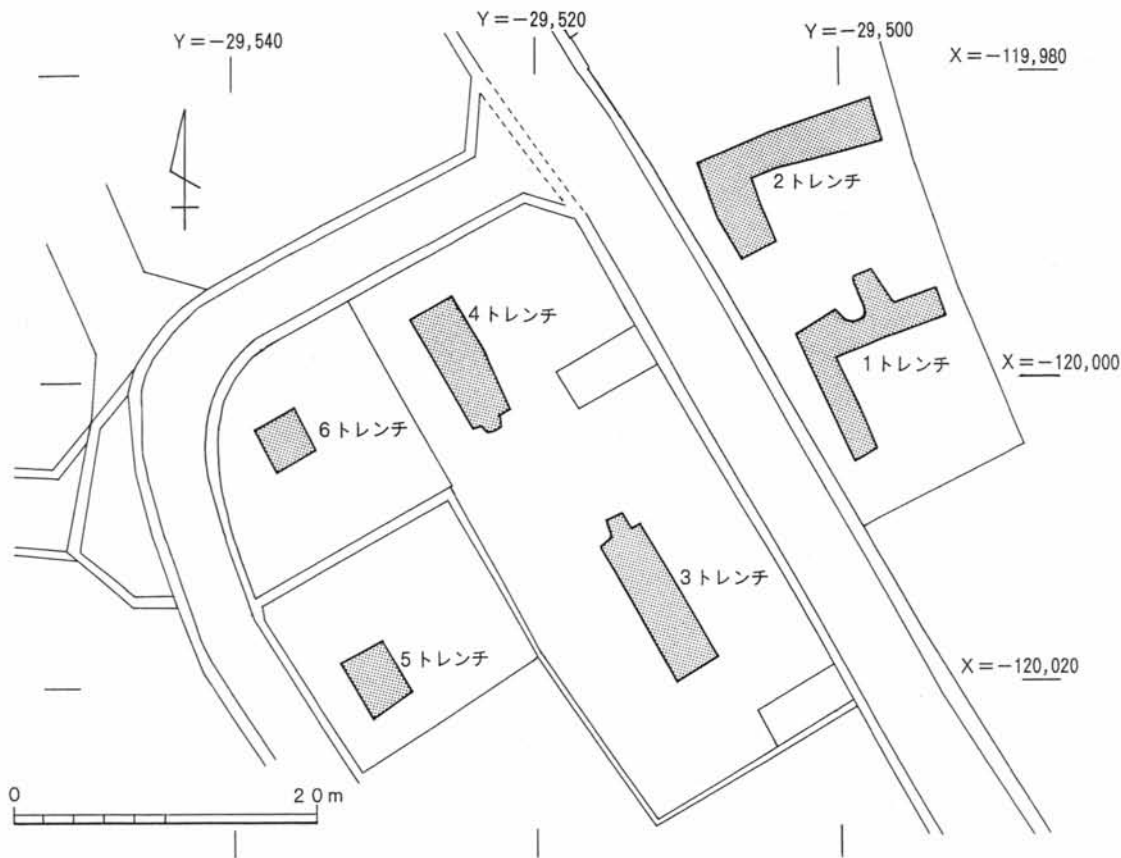
- 1.表土、黒灰色泥土 2.明黄褐色粘質土 3.暗黄褐色泥土 4.黄褐色砂礫、粘質土混り
 5.淡灰褐色砂礫 6.淡黄褐色砂礫 7.淡黄褐色砂礫、人頭大礫多い 8.淡暗灰褐色シルト
 9.暗灰褐色シルト



第24図 荒掘地区3トレンチ南壁・西壁、4トレンチ南壁・西壁、5トレンチ南壁・東壁土層図



第25図 高台・火ノ尾地区トレンチ配置図



第26図 高台地区トレンチ配置図

④火ノ尾地区(第25・27図、図版第25)

奥海印寺火ノ尾地区では、東地区(1トレンチ)と西地区(2トレンチ)に調査区を設定した。調査の面積は合計で約300m²となり、調査の期間は平成17年7月1日～7月22日までを要した。

現地表面の標高は46.6～46.9mを測り、現在の地表下1.9～2.4mまで盛土が認められた。この下面が造成以前の水田面で、標高43.9mの水田と44.4mの水田の二筆を検出した。これらの水田は、小泉川流路内堆積の砂礫層(径10～50cmの円礫)の上に20～40cmの床土を貼り、造成されたものである。

砂礫層を約60cmにわたって掘り下げたが、湧水と崩落の危険のため、これ以上の掘り下げを断念した。砂礫の堆積方向の観察より、旧流路の流れの方向はN20～21° Wである。また、砂礫の粒径の観察により、流路には2時期あることが判明した。

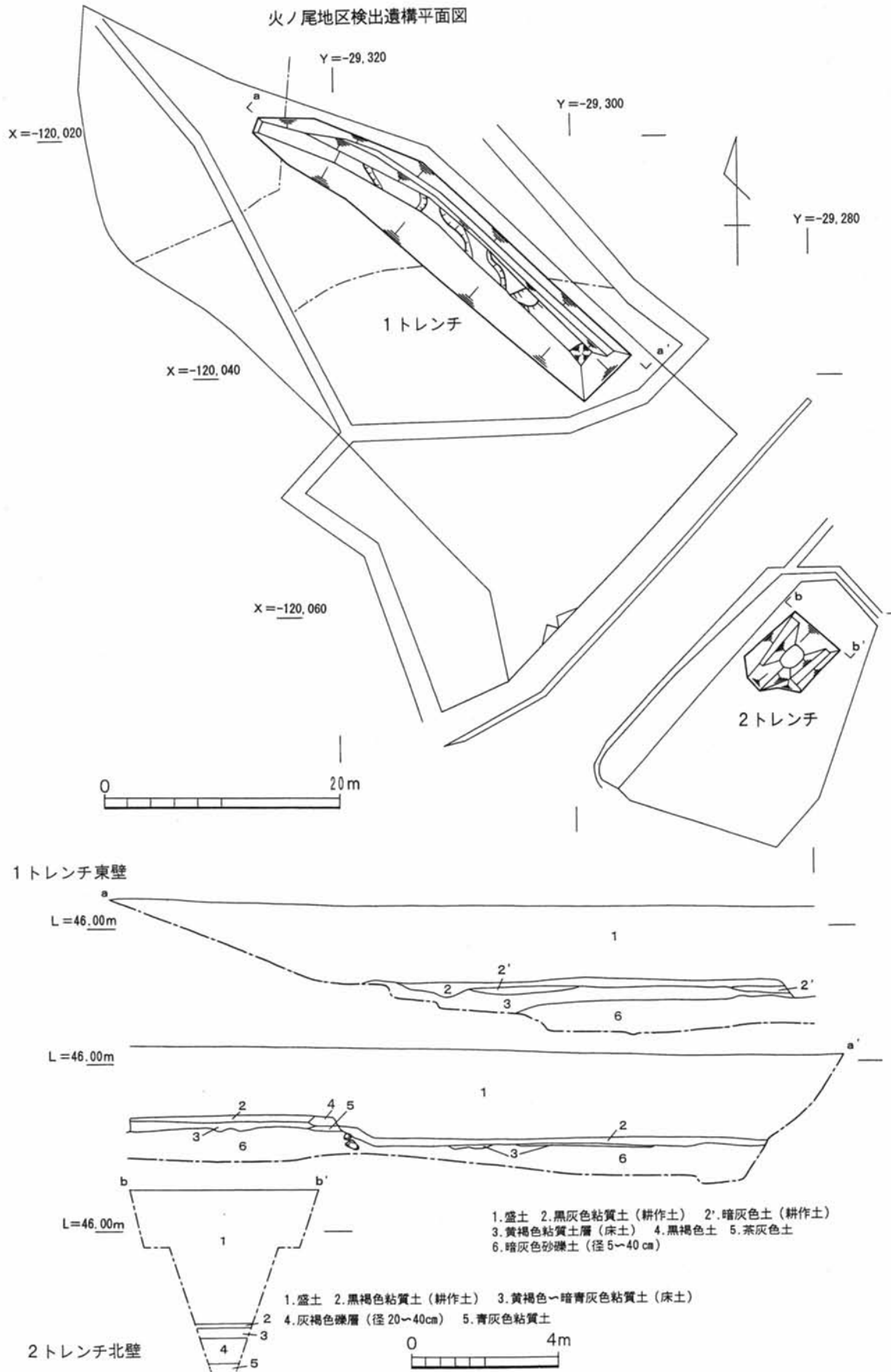
遺物の出土は少なく、床土内からは瓦器椀・土師器片が出土しており、流路内からは古墳時代の須恵器杯蓋、土師器甕片が出土している。

(戸原和人)

⑤駿河田(左岸)地区(第28・29図、図版第26)

奥海印寺駿河田(左岸)地区では、約90m²の試掘調査を7月6日～7月22日までの間に実施した。

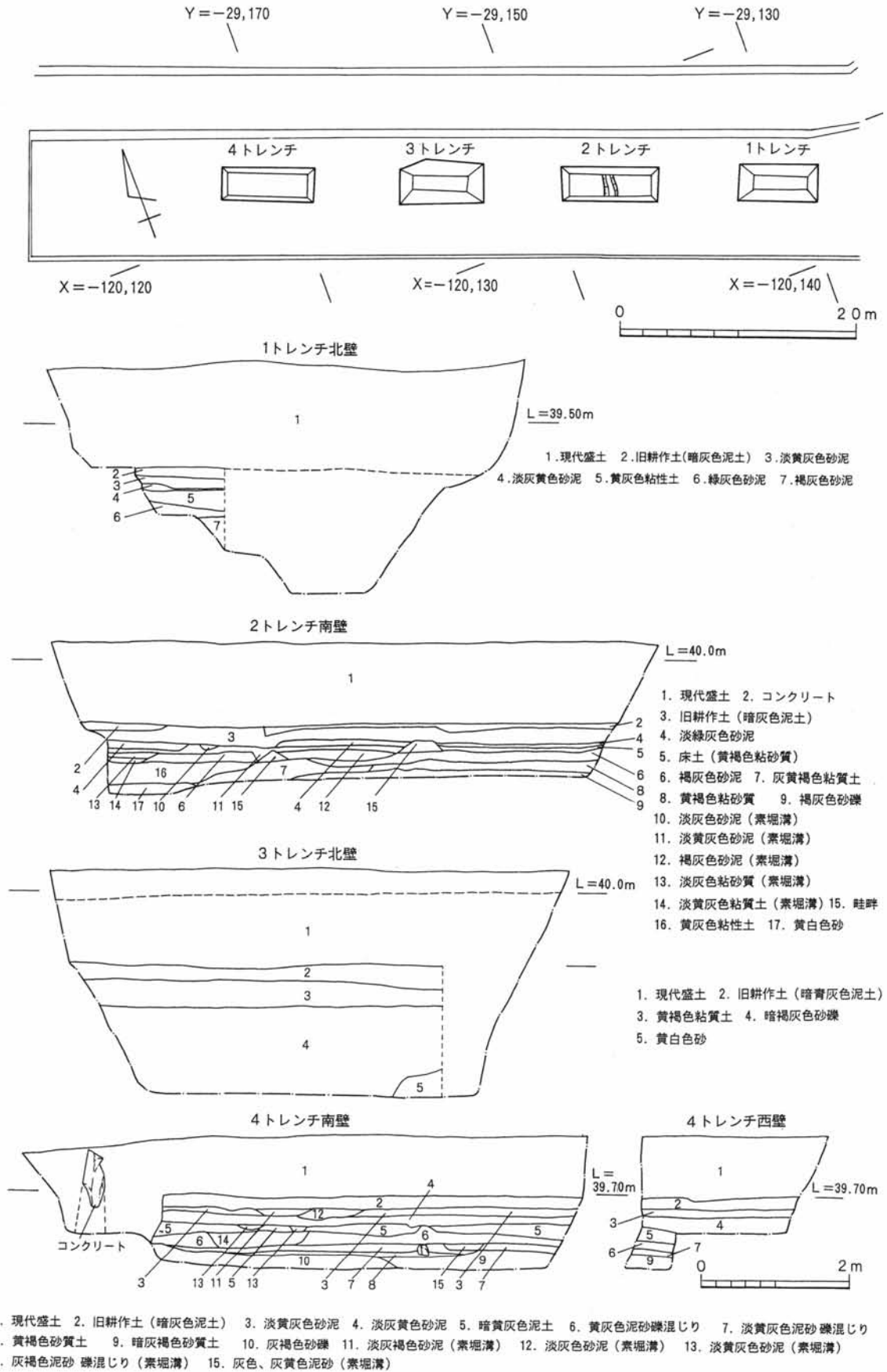
現地表面の標高は40.4～40.5mを測る。4か所のトレンチを設定し、南東から北西に1～4ト



第27図 火ノ尾地区トレンチ配置図、1トレンチ東壁・2トレンチ北壁土層図

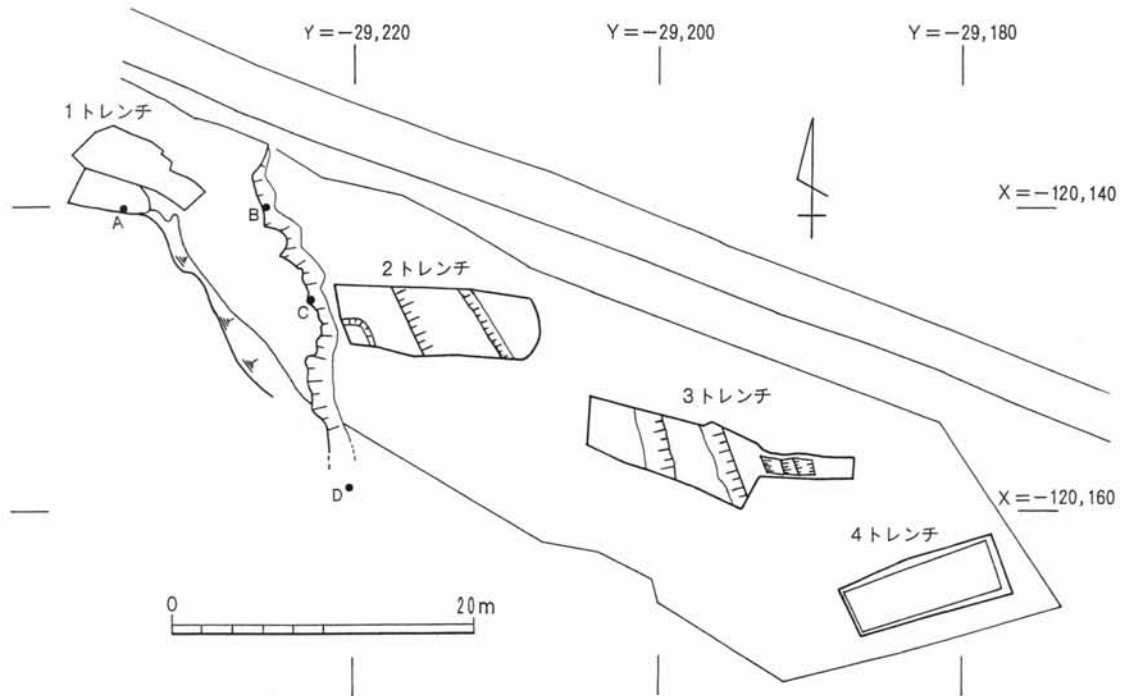


第28図 駿河田(右岸・左岸)・菩提寺・尾流地区調査トレンチ配置図

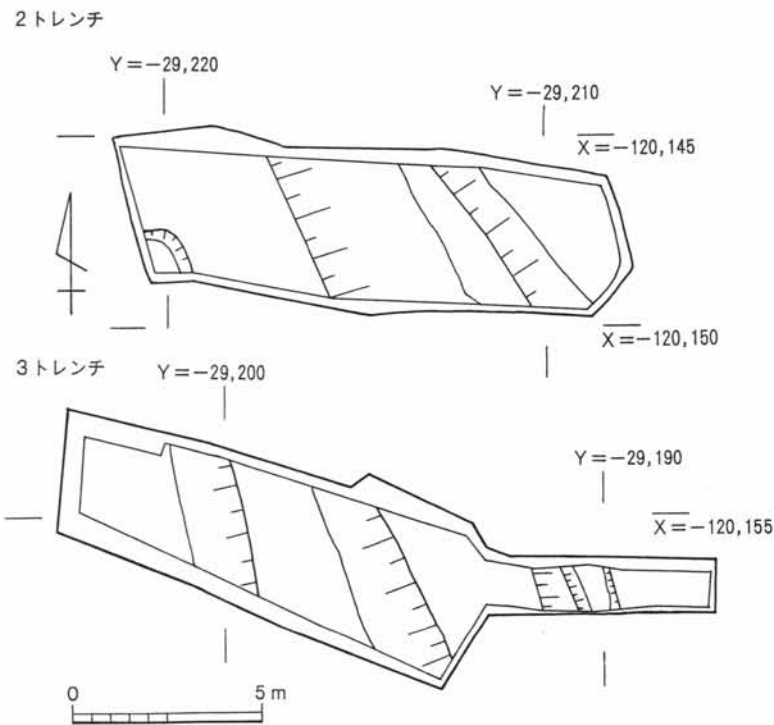


第29図 駿河田(左岸)地区トレンチ配置図、
1トレンチ北壁、2トレンチ南壁、3トレンチ北壁、4トレンチ南壁・西壁土層図

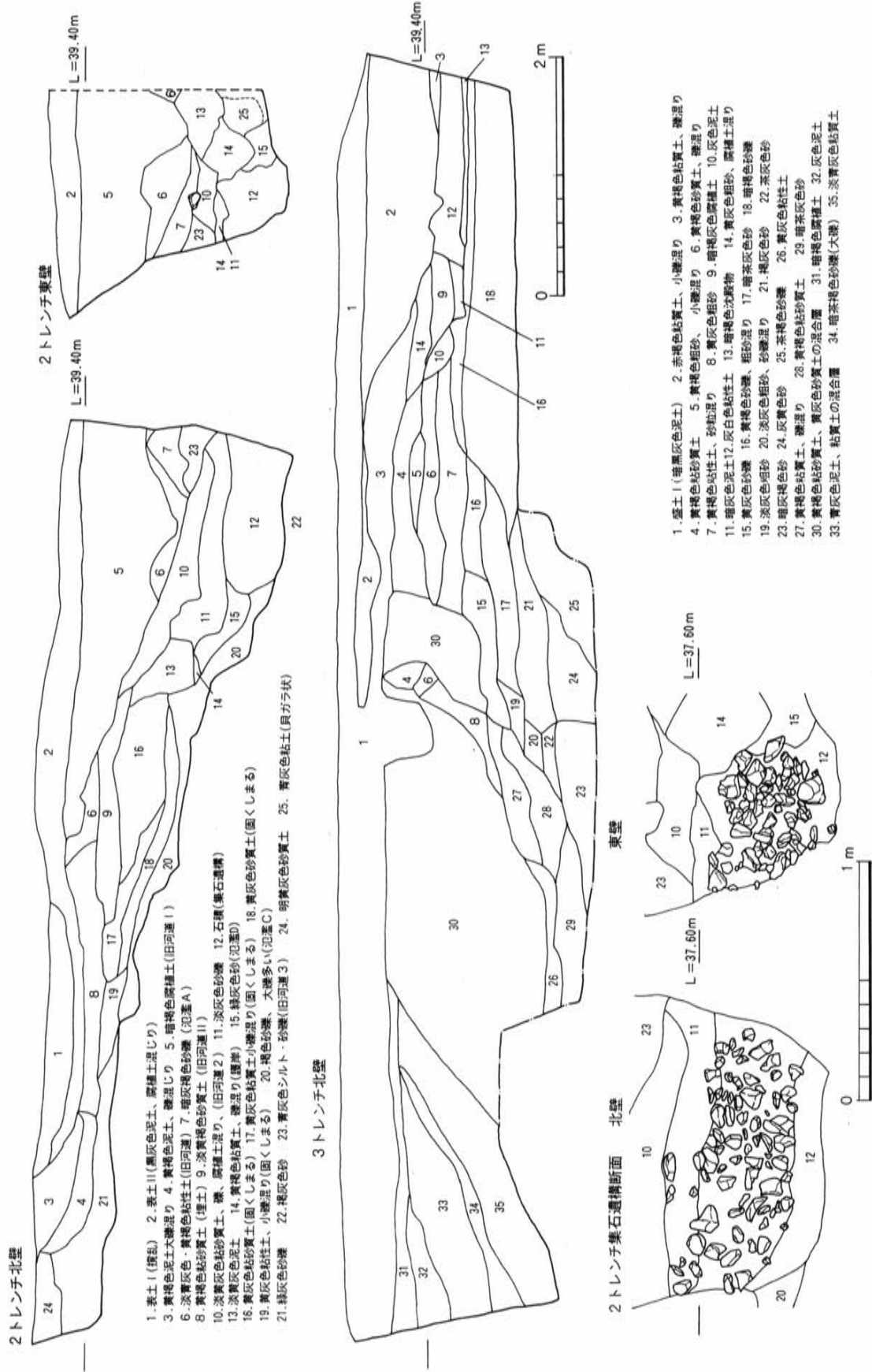
トレンチ配置図



検出遺構平面図

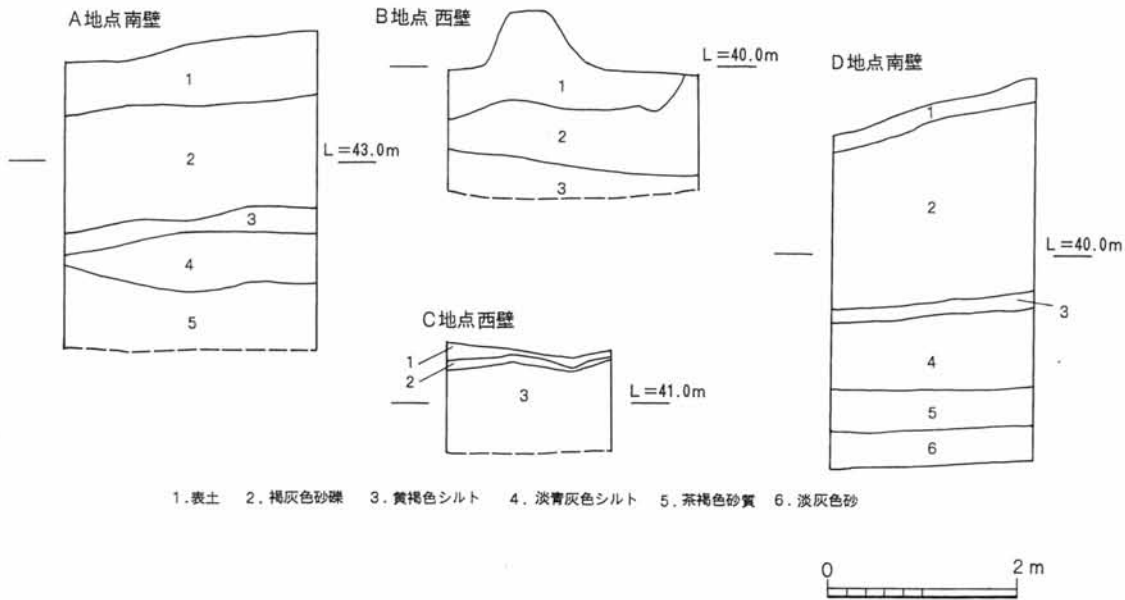
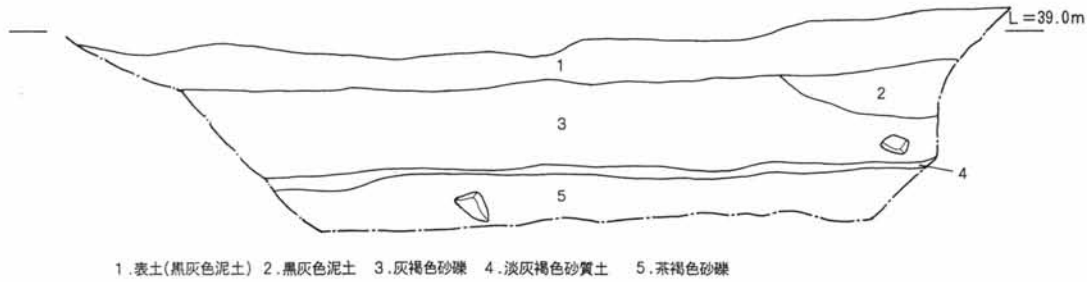


第30図 駿河田(右岸)地区トレンチ配置図



第31図 駿河田(右岸)地区2 トレンチ・3 トレンチ北壁土層図

4 トレンチ南壁



第32図 駿河田(右岸)地区土層断面図

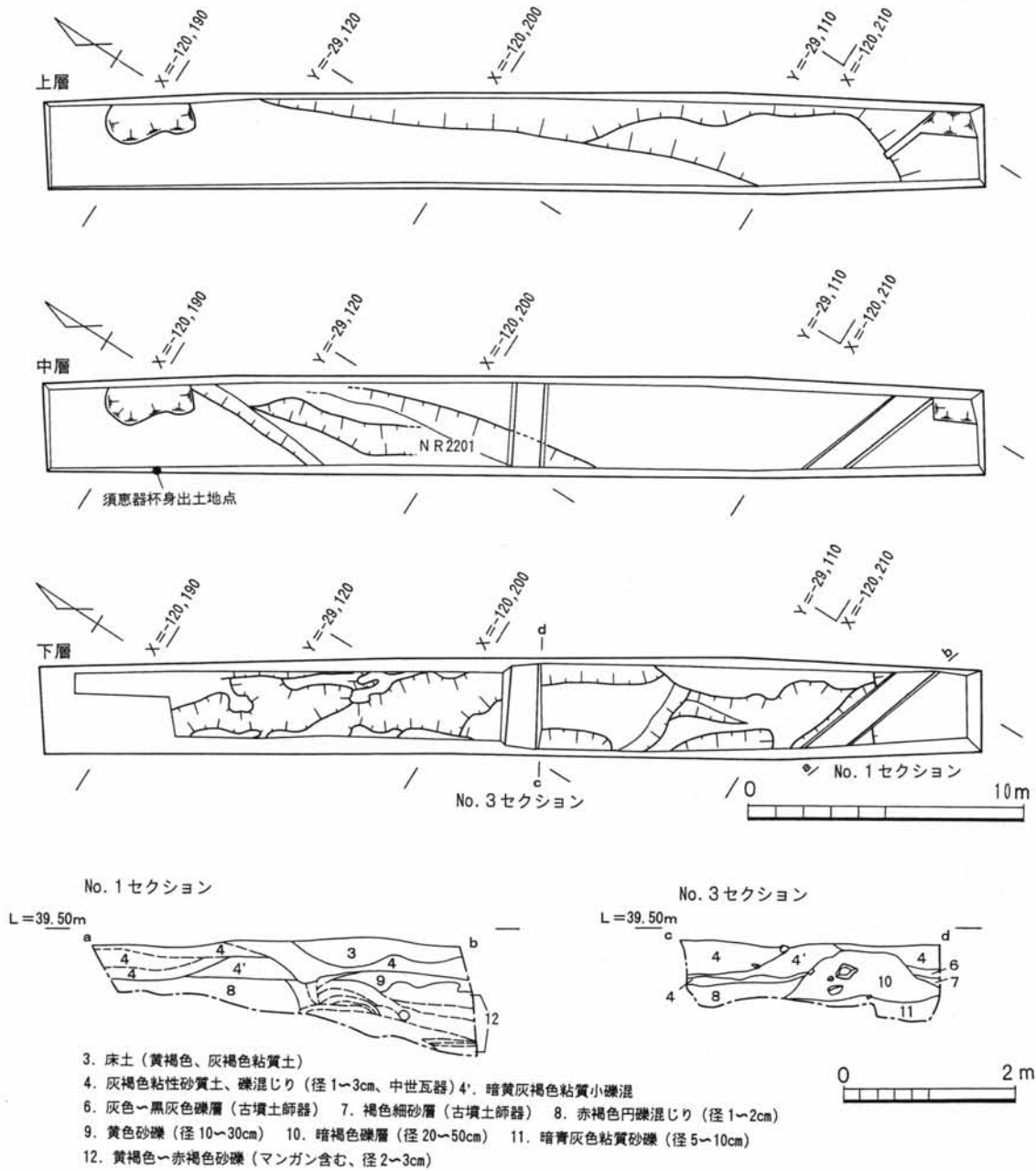
レンチとした。1～3 トレンチでは現地地表下0.8～1 mにかけて現代盛土があり、以下、旧耕作土・床土となる。この下には旧小泉川水系に関わる暗褐色砂礫、黄白色砂の堆積が認められた。2 トレンチでは、砂礫上面の黄灰色粘質土から、平安時代の土師器細片が出土した。4 トレンチでは、現地地表下約30cmで旧耕作土・床土のセットが3組認められ、上面の床土内からは瓦器碗片、下面の床土内からは土師器片が出土した。以上、本地区ではわずかに土器の細片は出土したものの顕著な遺構・遺物は認められなかった。

⑥駿河田(右岸)地区(第28・30・32図、図版第27～29)

奥海印寺駿河田(右岸)地区では、4本のトレンチを設定し、平成17年9月26日～10月28日までの間に調査を実施した。現況は竹藪であり、現地形の観察から、小泉川の旧流路と判断された。調査面積は約170m²である。

現地表面の標高は40.2～40.4mを測る。1 トレンチでは現代の藪の客土(厚さ0.3m)以下、砂礫層(0.7～1.0m)、青白色シルト層(1.0m以上)の順に堆積する。砂礫層、シルト層は高位段丘と判断される。遺構・遺物は全く出土しなかった。

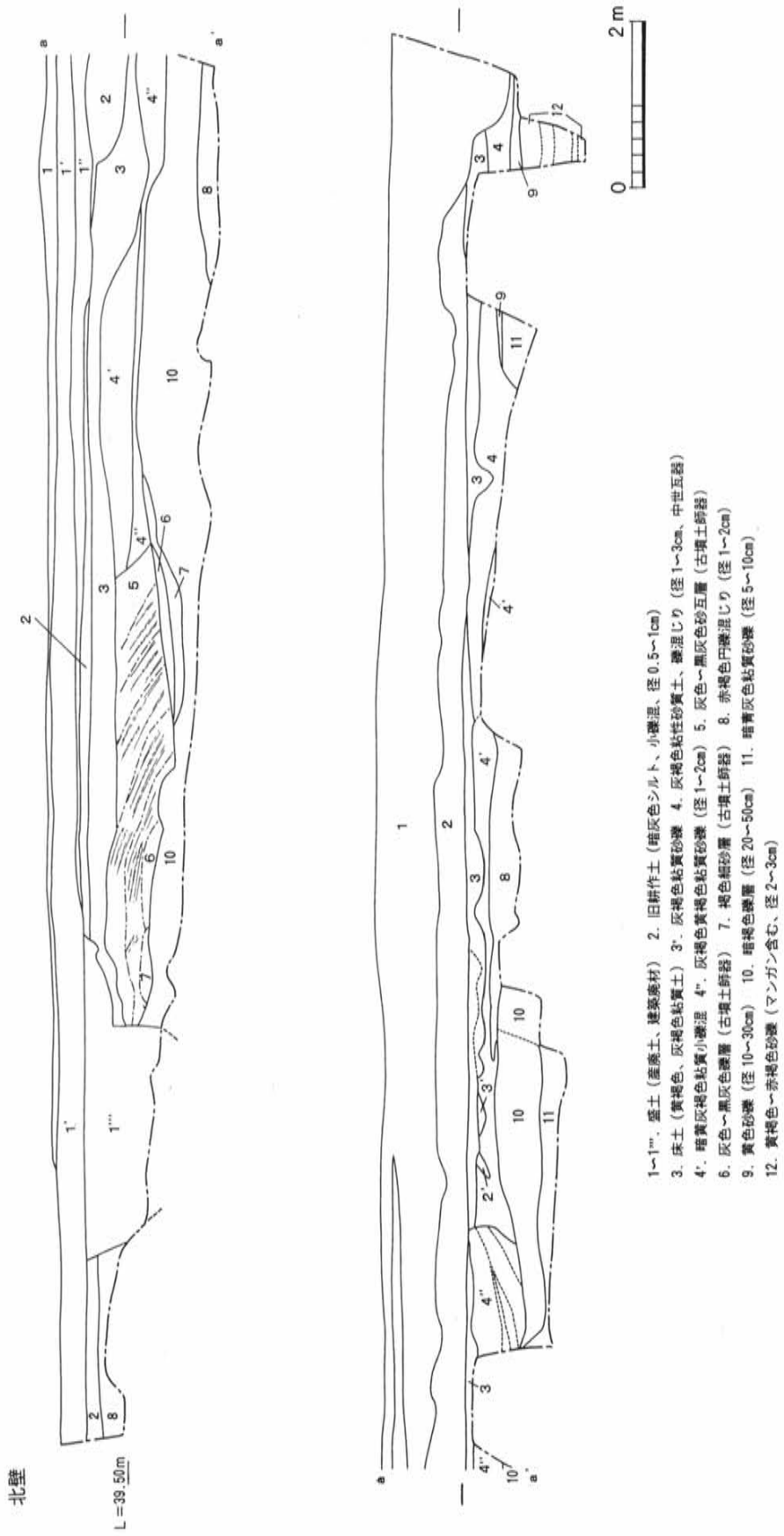
2 トレンチでは東に下る流路の肩部を検出し、この東側の3 トレンチでは西に下る流路の肩部



第33図 菩提寺地区検出遺構平面図、No. 1・3セクション土層図

を検出した。これらは同じ流路の両肩と判断され、2・3トレンチの成果を総合すると、幅約10m、深さ約2mの南北方向の流路跡に復原できる。この流路は、現地形で認められる流路跡に合致する方向である。また、3トレンチでは流路の東肩で土堤状の盛土が認められた。川筋が大きく彎曲していることと含めて考えると、この流路は人工的に開削された可能性がある。

流路内の堆積土の観察から、開削当初は約10mの幅であったが、流路の東側が約5mにわたって人為的に埋め戻され、川幅は約5mへ狭められたようである。また、この時点で川底を補強するために拳大の砂礫を厚さ0.6mにわたって積み上げたようである。狭められた流路内には暗青灰色泥土と砂礫(砂)が互層をなして堆積し、その層序の様子から4回以上の大小の氾濫があった



第34図 菩提寺地区北壁土層図

と思われる。

この河川の時期については、川底の砂礫の下(床面)から近世染め付け片が出土していることから、近世段階に流れていたものと判断される。川幅が狭められた時期については明らかになしえなかったが、地元の方々からお聞きしたところでは、最終的に河川が埋没したのは昭和の始め頃と判断される。

(竹井治雄)

⑦菩提寺地区(第28・33・34図、図版第30・31)

菩提寺地区の試掘調査は平成17年5月23日～6月10日までの間、約110m²の調査を行った。現地表面の標高は40.3～40.4mを測る。現代の盛土下に旧耕作土を確認し、床土とセットで、数枚の耕作土面を確認した。この下位には砂礫層が厚く堆積しており、小泉川水系の流路内砂礫と判断された。旧耕作土内の出土遺物から、中世段階に整地を行って水田の造成を行ったものと推定される。

小泉川水系の堆積土砂は、壁面の土層観察および出土遺物の年代感から、2時期の流路跡があるものと推定される。1つは古墳時代の菩提寺川の旧流路と判断される流路跡で、幅約3m、深さ約0.7～1.2mで、15mにわたって確認した。流路内からは土師器高杯、流路横からは須恵器杯身が出土した。これらの土器は比較的まとまっており、調査地周辺に本時期の集落跡の存在が想定される。

もう1つは古墳時代以前の小泉川旧流路であり、トレンチ全面に堆積した砂礫によりその存在が窺える。しかし、規模などは不明である。この流路内からは土師器甕が出土した。

(戸原和人)

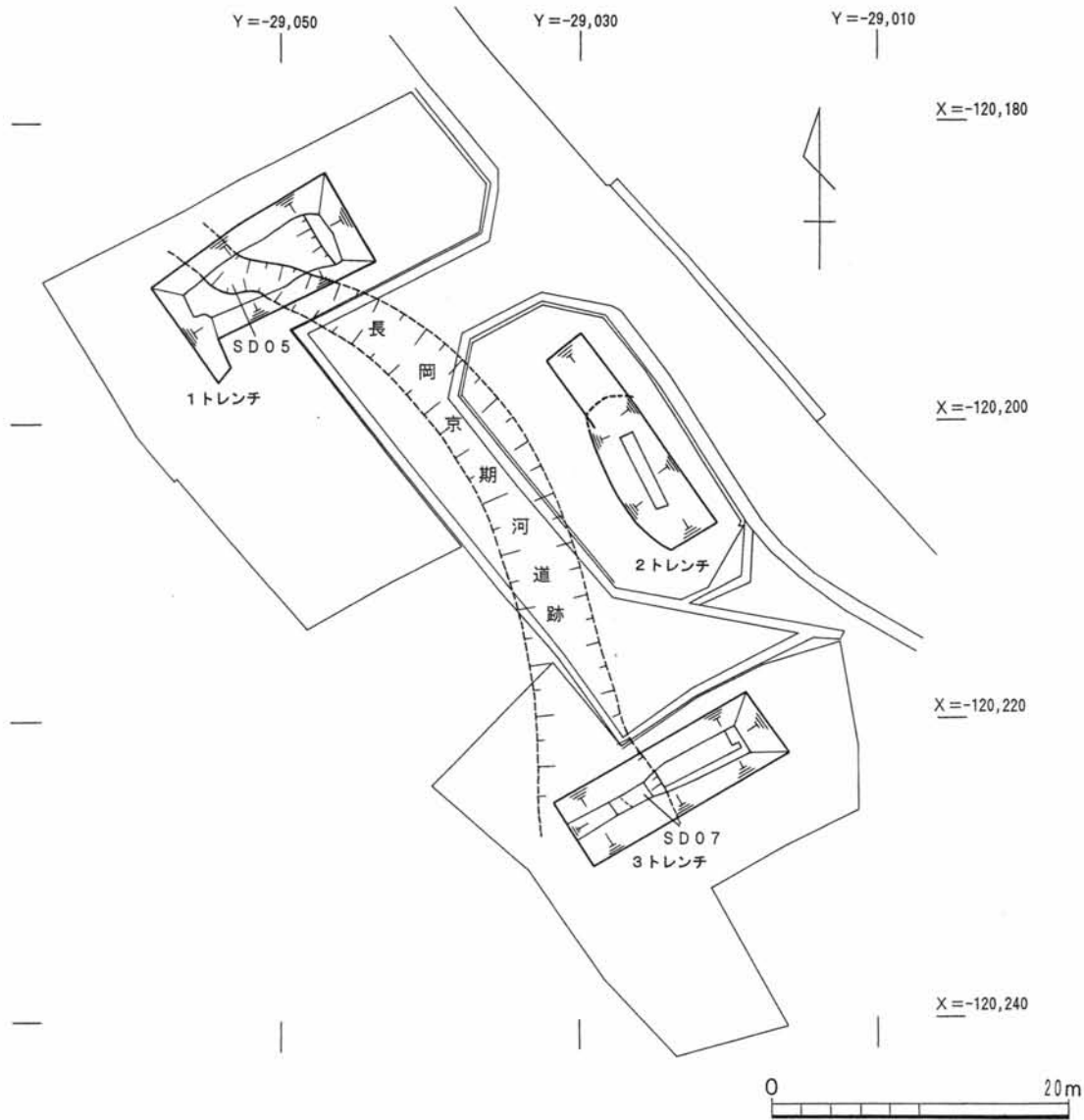
⑧尾流地区(第28・35・36図、図版第32～34)

尾流地区の試掘調査は平成17年7月28日～9月1日までの間、約200m²の調査を行った。

現地表面の標高は39.2mを測る。今回、尾流地区の試掘調査では、3か所のトレンチを設定した。トレンチは北から1～3のトレンチ名を付した。各トレンチとも1.8～2.0mの厚さで現代の盛土層が堆積し、その直下に造成以前の水田耕作土および床土が存在している。以下、耕作土と床土のセットが数セット認められ、その下位で、長岡京期の可能性がある流路跡を確認した。西北西から東南東に、幅2～2.5mの規模を有し、検出した深さは約0.6mである。埋土から、須恵器壺底部片、土馬片が出土している。この流路の下層にはそれ以前の流路があり、幅約5m、深さ1.4mで、内部には砂礫が堆積していた。

2トレンチは湿地状堆積をなし、遺構は確認できなかった。

3トレンチは、水田床土直下で近世段階の遺構を確認した。第1遺構面では、溝1条と土坑1基を確認した。トレンチ東半は湿地状堆積をなし、上面で足跡痕跡を検出した。第2遺構面は第1遺構面から約0.15m下がり、黄灰色砂礫土上面で、南北方向の溝2条と東半で足跡痕跡を確認した。さらに0.1～0.3m下がった面(暗灰色粘質土)で、瓦器椀を伴う時期の、杭列と用途不明の集石を確認した。

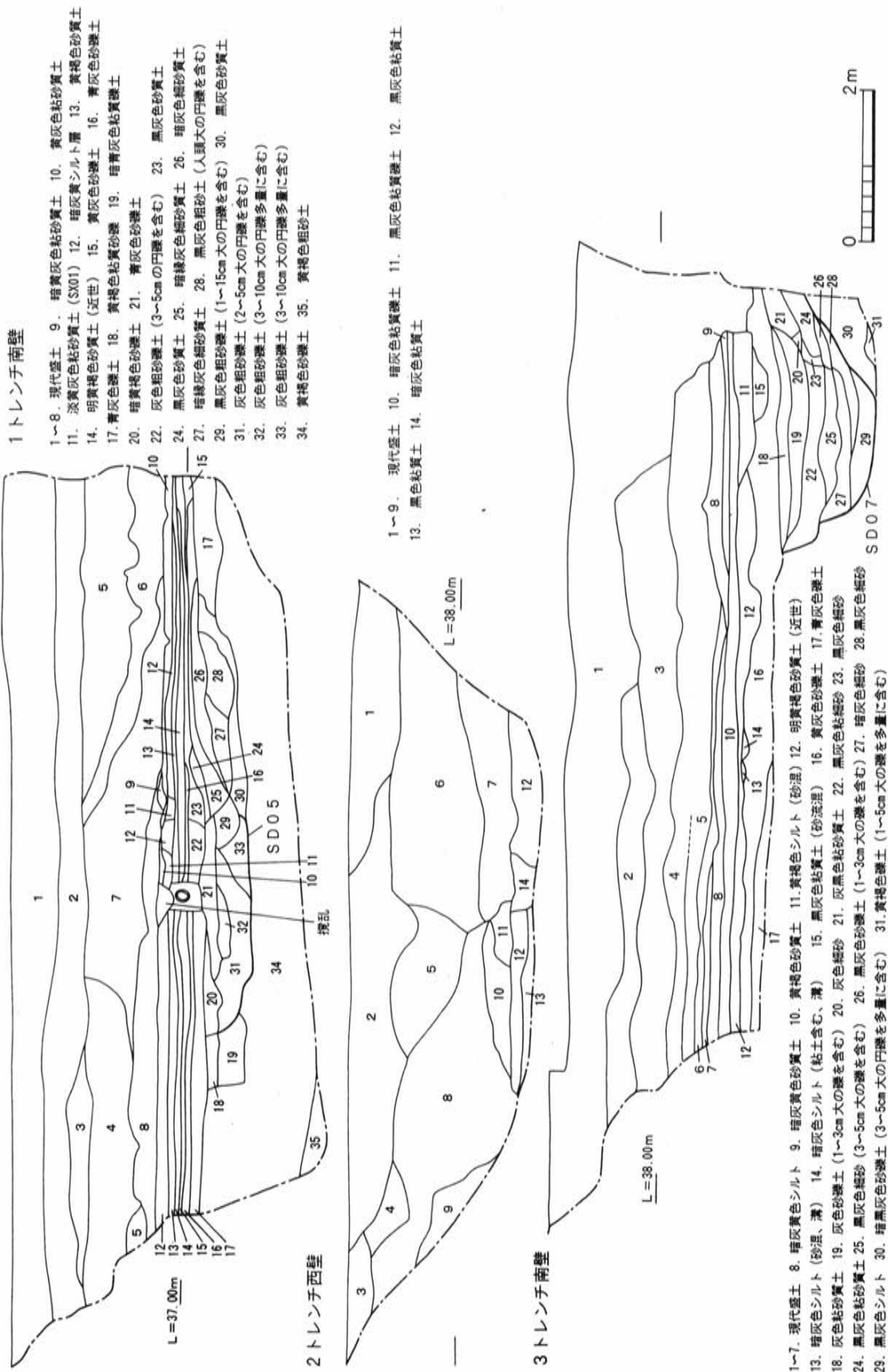


第35図 尾流地区トレンチ配置図

トレンチの最下面の西端では流路を検出した。北西-南東にのびており、溝幅は2m、検出高は1.4mである。埋土から土馬や土師器片が出土している。その年代観から長岡京期の可能性がある。断面土層の観察から、この西側は砂礫を埋土とする流路となっており、出土遺物から古墳時代のものと判断される。流路の幅は、トレンチ外にのびるため、不明である。

1トレンチと3トレンチでは、長岡京期に比定できる可能性のある溝もしくは流路跡を検出した。調査範囲が狭いため、これらの遺構の関係は、現時点では不明と言わざるを得ない。しかし、3トレンチの南約140mには、長岡京期の国家的な祭祀場と考えられている西山田遺跡があり、多量の土馬や墨書人面土器、ミニチュア竈などが出土している。今回、その上流地点の調査で複数個の土馬が出土したことは、国家的な祭祀がピンポイントで行われたのではなく、面的に、広範囲で執り行われた可能性を示唆するものである。当時の祭祀の在り方を検討する上で、今後の周辺の調査が期待される。

(柴 暁彦・戸原和人)



第36図 尾流地区 1 トレンチ東壁・2 トレンチ西壁・3 トレンチ南壁土層図

⑨上内田地区(第37～39図、図版第35～39)

今回の調査地は、長岡京跡条坊復原によれば、右京七条四坊十二町にあたる。調査対象地内の6か所にトレンチを設け、遺跡および遺構の遺存状況の把握を目的に調査を実施した。現地発掘調査は平成18年1月20日～2月27日の間に実施した。調査の総面積は250m²である。

現地表面の標高は31.2～32.4mを測る。試掘トレンチは、西から東方向にそれぞれ1～6のトレンチ番号を付した。調査にあたって、表土掘削には重機を使用し、その後は人力による遺構検出作業を行った。また、表土掘削で検出した礫層については、状況を把握する目的で重機による深掘を実施した。以下、各トレンチの概要を記す。

1 トレンチ 全長20m、幅4mの東西方向トレンチである。地表下0.5m(海拔32.3m)で人頭大の礫を含む砂礫層を検出した。標高30.5mまで掘り下げたが礫層の底面は検出できなかった。トレンチ内での遺構検出はないが、礫層上面から中世の土師器皿の破片が出土した。礫層は、調査地の北を東西に流れる小泉川の旧河川部の堆積層と判断する。この礫層中から須恵器甕片が出土した。

2 トレンチ 全長15m、幅3mの南北方向トレンチである。地表下0.7m(海拔31.2m)で厚い砂礫層を検出した。標高30.3mまで掘り下げたが礫層の底面は検出できない。遺構検出はみられない。

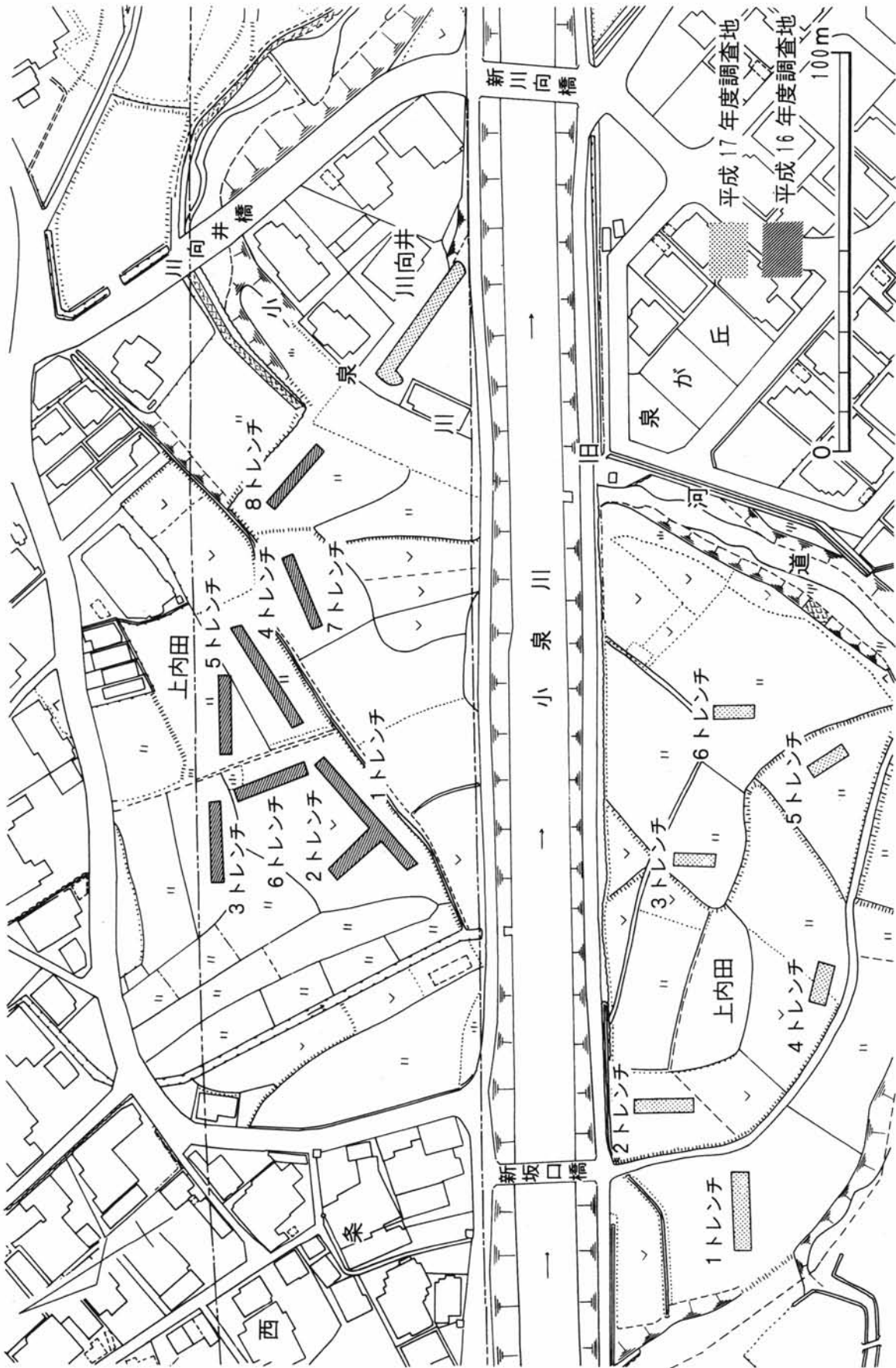
3 トレンチ 全長10m、幅3mの南北方向トレンチである。地表下0.4m(標高31m)で厚い砂礫層を検出した。また、標高29.5m付近で青灰色粘土層を検出した。この粘土層面が一時期の旧小泉川の川底と判断する。遺構検出はみられない。

4 トレンチ 全長10m、幅4mの東西方向トレンチである。地表下0.4m(標高32m)で砂礫層を検出した。標高29.5mまで掘り下げたが礫層の底面は検出できなかった。このトレンチでは唯一東西方向溝を1本検出した。幅、深さともに0.3mを測る。溝は黄灰色粘質土で埋まるが、無遺物である。礫層上面での精査で土師器片が出土した。

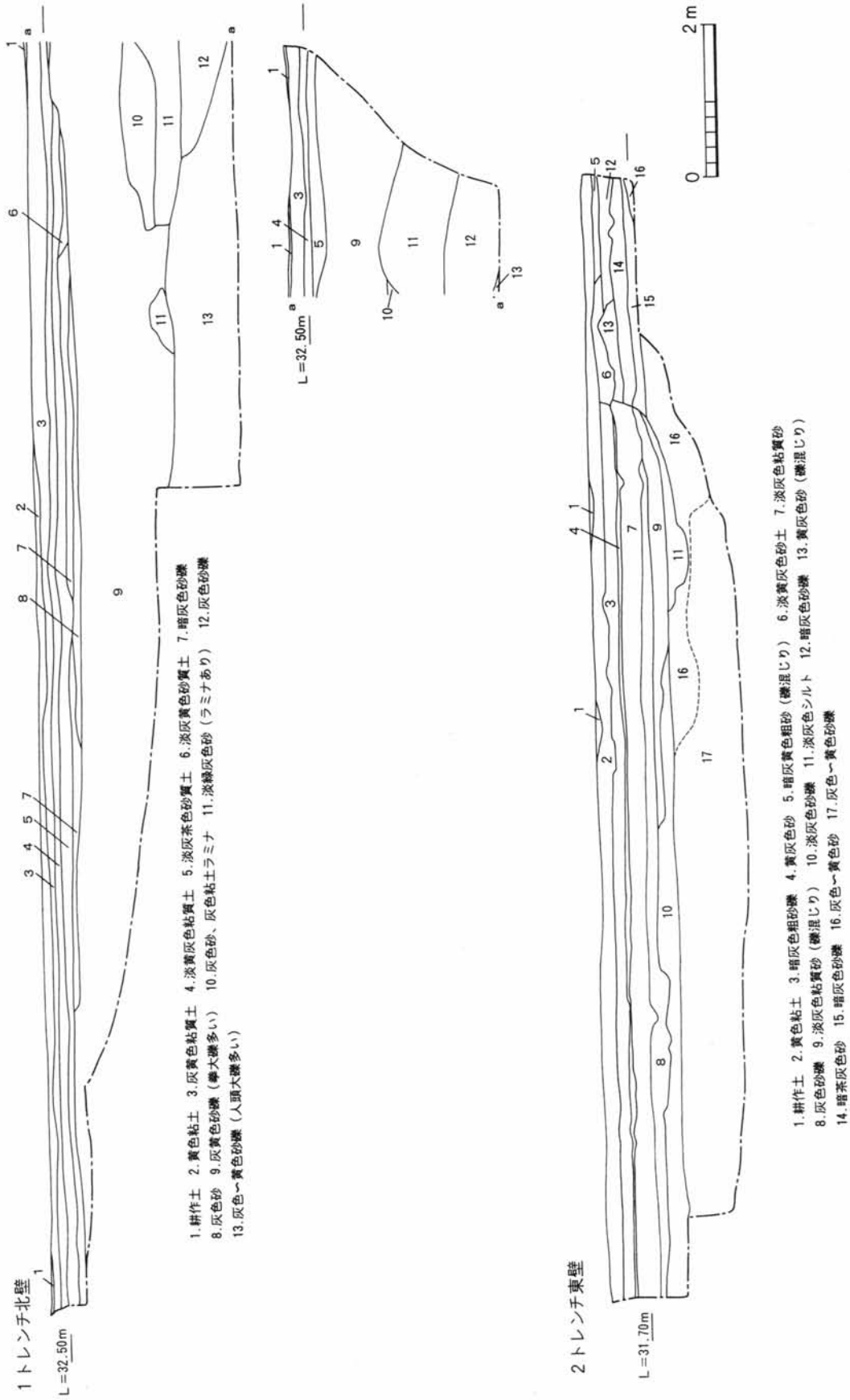
5 トレンチ 全長10m、幅3mの南北方向トレンチである。地表下0.7m(標高30.8～31m)で厚い砂礫層を検出した。また、標高29.4m付近で青灰色粘土層を検出した。この粘土層面が一時期の旧小泉川の川底と判断する。トレンチ中央部の東西両壁面の観察から、東西方向にのびる畦畔状の土層の高まり(幅約2m×高さ0.6m)と両側の溝状遺構の存在を確認した。溝状遺構の最終埋没土の中から、染付椀の破片の出土をみた。

6 トレンチ 全長10m、幅3mの南北方向トレンチである。地表下0.3m(標高30.7m)で厚い砂礫層を検出した。また、標高29.6m付近で南方向に下がり傾斜をもつ青灰色粘土層を検出した。これは旧小泉川流路の傾斜面を反映しているものと思われる。

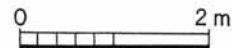
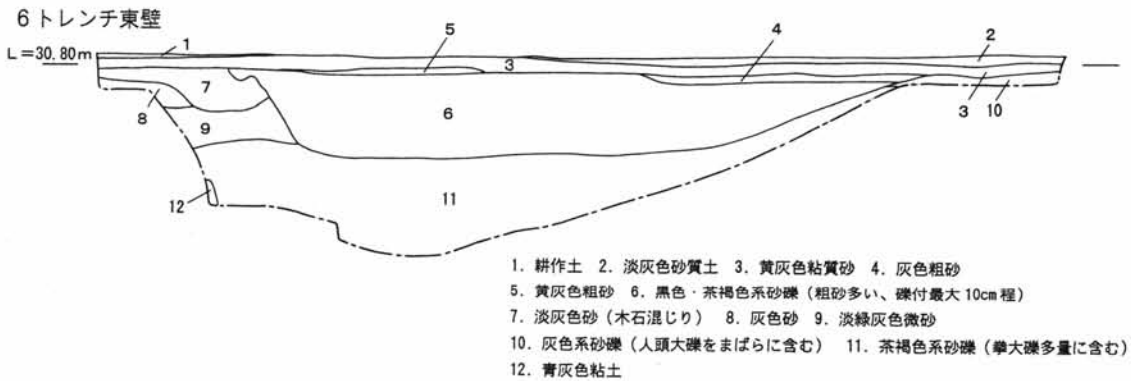
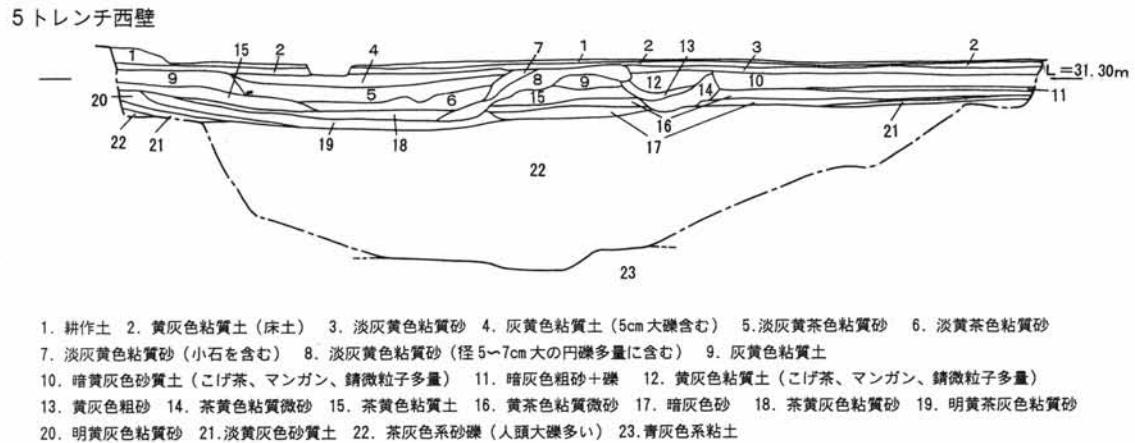
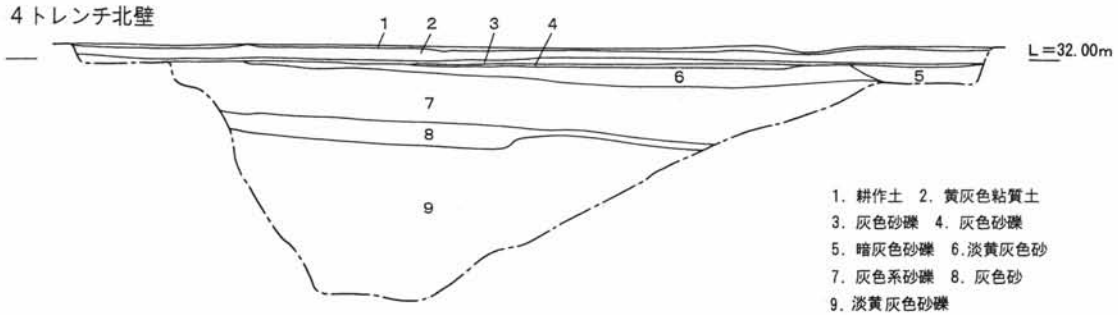
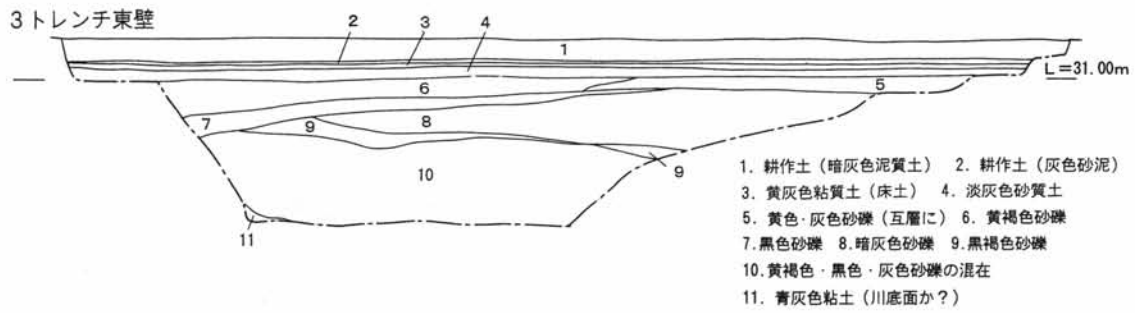
6か所すべてのトレンチから、旧小泉川と判断する砂礫の厚い堆積層を検出した。3・5・6トレンチでは、川底と判断する青灰色粘土層の広がりを確認した。4・5トレンチで溝および畦畔状の高まりを検出したが、いずれも近世以降の時期と判断する。遺物では、わずかに土師器・須恵器の破片が数点みられるが、器壁の磨滅が進んでいることから、小泉川上流部からの流れ込



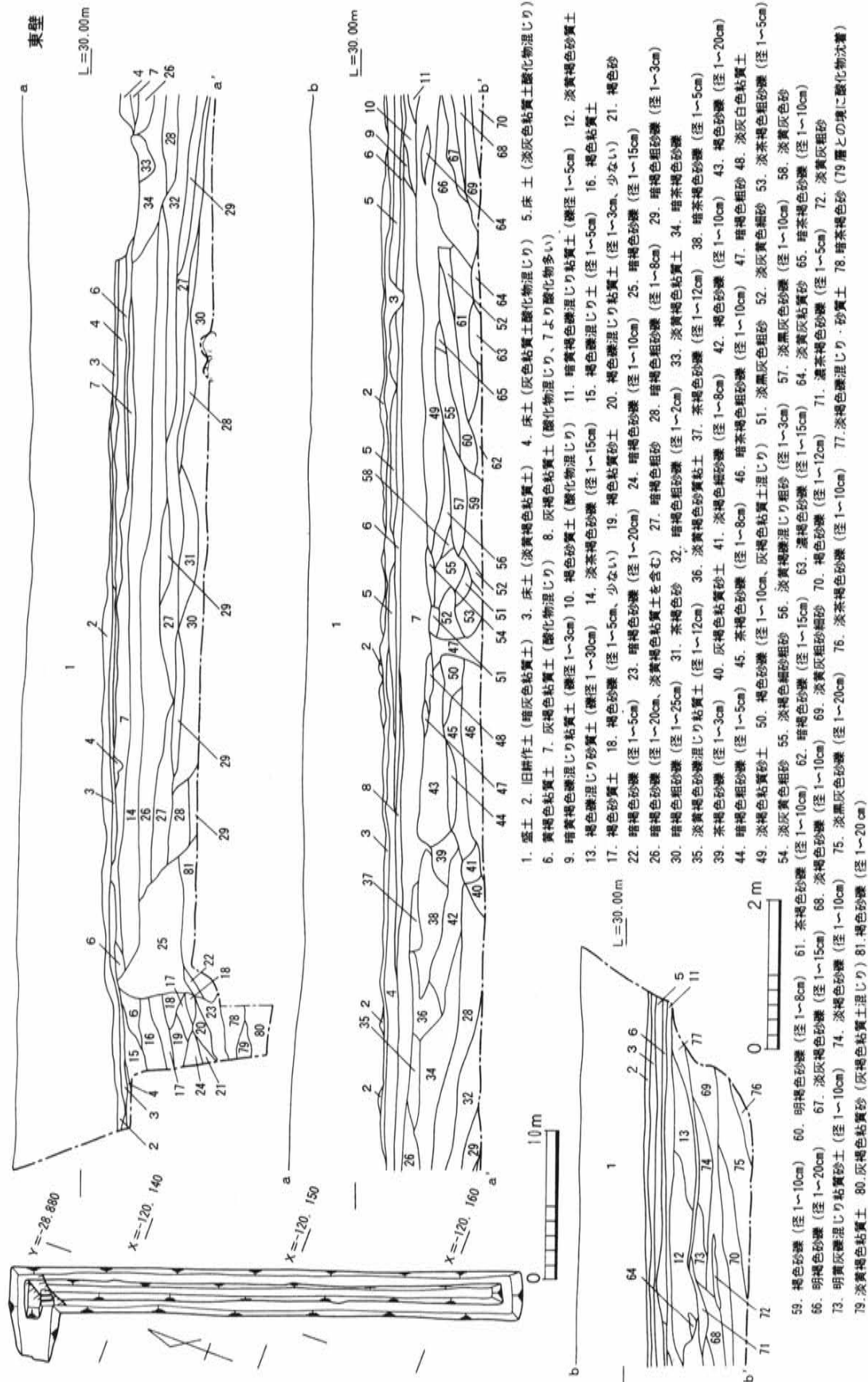
第37図 上内田・川向井地区トレンチ配置図



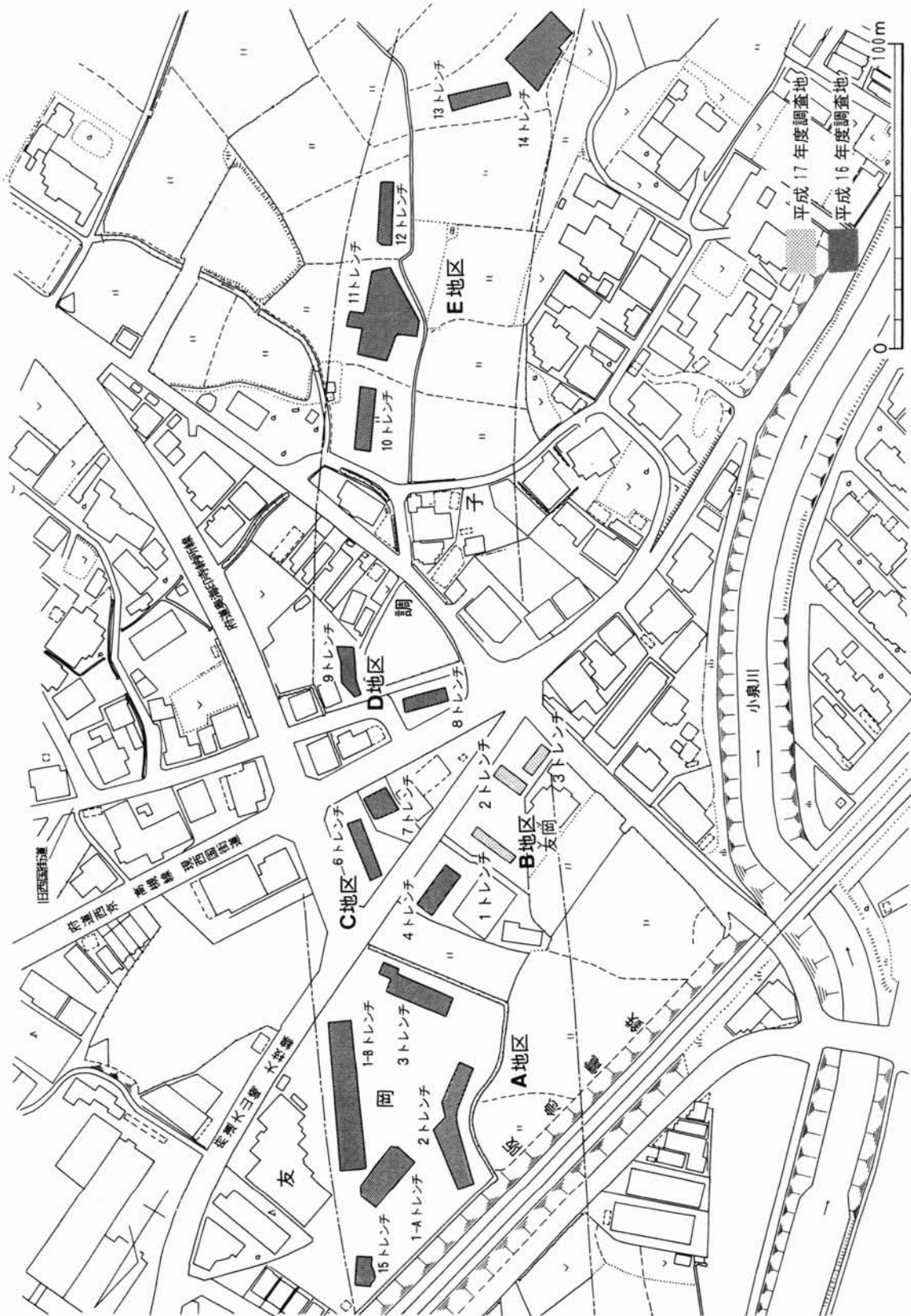
第38図 上内田地区1トレンチ北壁・2トレンチ東壁土層図



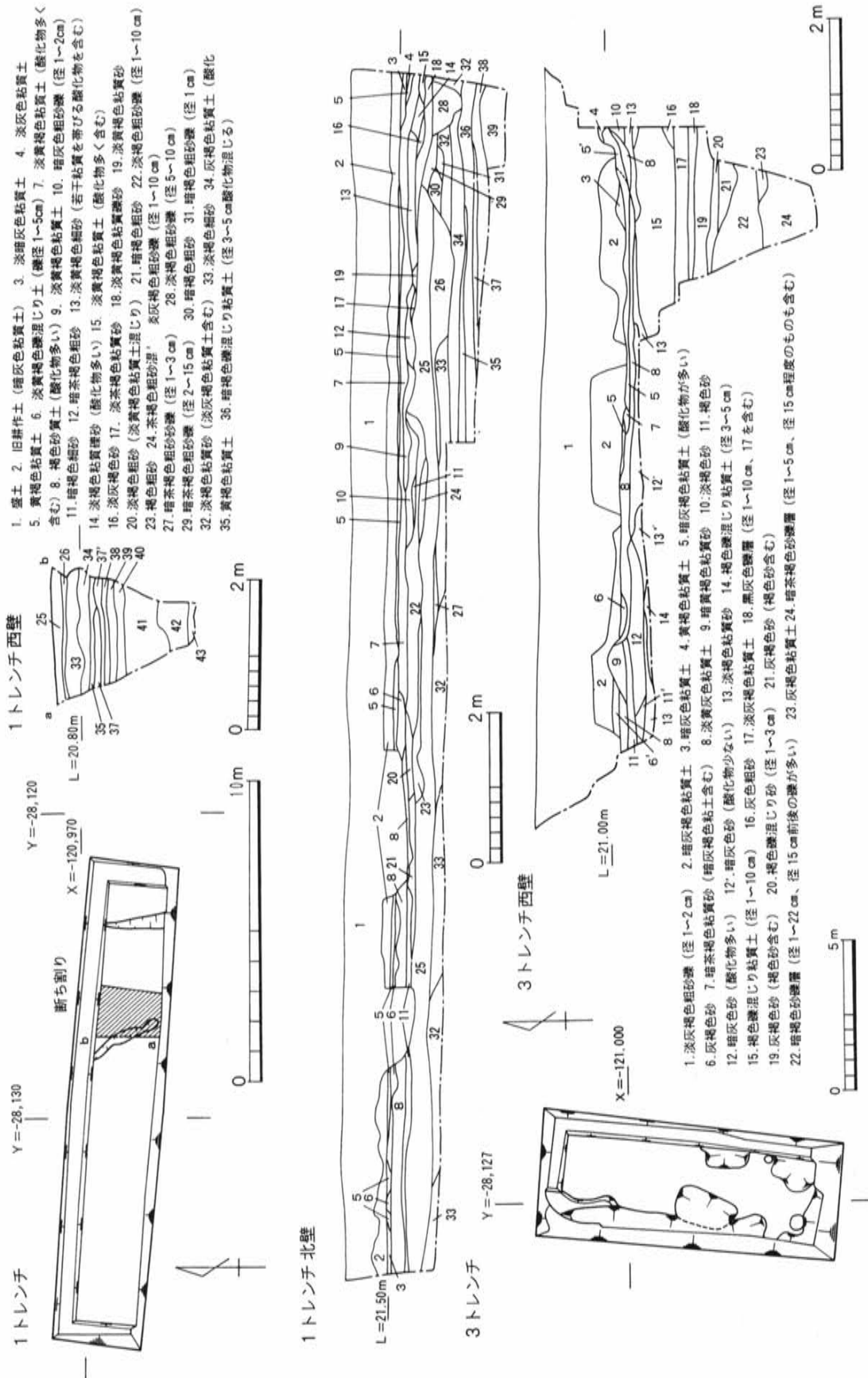
第39図 上内田地区3トレンチ東壁・4トレンチ北壁・5トレンチ西壁・6トレンチ東壁土層図



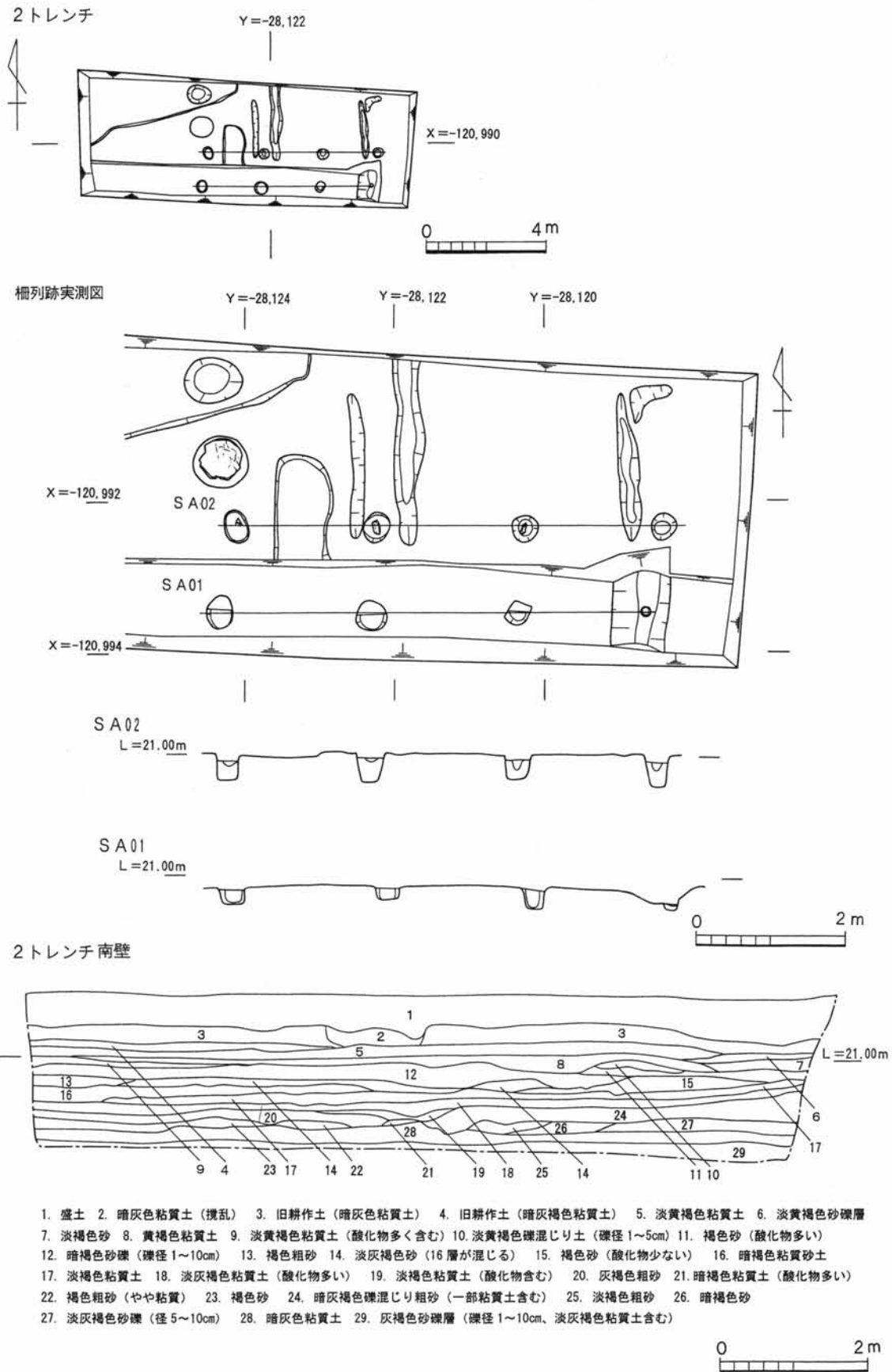
第40図 川向井地区調査地平面図・東壁土層図



第41図 友岡地区トレンチ配置図



第42図 友岡地区検出遺構平面図、1 トレンチ北壁・3 トレンチ西壁土層図



第43図 友岡地区検出遺構平面図、柵列跡実測図、2トレンチ南壁土層図



第44図 調子地区トレンチ配置図

んだ遺物と判断される。以上、今回の試掘調査では、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

(竹原一彦・戸原和人)

⑩川向井地区(第37・40図・図版第40)

川向井地区の試掘調査は5月23日～6月3日までの間に、3m×34mのトレンチを設定して約115㎡の調査を行った。

現地表面の標高は30.8mを測る。現代の整地土(厚さ1.1～1.3m)を除去すると、旧耕作土・床土となり、その下位では小泉川の旧流路内に堆積した砂礫を確認した。深さ2mにわたって断ち割りをを行ったが、厚く砂礫が堆積していることを確認したにとどまった。砂礫層中から瓦器片が出土した。

⑪友岡地区(第41～43図、図版第41～43)

友岡地区の試掘調査は3か所のトレンチを設定して、平成17年6月6日～7月27日までの間、約140㎡の調査を行った。

現地表面の標高は21.8～22mを測る。現代盛土が約50cmの厚さで堆積しており、その下位が盛土以前の旧地表面である。水田面を三面確認し、第1・2水田面の耕作土と床土中から現代陶磁器が、第3水田面が旧耕作土・造成土中から寛永通寶・永楽通寶が出土したことから、第1・2水田面が近代、第3水田面が近世と判断される。第2・3水田面の上には北西から南東方向に洪水砂礫が厚く堆積しているのが認められ、土地利用が開始されて以降、何度も小泉川が氾濫したことが窺われる。この下位には、部分的に2mの深さまで断ち割りをを行い、小泉川旧流路内の砂礫が厚く堆積しているのを確認した。砂礫内からは、瓦器片が出土した。この砂礫内には薄く粘土層が堆積している箇所があり、1トレンチでは南に下り、3トレンチでは北に下る傾斜をもつ。両粘土層は同時期の堆積層とは言えないが、2トレンチ付近にある段階の小泉川旧流路本体があったものと想定できる。

砂礫内の出土遺物から、中世後半以降に水田として土地利用されたことが窺われる。また、この地にあったと伝承されている調子氏関連の遺構・遺物は全く確認できなかった。

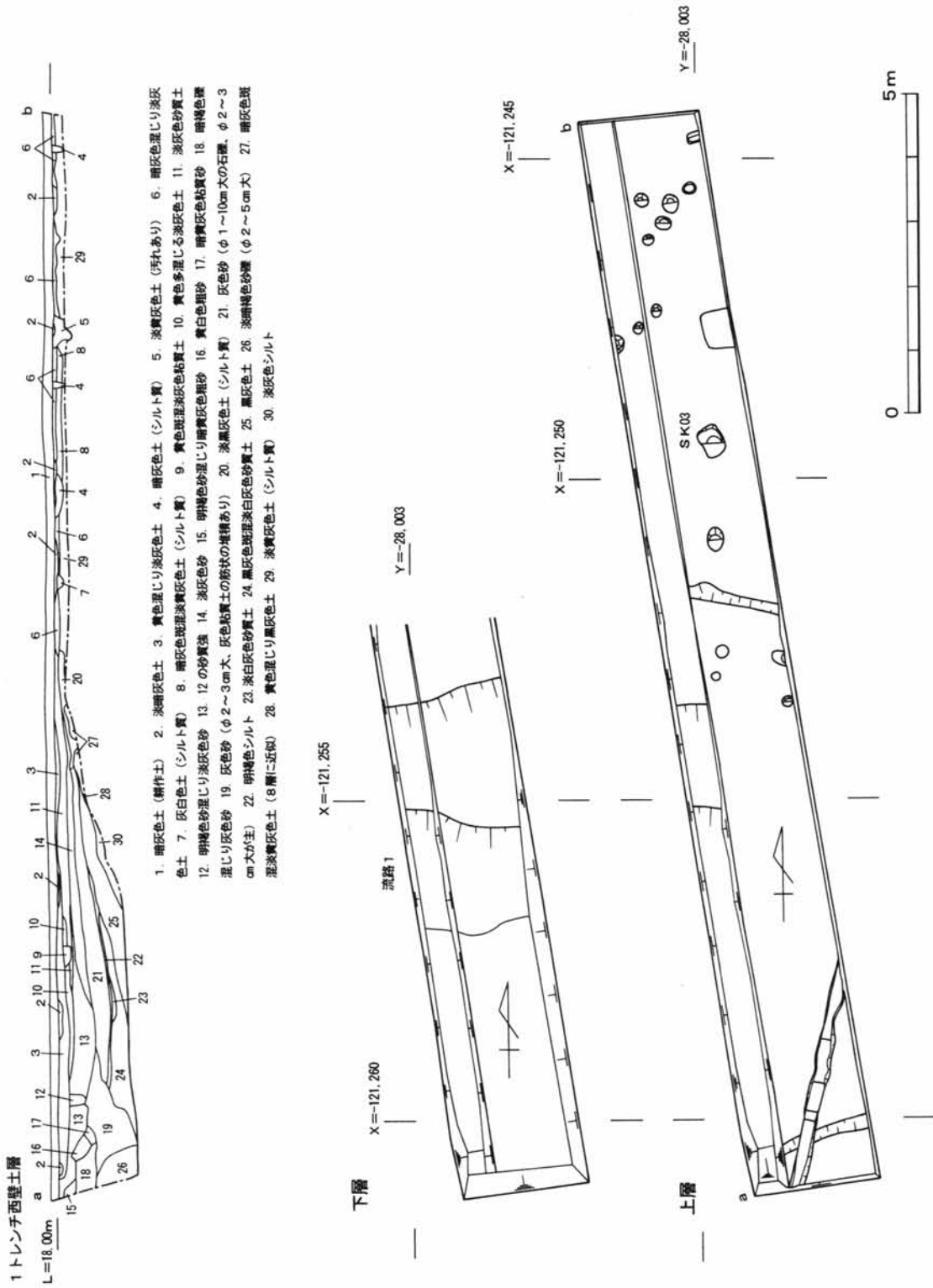
(増田孝彦・戸原和人)

⑫調子地区(第45～50図、図版第44～53)

1) 調査概要

調子地区は、平成16年度に調査を行った友岡・調子地区E区の南東側にあり、JR西日本鉄道東海道線と小泉川に挟まれたところに位置する(図版第1-(1)・(2))。試掘対象地内の現地形は、北西から南東および東側に向けて下る緩傾斜面をなしており、その斜面地を壇状に形成して田畑が造作されている。南側は、現在の小泉川が堤防を高く盛り上げられて天井川となっており、東側は、JR西日本の鉄道軌道が土手を盛り上げた上に敷設されている。

調子地区の試掘調査は8か所の調査区を設けて、総計約270㎡の調査を行った(第45図)。用地買収などの都合により、重機進入路が確保できなかったため、人力により表土以下、すべての土砂の掘削を行った。トレンチは、北から南に1～8トレンチとして報告する。1トレンチは調子



第45図 調子地区検出遺構平面図、1 トレンチ西壁土層図

地区の北端に位置し、現調子集落に近い調査区である。2～8トレンチはJR西日本と小泉川に画された、低地に設定したトレンチである。1トレンチは標高18.1m付近に地表面があるのに対して、7トレンチは標高16.4m付近に現地表面があり、約1.7mの比高差がある。調査期間は平成17年11月21日～平成18年2月10日までの間を要した。

1トレンチ 2m×17mの調査区を南北に設定した。このトレンチの基本層位は、1層の暗灰色土(耕作土)の下が6層の暗灰色混じり淡灰色土となり、29層の淡黄灰色土(シルト質)の地山となる。この間、約20cmの厚さである。6層の暗灰色混じり淡灰色土には、中世から弥生時代にいたるまでの土器片が包含されていた。

調査の結果、トレンチの北側でピット群、南側で素掘り溝を検出し(上層と呼称)、南半の素掘り溝の下層では、東西方向の流路跡を検出した(下層と呼称)(第46図、図版第45)。

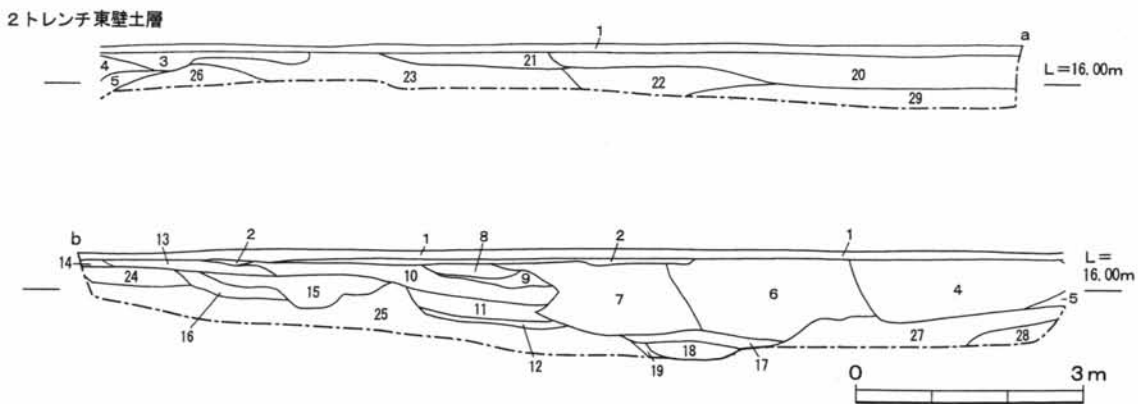
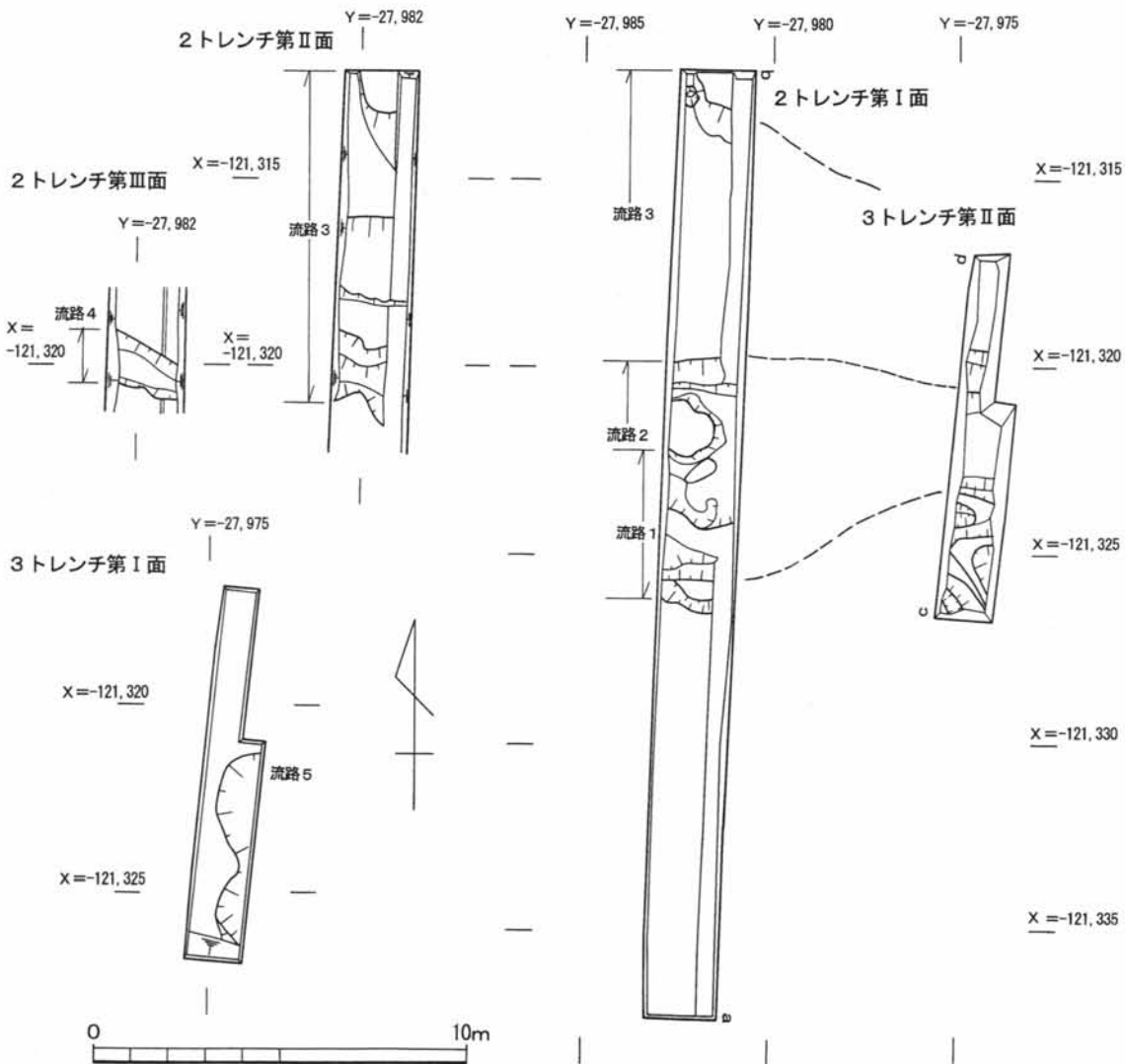
上層では多数の柱穴状の小ピットと数条の溝を検出した。小溝は現代水田に伴う暗渠溝状のものである。小ピットは径15cm、深さ10～15cm程度のもので、埋土中から土師器の小片が出土した。柱穴SK03は、小ピットから一回り大きく、35×45cmの隅丸方形を呈しており、平面的に精査をしても柱当たりは確認できなかったが、半割を行うと、掘り方内に柱痕が遺存しており、埋土中から奈良～平安時代の須恵器杯B蓋片や布目瓦片が出土した。また、柱穴などの遺構精査中に、8層の暗灰色斑混淡黄灰色土(シルト質)から弥生土器片やサヌカイトの剥片などが出土したが、これに関連する遺構は確認できなかった。

下層では、トレンチの南半で流路1を検出した。当初、2～8トレンチと1トレンチの間の比高差約1.7mを形成する崖面の一部と考えたが、現時点では、埋土の状況から流路跡と判断している。流路1はほぼ東西方向に検出しており、幅8m以上、深さ約1mを測るものである。21層から弥生土器片がわずかに出土しているだけで、流路1の形成された時期は不明であるが、流路の埋土最上層からは布目瓦が10数点まとまって出土しており、奈良～平安時代にかけて埋め立てられたものと推測される。

2トレンチ 25m×2mのトレンチを南北に設定した。このトレンチでは、平面的に3時期の流路跡を確認した。上面から第Ⅰ～Ⅲ面とする。検出した流路跡は、弥生時代中期、弥生時代末、古墳時代(2時期)の4時期のものである。これらの流路跡は、時期を違えてもほぼ同一の場所に、東西方向に検出した。

流路1(第46図、図版第46-(1)・(2)) 4～6層の3～5cm大の円礫を埋土とする流路跡で、急激な水の流れて押し流された砂礫により、一気に流路が埋まった状況である。幅6mにわたって検出したが、掘削後の土層の観察から、南側の4・5層(幅3.7m、深さ0.8m)と6層(幅2.8m以上、深さ1.1m)とで、堆積時期を違える、異なる流路であることが認められた。

流路2(第46図、図版第46-(1)・(2)) この流路内に堆積した砂礫は7～9層で、南辺の肩は流路1により削平を受けており、その流路幅は不明である。幅3.6m以上、深さ約1mである。流路を埋めるのは、淡灰色砂と淡灰色粘質土、淡黄灰色砂が筋状に薄く堆積した層が幾重にも重なった堆積層である。やや流量がある状態で、安定的に砂粒が堆積した状態である。流路1・2



1. 茶灰色土(耕作土) 2. 淡灰色砂混じり土(面い) 3. 茶黄色土(φ10~20cmの石を含む) 4. 淡灰色砂礫(φ3~5cmの円礫多数) 5. 淡暗灰色粗砂 6. 淡茶灰色砂礫(φ1~5cm大の黄褐色石礫多数) 7. 淡灰色砂・淡灰色粘質土・淡黄灰色砂の筋状堆積の互層 8. 淡灰色砂 9. 淡黄灰色砂 10. 黒灰色砂混じり土 11. 褐色砂混じり淡灰色砂質土 12. 灰色土混じり淡黄灰色砂礫 13. 淡灰色砂混じり土 14. 茶色斑混淡灰色砂質土 15. 淡灰色シルト 16. 淡黄灰色砂混じり土 17. 淡暗黄灰色細砂 18. 暗灰色粘質土 19. 淡灰色粘質土 20. 淡黄灰色砂質土 21. 淡黄灰色礫混じり土(10~15cmの石を含む) 22. 淡黄灰色礫混じり土 23. 淡黄灰色砂質土 24. 褐色砂礫(φ1~2cm大の円礫) 25. 褐色砂礫(φ5~10cm大の円礫) 26. 淡茶褐色粗砂 27. 黄茶色砂礫 28. 淡黄茶色砂質土 29. 灰白色シルト(黄色斑混)

第46図 調子地区検出遺構平面図、2トレンチ東壁土層図

内からは、少量ながら、古墳時代の須恵器片が出土している。これらの須恵器はローリングを受けて、角が磨耗したものである。

流路3 (第46図、図版第46-(3)・47-(1)) 第Ⅱ面で検出した。10~16層が埋土となる流路跡で、北辺はゆるやかに下る傾斜面をなしているが、南辺は流路1・2と重複していて、消失している。北辺のなだらかな斜面を形成する10・11層には、弥生時代末~古墳時代初頭の土器が多く含まれており、特に10層に集中して出土した。これらの土器片は、ほとんど磨耗を受けておらず、接合すると大きな破片となることから、この近辺で投棄されたものと判断される。トレンチの東壁土層で見ると、深さ0.9m、幅6.4m以上である。

流路4 (第46図、図版第47-(2)・(3)) 流路1・2の下位で検出したものである。流路内の堆積土は17~19層で、弥生時代中期の土器片が多く出土し、また、自然木も遺存していた。幅2.2m、深さ35cm程度を確認したに留まった。上位が流路1~3によってどの程度削平を受けているかは分からないが、当時の生活面が2層下面付近とすると、流路1~3とはほぼ同規模のものと復原できる。

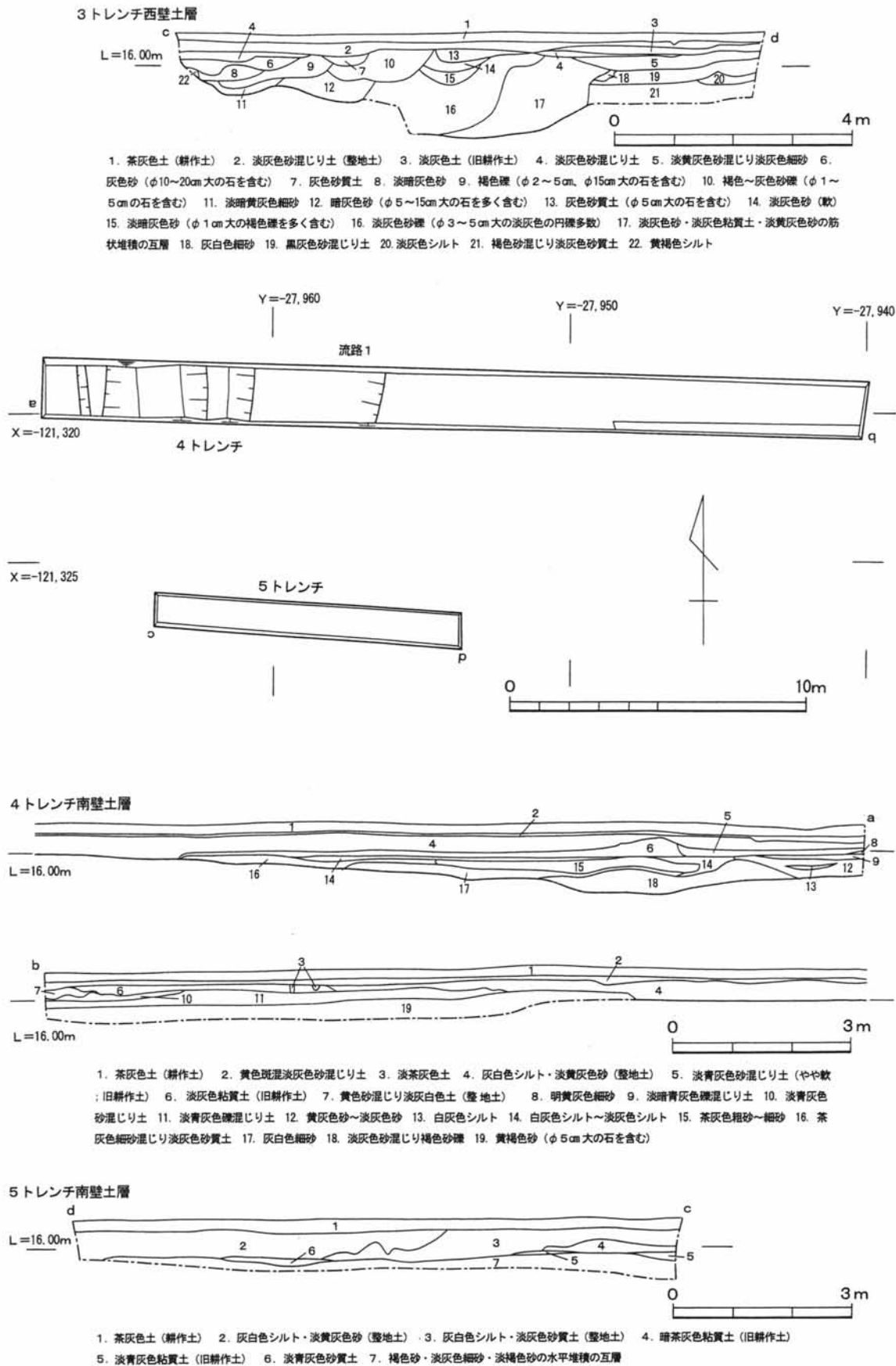
トレンチの南半、流路1の南側では、20・21層を除去して、南に向けて下る緩傾斜面を確認した。ある段階の川の流れにより形成された傾斜面と判断されるが、遺物の出土は全く認められず、その堆積時期は不明である。

3 トレンチ 2 トレンチの東隣に1m×10mのトレンチを南北方向に設定し、一部東側に拡張した。では、2面で調査を実施した(第48図、図版第48)。第Ⅰ面は1層の茶灰色土(現代耕作土)・2層の淡灰色砂混じり土(整地土)を除去した面で、近世段階と判断される流路5を、第Ⅱ面はその下位で、流路1~3を検出した。

流路5 (第47図、図版第48-(1)) トレンチの東半のⅠ面で検出した流路跡である。流路内には、黄褐色砂・礫が土坑状に堆積していた。砂・礫の堆積状況から、水の流れによって凸形に攻撃されて抉れたところに、砂礫が一気に堆積したものと推定された。この流路に対応する砂礫層は、東側の4トレンチでは確認できていない。4・5・7・8トレンチでは灰色系統の砂礫が厚く堆積しており、この黄褐色系統の砂礫とは明らかに異なること、4トレンチの北側には現田畑を区画する段差(1~1.5m)が南北に連なることから、3トレンチの東側には南北に流れる流路跡が存在し、その流れが凸形にふくれた位置を調査したものと判断される。小泉川水系は、大きくは北西から南東に向けて傾斜面を有しており、その方向に流路が形成されていることから、この流路は小泉川の本流ではなくて、本流から溢れ出た水が細かな地形に応じて、南北方向に流れたものと判断される。

流路1~3 (第46図、図版第48-(2)・(3)) 3トレンチの西壁の土層は2トレンチと基本的に同じで、土層の観察により、流路1~3を確認した。16層が流路1、17層が流路2、18~21層が流路3に相当するものである。19層からは庄内期の土器片が多く出土している。

トレンチの北半、流路2の上位を覆う5層の淡黄灰色砂混じり淡灰色細砂もまた、ある段階の流れによる堆積砂と判断されるが、堆積層が薄いことから、その規模が小さいものであろう。ト



第47図 調子地区検出遺構平面図、3トレンチ西壁・4トレンチ南壁・5トレンチ南壁土層図

レンチの南半、流路1の南側では、ある段階の流路により形成された凹凸が認められたが、これに対応する形状の流路は、3トレンチで認められなかった。遺物の出土は見なかった。

4トレンチ 3トレンチの東側に、農道を隔てて東西方向に28m×2mの範囲に設定したトレンチである(第48図、図版第49)。基本的な層位は、茶灰色土(耕作土)下には黄色斑混淡灰色砂混じり土(床土)があり、4層の灰白色シルト・淡黄灰色砂の整地土下には、トレンチ西半に5層の淡青灰色砂混じり土、トレンチ東端に6層の淡灰色粘質土が旧耕作土として堆積している。6層下の7層の黄色砂混じり淡灰白色土もまた田畑造成に伴う整地土と判断している。

このトレンチでは、南北方向の流路跡を検出した。2・3トレンチで確認した弥生時代中期から古墳時代にかけての東西方向の流路跡は確認できなかった。なだらかに西側を下る緩傾斜面を確認し、流路の東肩部と推定した。トレンチ西端付近では、西に向けて上がる地形を確認し、流路1の西肩の一部と判断された。トレンチ西端付近では西に向けて上がる傾斜面を検出し、西肩の一部と判断された。検出した幅は11.5m以上で、深さは約55cmである。最深部を流路の中央として折り返すと、推定の幅約15mである。流路1内からは、須恵器・土師器に混じって、瓦器片が出土している。また、東半の10・11層からは、須恵器・瓦・黒色土器・緑釉陶器片が出土しており、平安時代前期頃の遺物でまとまっている。

5トレンチ 4トレンチの南側に設定したトレンチで、10m×1mの範囲を調査した(第48図、図版第50)。茶灰色土(耕作土)下には2層の灰白色シルト・淡黄灰色砂、3層の灰白色シルト・淡灰色砂質土の整地土層があり、4層の暗茶灰色粘質土の旧耕作土が薄く堆積している。2・3層からは弥生土器・土師器・須恵器に混じって、近世～近代の陶磁器片が出土している。この下層は、7層の褐色砂・淡灰色細砂・淡褐色砂が水平に堆積した互層となっており、水性堆積の砂層が広く分布している。4トレンチの状況を鑑み、これより下位は自然流路の堆積層と判断した。遺構・遺物は確認できなかった。

6・7トレンチ L字形に設定したトレンチの内、南北方向に28m×2mに設定したトレンチが6トレンチ、東西方向に19.5m×2mに設定したトレンチが7トレンチである。また、最終局面で、流路3の肩部を確認するために7トレンチの一部を拡張した。6・7トレンチでは、多数の流路跡を検出した(第49図、図版第51-(1))。流路1～3からは遺物が出土している。

井戸(第49図、図版第53-(1)・(2)) 6トレンチと7トレンチで1基ずつ検出した。ともに縦板の小口を円形に組み、井筒を設けているものである。井戸SE02を完掘したところ、井筒は径1.1mで三段に組まれており、深さ2.6mである。これらの井戸は3層の灰白色シルト・淡灰色砂質土層によって覆われていること、井戸SE02の井筒を埋める土砂中から近世陶器片が出土していることから、近世段階のものと判断される。そのほか、埋土中から土師器・須恵器小片が出土している。

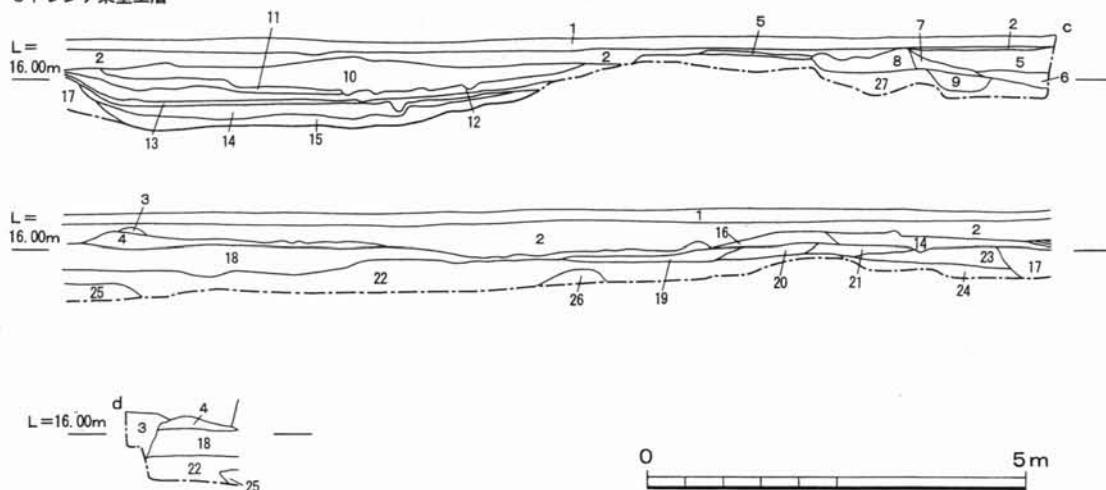
流路1(第48図、図版第51-(2)) 北東から南西に向けて検出した流路跡で、幅約3.3m、深さは最大で1.3mである。方向的には、7・8トレンチの流路5と同一のものと思われるが、流路1には13層の黒灰色シルトが帯状に堆積しているのに対して、流路5は灰色砂系統の砂礫のみが

堆積しており、埋土が全く異なる。また、流路跡1の方向は北東—南西方向であり、しかも、トレンチ内においては北東が高く南西が低い傾斜となっている。小泉川水系に認められる傾斜面に直交し、傾斜の方向を一致していないことから、人工的に掘削された可能性もある。埋土中からの遺物の出土は少なく、10層の褐色斑混じり淡灰色シルト層から、須恵器・土師器小片に混じって、白磁小片が出土している。

流路2 (第48図) 6トレンチ東壁土層18~22層、7トレンチ北壁土層23・24層、7トレンチ拡張部7~9層を堆積土とする流路跡である。幅13m以上、検出高約40cmである。埋土中から庄内期の土器片が出土している。

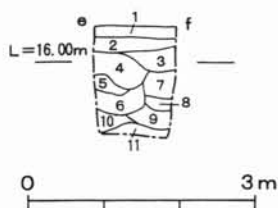
流路3 (第49図、図版第8-(3)、9-(3)) 幅1~1.7m、検出高は最大で60cmである。7トレンチ北壁土層21・22層、7トレンチ拡張部4~6層を堆積土とする流路跡である。6トレンチ東壁土層では、25・26層に挟まれた、22層の窪地が相当するが、流路2の埋土である22層を上下に分層することができなかった。また、流路3は流路2と同じく、庄内期の土器片が混じることから、両流路は、もともとは一つの流路の中の、時期差だけである可能性もある。流路2・3は、

6トレンチ東壁土層



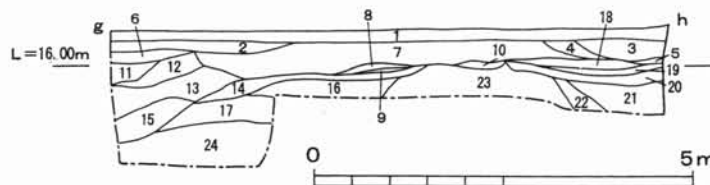
1. 茶灰色土 (耕作土) 2. 灰白色シルト・淡灰色砂質土 (整地土) 3. 暗灰色シルト 4. 灰白色シルト (整地土) 5. 淡黄灰色砂混じり土
6. 灰色シルト 7. 淡青灰色粘質土 8. 褐色礫 (φ1~2cm大) 9. 淡灰色砂礫 (φ1cm未満) 10. 褐色斑混じり淡灰色シルト 11. 灰白色シルト
12. 淡灰色砂混じり土 13. 黒灰色シルト 14. 淡灰色シルト 15. 淡灰白色砂質土 16. 黒灰色砂混じり土 17. 茶灰色砂礫 (φ5~8cm大の石多数)
18. 黒灰色シルト 19. 淡白灰色シルト 20. 黄色混じり淡灰色土 21. 淡灰色砂混じり土 22. 灰色砂礫 (φ5cm大少量混じる)
23. 淡暗灰色砂質土 24. 淡灰白色砂質土 25. 灰色砂礫土 (φ2~5cm大) 26. 灰黄色砂礫 (φ1~3cm大) 27. 淡灰色粘質土

7トレンチ拡張部 北壁土層



1. 茶灰色土 (耕作土) 2. 灰白色シルト・淡灰色砂質土 (整地土) 3. 淡暗灰色砂質土 4. 黒灰色シルト
5. 淡灰白色粘質土 6. 淡灰白色シルト 7. 灰色細砂
8. 淡灰色粗砂 9. 淡青灰色粘質土・黄色砂の筋状堆積の互層
10. 黒灰色粘土 (石混じり) 11. 淡茶灰色砂礫 (圓い)

8トレンチ北壁土層



1. 暗灰色土 (耕作土) 2. 灰白色シルト~砂質土 (整地土) 3. 淡暗灰色土 4. 灰色礫混じり土
5. 黄灰色礫混じり土 6. 淡灰褐色砂質土 7. 暗茶灰色礫混じり土 (φ10~15cm大の石多数)
8. 淡灰色礫砂 9. 褐色砂礫 10. 暗灰色砂 11. 淡黄灰色土 12. 淡灰色粘質土 13. 淡灰色細砂 (φ10cm大の石多数)
14. 淡灰色細砂 15. 淡灰色中砂 16. 明褐色砂混じり淡灰色砂 17. 茶灰色砂 (φ3cm大の円礫混じる)
18. 明褐色礫混じり砂 19. 明褐色砂 (圓い) 20. 淡灰色砂礫 (φ3cm大の円礫)
21. 明褐色~淡明褐色細砂・粗砂 22. 暗黄褐色粗砂 23. 暗灰色礫混土 24. 淡白灰色・明茶褐色砂の互層

第48図 調子地区6トレンチ東壁・7トレンチ拡張部北壁・8トレンチ北壁土層図

ともに埋土がシルト質～粘土であることから、急激な流れの中で堆積したものではなく、池や沼などの滞水状況の中で堆積したものと推定される。

流路4 6トレンチの南端で検出した溝で、6トレンチ東壁土層の5～7層を堆積土とするものである。幅1.6m、検出高は50cmであるが、底面に到達していない。遺物の出土はない。

流路5 7トレンチの中央部やや西側で検出した南北方向の流路である。幅6m以上、検出高40cmである。7トレンチ北壁土層の23～25層を堆積土とする流路跡で、灰色砂系統を主体とするものである。検出した方向と砂粒の大きさの類似から、8トレンチの11～15層に相当するものと判断される。8トレンチでは検出高約1mである。遺物の出土はなかった。

流路6 7トレンチ北壁土層の26・27層の灰色粗砂・砂礫を堆積土とする流路跡で、ほぼ南北に走り、東肩部を検出した。幅5m以上、土層観察で確認した深さは60cm以上である。遺物の出土はない。

流路7 (図版第52-(2)) 7トレンチ北壁断面で観察した流路跡で、トレンチの東端で確認した。14層の赤褐色礫(直径10cm大)が厚く堆積している中を、7～13層がほぼ垂直方向に堆積しているものである。幅0.8m以上、深さ1.15m以上である。遺物の出土はなかった。

流路8 (第48図) 7トレンチ北壁断面の東端で確認した、14層の赤褐色礫(直径10cm大)を埋土とするものである。幅5m以上、深さ1.2m以上である。遺物の出土はない。流路7のベースとなる14層もまた、ある段階の流路と判断される。

8トレンチ (第48図、図版第10-(3)) 6・7トレンチの間に設定したトレンチで、6トレンチ流路1の延長部分を確認するために設定したトレンチである。2m×7.5mのトレンチである。結果的には南北方向の流路跡と北東-南西方向の流路跡を確認した。

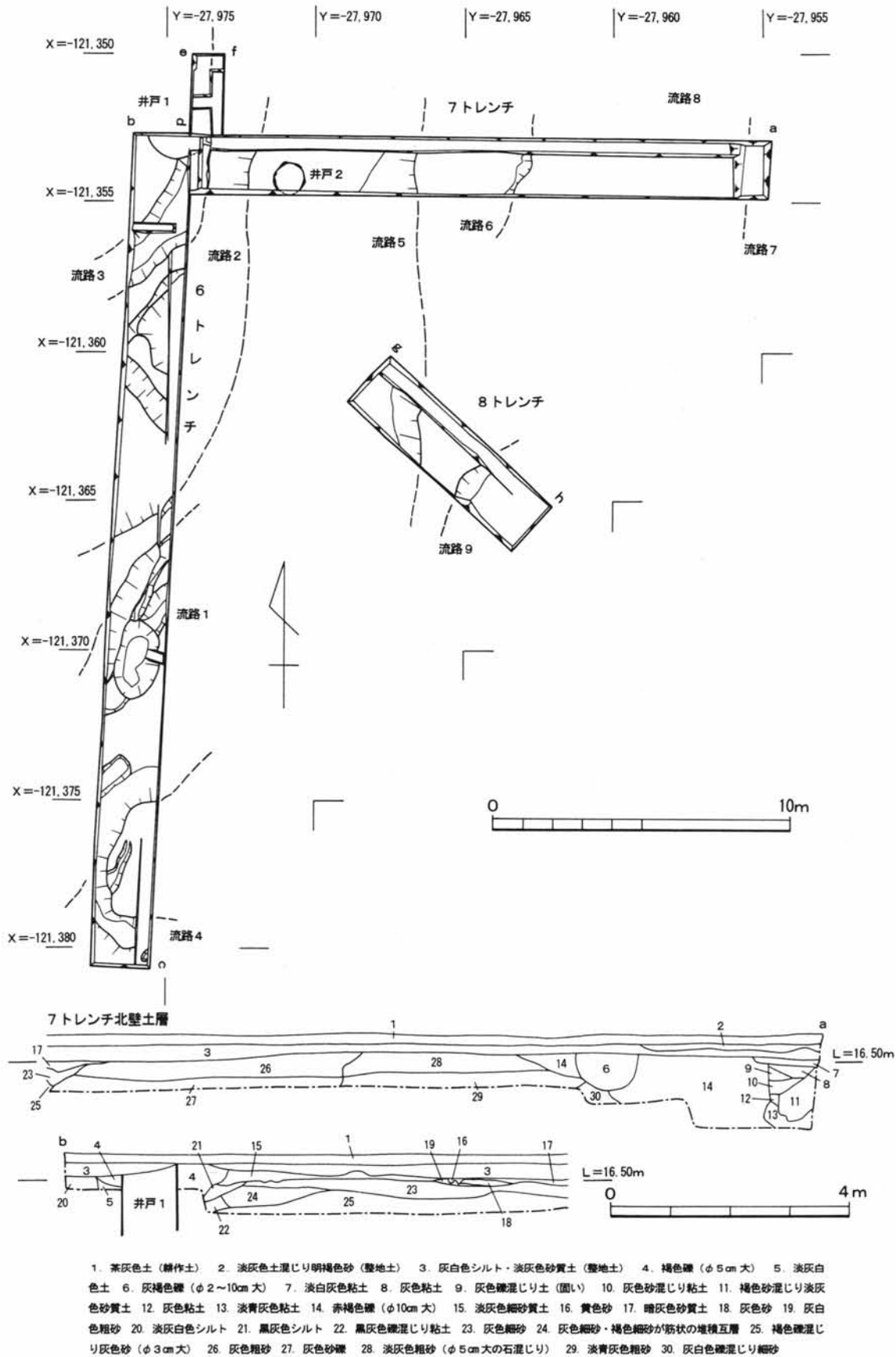
流路9 (第48図、図版第53-(3)) 8トレンチの南東部で検出した流路跡で、幅2.7m以上、検出高60cm以上である。遺物の出土はない。

2) 小結

1トレンチでは奈良～平安時代の柱穴を検出し、包含層中からではあるが、弥生土器や石器剥片が出土した。1トレンチは、現調子集落の近くにあり、2～8トレンチと比べて高台に位置することと考え合わせると、周辺に弥生時代の村と奈良～平安時代の村があったことが推測される。瓦が出土していることから、掘立柱建物跡は一部瓦葺きであった可能性もあり、そうすると、一般集落とは異なった性格の施設であった可能性もある。高台における弥生集落の存在は、2・3トレンチや6・7トレンチの流路跡に、弥生時代中期から庄内期にかけての土器片が比較的多く、廃棄されていることと符合する。

一方、低地にあたるJR西日本側には、弥生時代から古墳時代にかけては小泉川が流れており、人間による土地利用はその一部分であったものと思われる。

2トレンチの弥生時代中期・庄内期の流路跡3・4内からは、多数の土器片が見つかった。これらは、角が磨耗していないこと、同一個体の破片がかたまっていること、比較的大きな破片であることから、長い距離にわたって流されたものではなく、この近くの場所で廃棄されて堆積し



第49図 調子地区検出遺構平面図、7トレンチ北壁土層図

たものと考えられる。それに対して、古墳時代の流路跡から出土した土器片は、角が磨耗し、破片も少なく、上流から流れ着いた様相を示す。

一方、2～8トレンチを設定した低地にあつては、数多くの流路跡を、平面的に、あるいは土層断面で認めたものである。試掘トレンチを線状に設定したため、各トレンチで確認した流路跡の復原は根拠のあるものではない。しかし、この地にあつては、小泉川の氾濫原として多くの流路が錯綜しており、その中でも、弥生時代中期と庄内期には、比較的安定して、旧小泉川がその流れを保っていたことが判明した。

また、1トレンチと2～8トレンチでは、それぞれ流路跡を検出しているが、これらの間には、約1.7mの比高差があるため、一概に、同じ条件の流路とは言えない状況である。これらの流路跡の関係については、不明と言わざるを得ない。

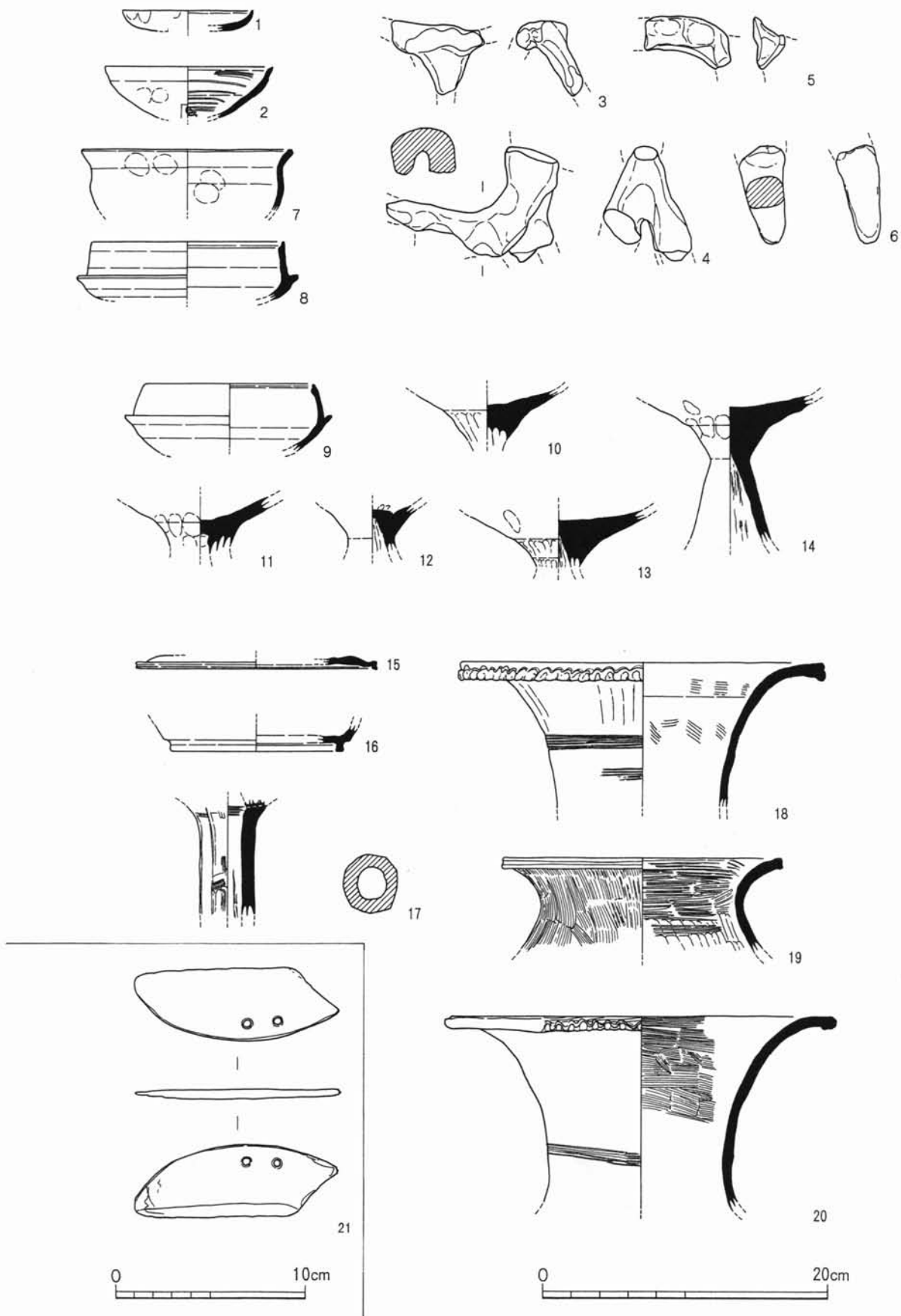
昨年度調査を行った調子E地区では、平安時代から鎌倉時代にかけての流路や氾濫原が分布していた。今年度の調査成果と総合すると、平安時代以前にはJR西日本側を、平安時代以降には今回の調査地の北側に、小泉川の流路が広がっていることが判明した。かくの如く、小泉川は、時代によって大きく流れを変えているようである。弥生集落は^{はざま}遺跡の範囲で捉えられるのか、今後の課題である。

3. 出土遺物(第50・51図、図版第55・56)

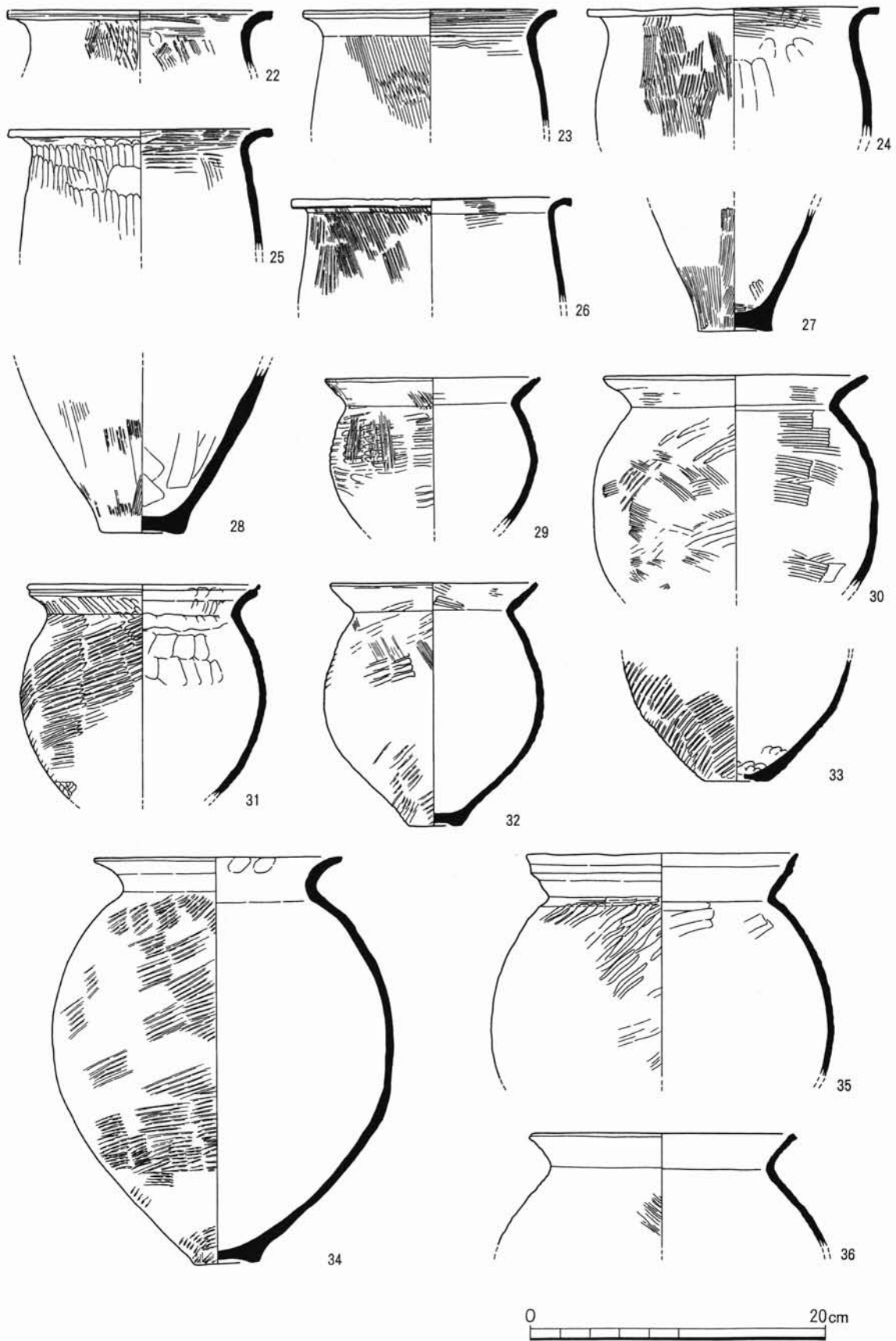
今回の試掘調査で出土した遺物は河川堆積中から出土したものが多く磨耗が激しいものや細片が多いため図示しうるものは少なかった。これは調査地が小泉川に沿っておこなわれたことにより、調査の結果が旧河道跡を多く検出したことによる。また上流域での調査では、新興住宅地の造成による遺構面の削平が多く認められたため、出土遺物は二次的な堆積土中のものが少量あつたにすぎない。以下に示すものは図示しうるものうち主なものについて掲載する。

1～8は尾流地区の調査で出土した。1は瓦器の皿で上層の水田耕作土、床土層から出土した。口径9.2cm、器高1.4cmを測る。2は瓦器の椀で、3トレンチの14層上面から出土した。口径12.0cm、残存高3.8cmを測る。内面に粗い暗文を施し、外面指押さえによる調整で仕上げる製品である。3・4・6は土馬の部分である。3・4は1トレンチから出土した胴部片で頭部や脚部などの先端部を欠いている。5は1トレンチSD05から出土したミニチュア竈の焼き口部分である。これらの遺物は当調査地周辺部での出土範囲も広く、律令期の水辺の祭祀として遺跡の性格を特徴づける遺物である。7は土師器鉢で、1トレンチから出土した。口径15.0cm、残存高4.0cmを測る。8は須恵器の杯身で、1トレンチから出土した。口径13.5cm、残存高4.0cmを測る。9～14は菩提寺地区の調査で出土した。9は河道南岸の包含層で出土した。口径12cm、器高4.8cmを測る。10～14は旧河道の堆積層内から出土した土師器高杯の脚部である。出土したすべての個体が杯部と脚部の接合として、接合部に粘土紐を外周に充填し指押さえによる調整で仕上げるという特徴をもっている。(戸原和人)

15～36は、調子地区で出土した遺物の実測図である。15の須恵器杯蓋は5トレンチ2・3層の



第50図 試掘調査出土遺物実測図(1)



第51図 試掘調査出土遺物実測図(2)

整地土層から出土した。口径17cmを測る。16の須恵器杯身は3トレンチ5層(淡灰色細砂)から出土した。底径12.2cmを測る。17は土師器高杯の脚部である。八角形の面取りを施している。

18～20は弥生時代中期の壺形土器で、18・19は2トレンチの流路4から、20は6トレンチ流路3から出土した。18は、頸部上段に6条の櫛描き沈線が施文されており、少なくとも二帯が観察される。口縁端部の下面は、指頭でつまみながら連続して下方に引き出しており、波状の凸凹となっている。口縁端面は上下にやや肥厚しており、ヘラ状工具で沈線が一条描かれている。口径25.2cmを測る。19は口頸部内面が横方向のハケおよび板ナデで、外面が縦方向のハケメが施されている。20は口縁端部外面に横方向のハケメを施した後、口縁端部下端をヘラ状のもので押し上げて窪みを作り、それを連続させて波状の形としている。口径19.4cmを測る。22～28は口縁部が大きく外反し、外面は縦方向、口縁部内面は横方向のハケが施された大和形の甕である。25のみ、外面は板状工具で縦方向になでている。22～24・26の甕口頸部はである。22・24・27・28は2トレンチ流路4、23・25は3トレンチ流路3、26は6トレンチ流路3から出土している。これらの壺・甕は、山城Ⅱ-1ないしⅡ-2様式の様相を示す。

21は3トレンチ流路3から出土した石庖丁である。

29～32・34は弥生時代後期の甕形土器で、33は底部が穿孔されており、甑である。山城Ⅴ-4からⅤ-5様式のものに該当する。すべて、2トレンチ流路3上層の土器溜まりから出土している。胴張りの球形に近い体部を有し、「く」の字状に屈曲して大きく上方にのびる口縁を有する。外面はタタキで、内面はハケやナデで調整している。29は口径14.6cm、30は口径17.8cm、31は口径15.6cm、32は口径17.0cmを測る。34は口径16.8cm、器高27.2cmを測る。35はS X05下層出土である。口縁部を二段に屈曲させ外反させている。

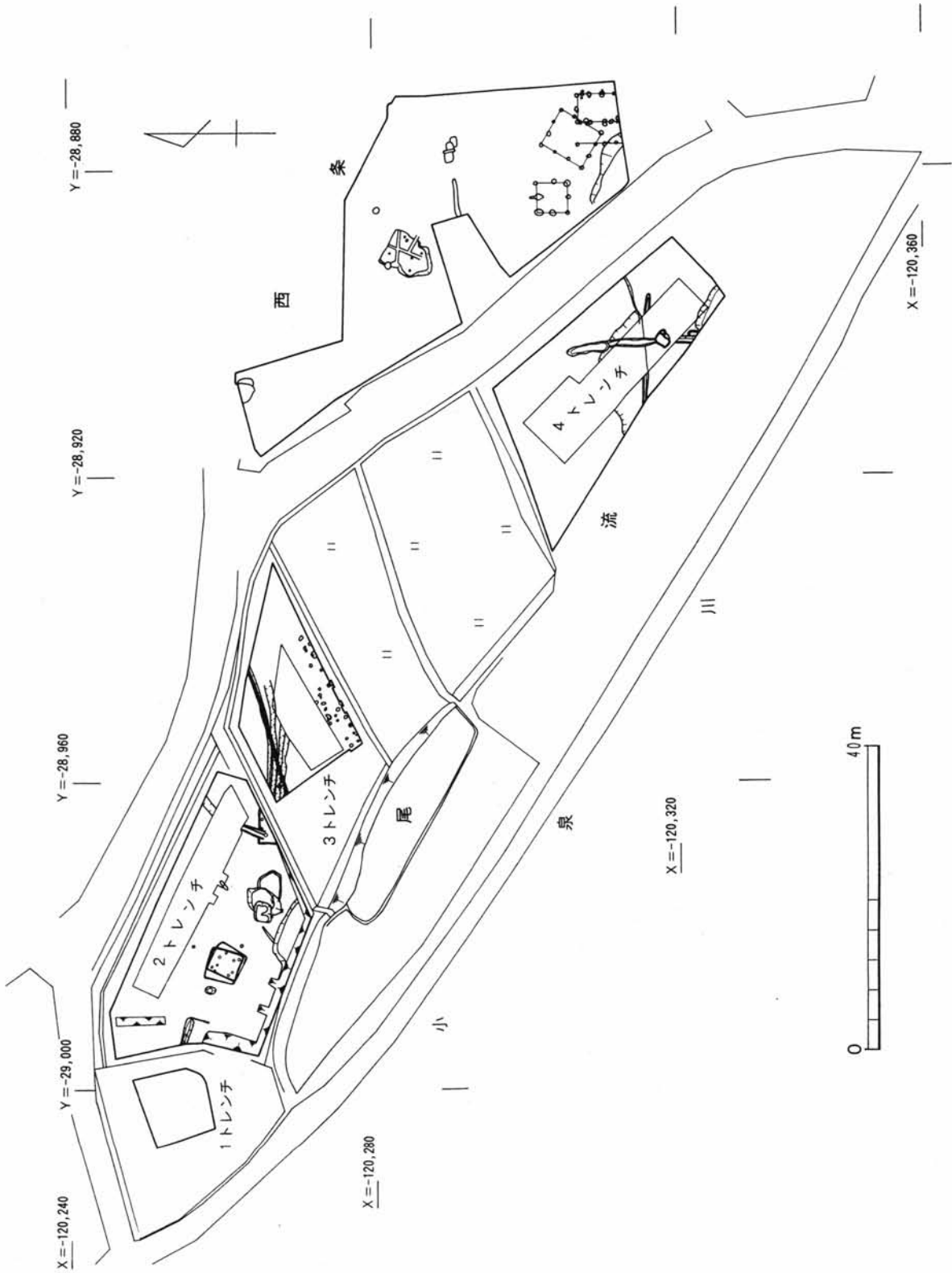
35・36は布留期の甕形土器である。35は29～34の甕と同じ2トレンチ流路3上層の土器溜まりから出土した。口縁端部が上方に引き出され、口縁部外面に面を有するものである。口径18.4cmを測る。36は「く」の字に屈曲して上方にのびる口縁部をなしており、6トレンチから出土したものである。

(岩松 保)

4. まとめ

本年度については合計12地区で試掘調査を実施した。調査の結果は上述のように、尾流地区と調子地区で顕著な遺構を確認することができた。これら以外の地点では、ある程度の遺物は出土するものの明瞭な遺構を確認するにはいたらなかった。尾流地区では長岡京期に遡る可能性のある流路を確認し、土馬などが出土している。土馬は祭祀に用いられるものであり、近隣には長岡京期の祭祀場として著名な西山田遺跡があり、この遺跡との関連が注目される場所である。調子地区では弥生～古墳時代と中世の流路跡、奈良～平安時代の柱穴・ピットを検出した。流路跡から多くの弥生土器・庄内土器が出土しており、近隣で廃棄された状況であったことから、同時代の集落跡が調査地周辺に分布していることが想定される。また、奈良～平安時代の柱穴・ピット

を検出したことも、1トレンチの周辺に同時期の集落跡が包蔵されている可能性を示すものと判断される。



第52図 西条・尾流地区周辺調査主要遺構配置図

ま と め

平成17年度の第二外環関係の埋蔵文化財調査は、総長2.2kmにわたる間で実施した12地点42か所の試掘調査(長岡京跡右京第851次調査)と下海印寺西条地区で実施した本調査(右京第852次調査)、下海印寺尾流地区で実施した本調査(右京第862次調査)がある。

右京第851次調査では、顕著な遺構・遺物を確認した地点は少なく、尾流地区と調子地区の2地点に限られる。尾流地区では、長岡京期の遺物を含む流路跡を検出し、土馬などが出土した。

尾流地区の本調査地点(右京第862次調査)でも土馬が出土している。尾流地区の南には長岡京の祭祀場として有名な西山田遺跡があり、多数の土馬や墨書人面土器、ミニチュア竈などが出土している。尾流地区の試掘地点、本調査地点は、この西山田遺跡の中心部からそれぞれ140m、100mほどの距離に位置していることから、西山田遺跡を中心として執り行われた祭祀は、狭い範囲で執り行われたものではなくて、広範囲に面的に執り行われた可能性を示唆する資料である。調子地区では、弥生時代中期と終末～古墳時代初頭の土器を含む流路跡と、布目瓦片を含む柱穴・小ピット群を検出した。弥生時代中期と終末～古墳時代初頭の土器はさほど磨滅を受けておらず、近接した地点で廃棄された状況が窺われる。調査地の北東方向には弥生時代後期の竪穴式住居跡が調査されている俗遺跡が分布しており、俗遺跡の範囲がこの地点にまで広がっている可能性がある。

右京第852次調査の西条地区では、真北を向く掘立柱建物跡2棟、柵列1条を検出した。南西方向で調査を行った右京第862次調査の尾流地区では、ほぼ真北を向く溝1条を検出しており、この周辺に、真北を意識した建物群や地割りが存在したことが窺える。これらの遺構群の時期は、長岡京期を中心とする奈良～平安時代と考えられる。小泉川の対岸にある西山田遺跡との関連が注目される。

西条地区・尾流地区は下海印寺遺跡の範囲内でもあり、尾流地区の調査では、弥生時代後期の土坑S X04や土器溜まりS X45を検出した。弥生時代後期の集落が近辺に存在していたことが窺える。また、西条・尾流両地区では、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出した。下海印寺遺跡の古墳時代の集落の広がり、段丘上に展開していると想定されていたが、今回の調査で、沖積段丘下にも広がっていることが判明した。今回検出した住居跡は建て替えが行われたものもあり、長期間にわたって居を構えていたことが推定される。

(岩松 保・戸原和人)

注1 調査参加者 浅井達也・荒川仁佳子・井上聡・大島弘子・荻野富紗子・木村悟・木村涼子・久米政代・黒慶子・坂下実・杉江貴宏・立松尚弥・土屋真代・内藤チエ・中島理恵・長谷川マチ子・馬場さやか・穂積優子・前川敬子・陸田初代・渡辺咲子

注2 『京タケノコと鍛冶文化 長岡京市文化財調査報告書』第40冊 長岡京市教育委員会 2000

注3 「長岡京跡右京一条四坊十三・十四町跡」(『京都市埋蔵文化財発掘調査概報』2002-2 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 2003

注4 長岡京跡右京第842次調査。今年度の長岡京跡右京第862次調査でも、その延長部分が調査されている

る本報告書中76頁。岩松保・竹井治雄「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」
（『京都府遺跡調査概報 第118冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2006

注5 岩崎誠「右京第104次(7ANOND地区)調査略報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度
（財）長岡京市埋蔵文化財センター） 1983

山本輝雄・岩崎誠「長岡京跡右京第104次調査概要(7ANOND地区）」（『長岡京市埋蔵文化財調査報告
書』第1集（財）長岡京市埋蔵文化財センター） 1984

圖 版

図版第1 長岡京跡右京第852次・下海印寺遺跡第23次



(1)西条・尾流地区全景(北西から)



(2)西条・尾流地区近景(上が南西)



(1)西条地区、北半調査地全景(南南東から)



(2)西条地区、南半調査地全景(北西から)



(1)掘立柱建物跡 S B85201、柵列
S A85204検出状況(北から)



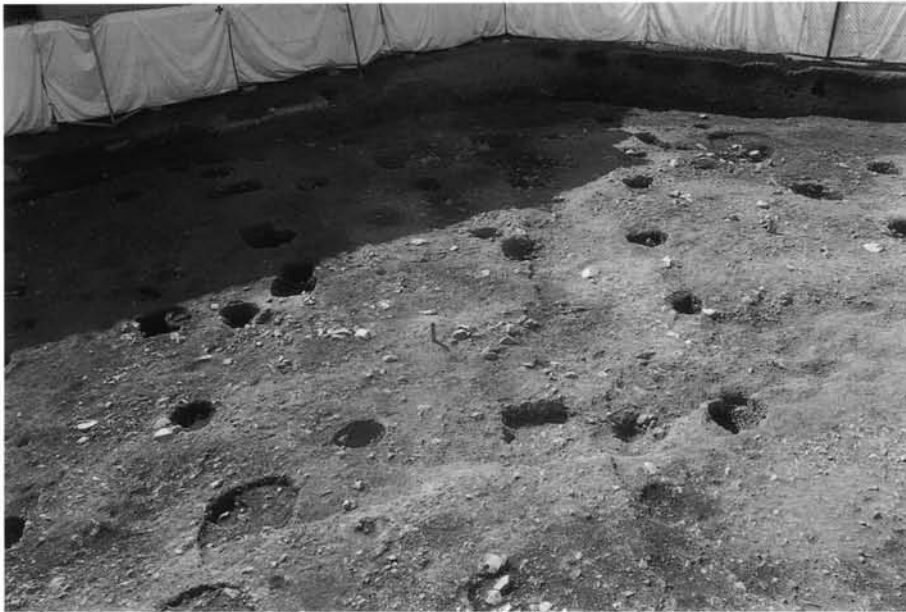
(2)掘立柱建物跡 S B85201、柵列
S A85204完掘状況(北から)



(3)掘立柱建物跡 S B85201、柵列
S A85204完掘状況(西から)



(1)掘立柱建物跡 S B 85202
完掘状況(北から)



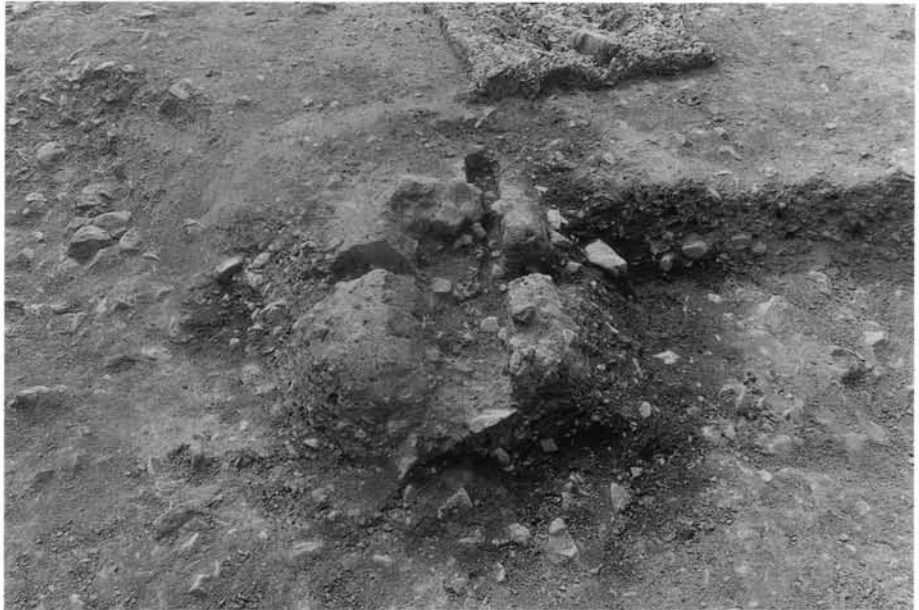
(2)掘立柱建物跡 S B 85203
(北東から)



(3)西南部緩傾斜面検出状況
(北西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H08・15 全景
(西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H08 竈状遺構
(東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H23 検出状況
(西から)



(1)土坑 S K 26内遺物出土状況
(西から)



(2)溝 S D 68検出状況(北西から)



(3)土坑 S K 105・106検出状況
(東から)



(1)土坑 S K02・10検出状況
(東北東から)



(2)土坑 S K07検出状況(北西から)



(3)土坑 S K16検出状況
(東南東から)



(1)井戸 S E 18検出状況(南東から)



(2)鍛冶関連遺構 S K14検出状況
(南西から)



(3)鍛冶関連遺構 S K14細部
(南西から)

(1) 鍛冶関連遺構 S K11
(西南西から)

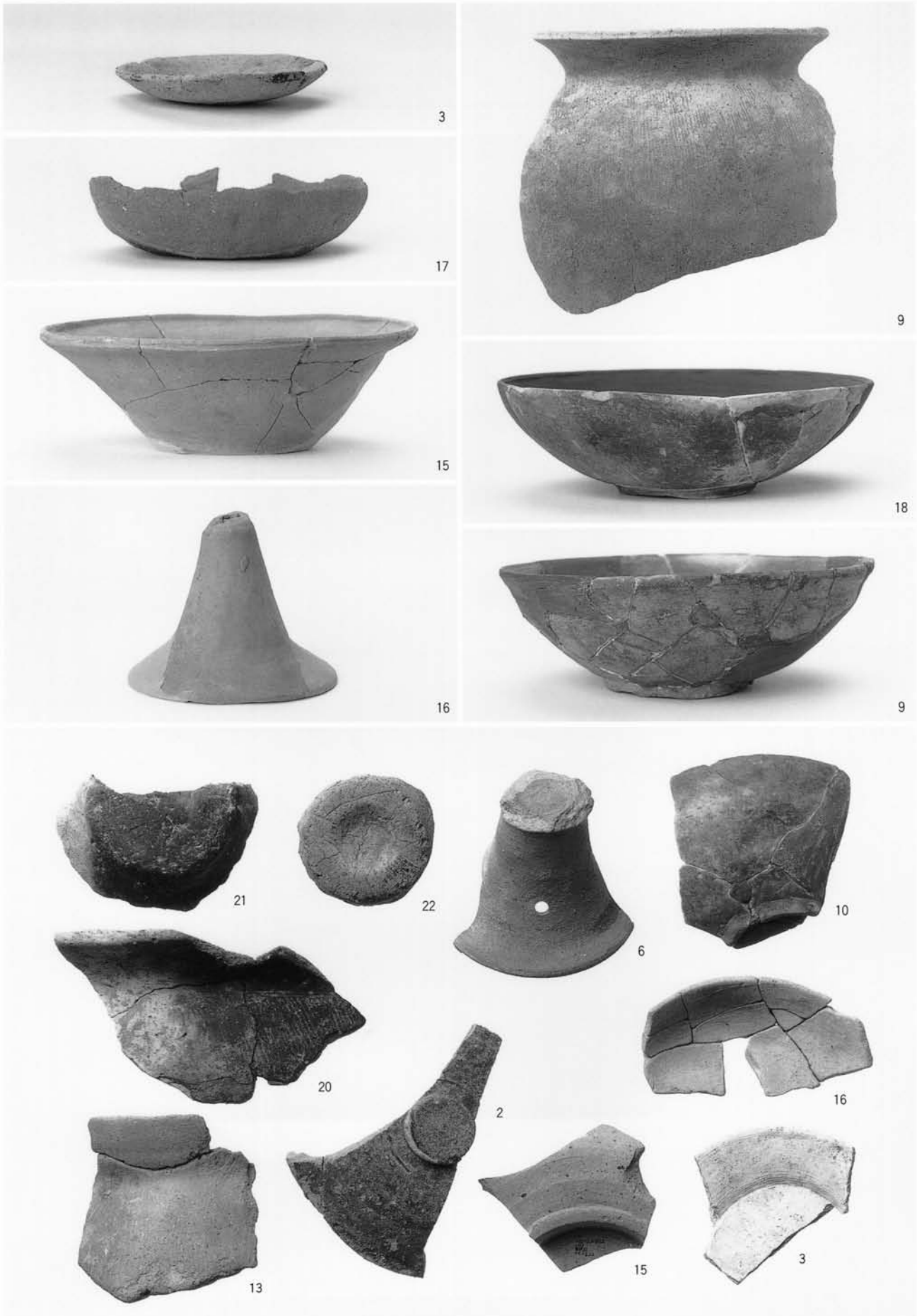


(2) 鍛冶関連遺構 S K12
(北北西から)



(3) 鍛冶関連遺構 S K13(北東から)





出土遺物(番号は実測図に対応)



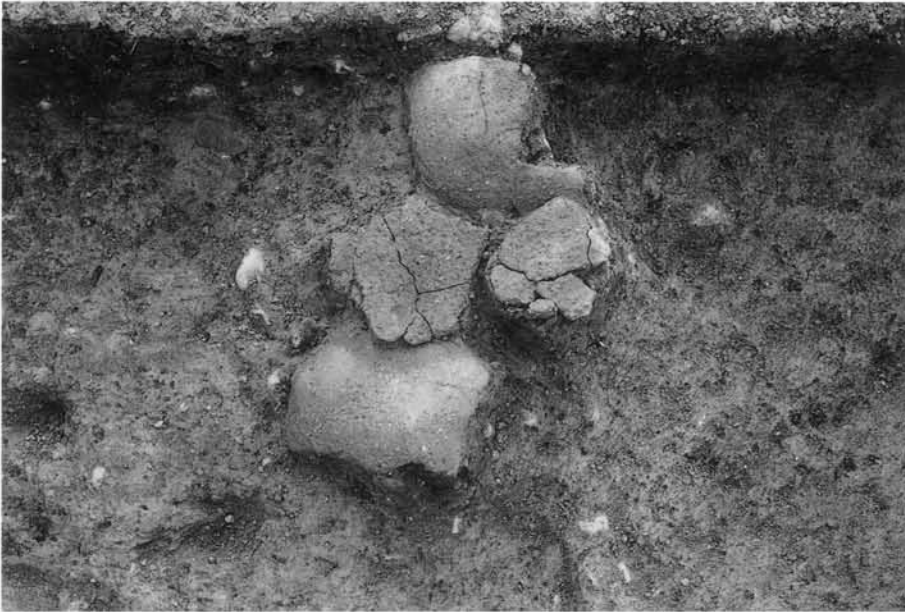
(1)尾流地区調査地全景(南東から)



(2)尾流地区2トレンチ全景
(南東から)



(3)尾流地区2トレンチ竪穴式住居
跡SH13-A・B(南から)



(1)尾流地区2トレンチSH13-B
土器出土状況(東から)



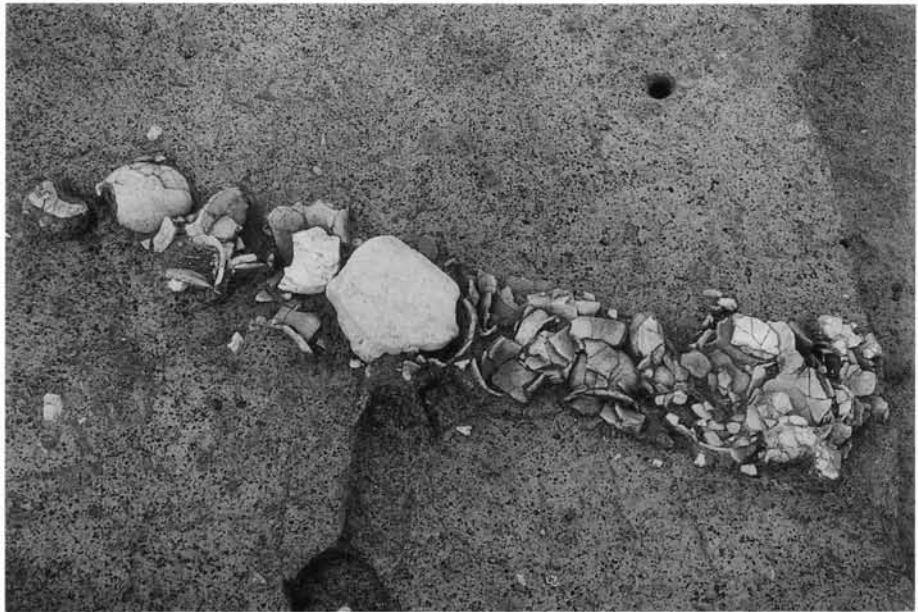
(2)尾流地区2トレンチSH13-A
遺物出土状況(真上から)



(3)尾流地区2トレンチ現代の土坑
SX14検出状況(東から)



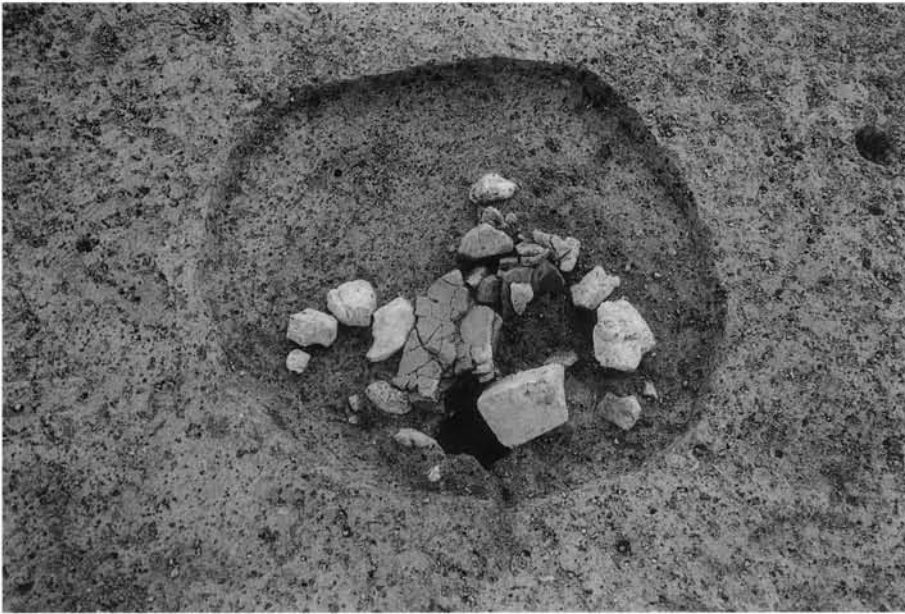
(1)尾流地区2 トレンチ
 竪穴式住居跡 S H16(南から)



(2)尾流地区2 トレンチ土坑 S X49
 遺物出土状況(南東から)



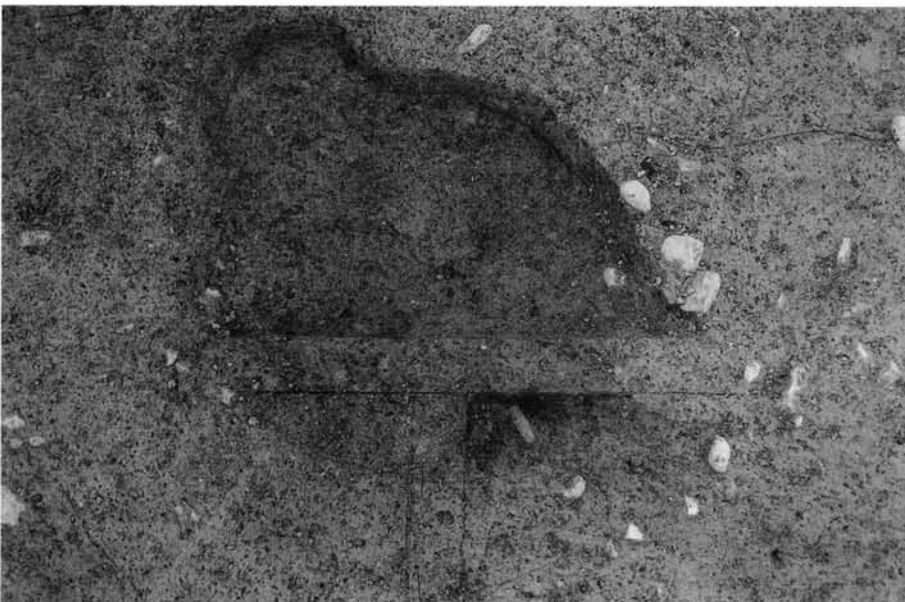
(3)尾流地区2 トレンチ土坑 S X49
 遺物出土状況(北東から)



(1)尾流地区2トレンチ土坑S K43
遺物検出状況(北から)



(2)尾流地区2トレンチ土坑S K44
遺物出土状況(南東から)



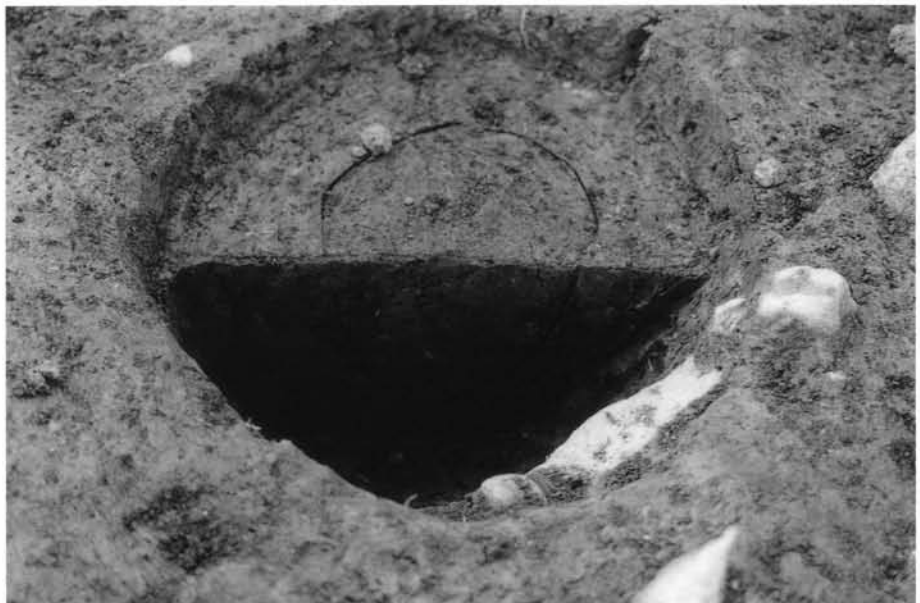
(3)尾流地区2トレンチ土坑S X39
土坑検出状況(南西から)



(1)尾流地区3トレンチ全景
(南から)



(2)尾流地区3トレンチ柱穴群
検出状況(西から)



(3)尾流地区3トレンチ柱穴P19
平面・断面検出状況(南西から)



(1)尾流地区4 トレンチ全景
(東から)



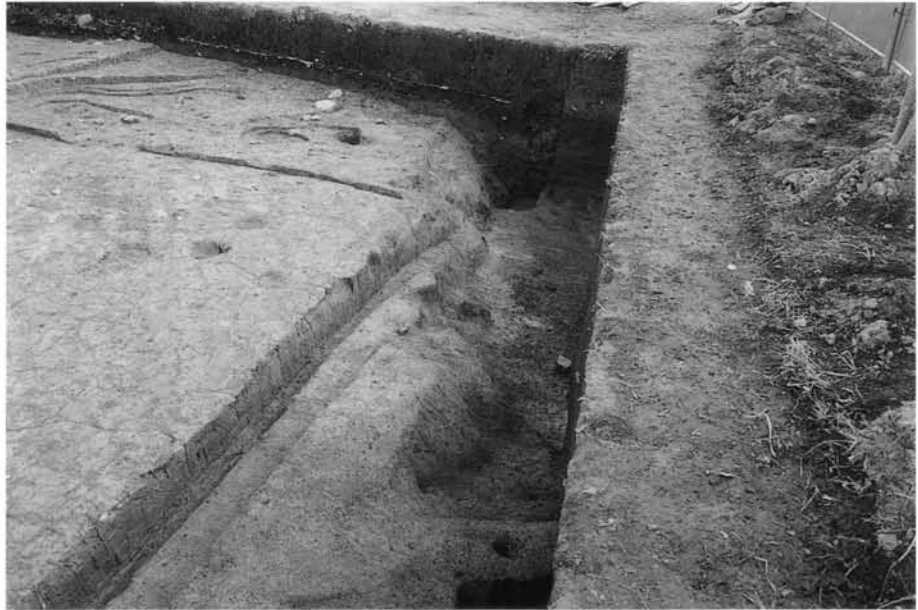
(2)尾流地区4 トレンチ
溝 S D03検出状況(南から)



(3)尾流地区4 トレンチ
溝 S D03断面(南から)



(1)尾流地区4 トレンチ
溝 S D25検出状況(東から)



(2)尾流地区4 トレンチ
溝 S D25検出状況(西から)



(3)尾流地区4 トレンチ
溝 S D24検出状況(南から)



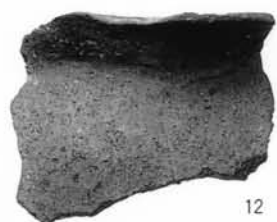
(1)尾流地区4 トレンチ溝 S X04
遺物出土状況(南から)



(2)尾流地区4 トレンチ溝 S X04
遺物出土状況(北から)



(3)尾流地区4 トレンチ溝 S X04
遺物出土状況(北東から)



12



34



10



5



36



7



17



4



16



17



18



19



21



22



23



24



25



S X 45



(1)片山田地区調査地全景(南から)



(2)片山田地区4・5トレンチ全景
(西から)



(3)片山田地区1トレンチ西壁断面
(南から)



(1) 荒堀地区1 トレンチ全景
(東から)



(2) 荒堀地区1 トレンチ焼土坑
(西から)



(3) 荒堀地区3 トレンチ全景
(西から)



(1) 荒堀地区3 トレンチ溝 S D00内
遺物出土状況(東から)



(2) 荒堀地区4 トレンチ全景
(西から)



(3) 荒堀地区5 トレンチ全景
(東から)



(1)高台地区1・2トレンチ全景
(西から)



(2)高台地区4トレンチ全景
(東から)



(3)高台地区5トレンチ全景
(西から)



(1)火ノ尾地区1 トレンチ全景
(南東から)



(2)火ノ尾地区1 トレンチ断面
(北東から)



(3)火ノ尾地区2 トレンチ全景
(南西から)



(1) 駿河田(左岸)地区調査地全景
(東から)



(2) 駿河田(左岸)地区2トレンチ
南壁断面(北から)



(3) 駿河田(左岸)地区1トレンチ
全景(南から)



(1)駿河田(右岸)地区1トレンチ
全景(東から)



(2)駿河田(右岸)地区2トレンチ
全景(東から)



(3)駿河田(右岸)地区2トレンチ
流路跡断面(南から)



(1)駿河田(右岸)地区2トレンチ
流路跡内集石遺構断面(南から)



(2)駿河田(右岸)地区3トレンチ
全景(南から)



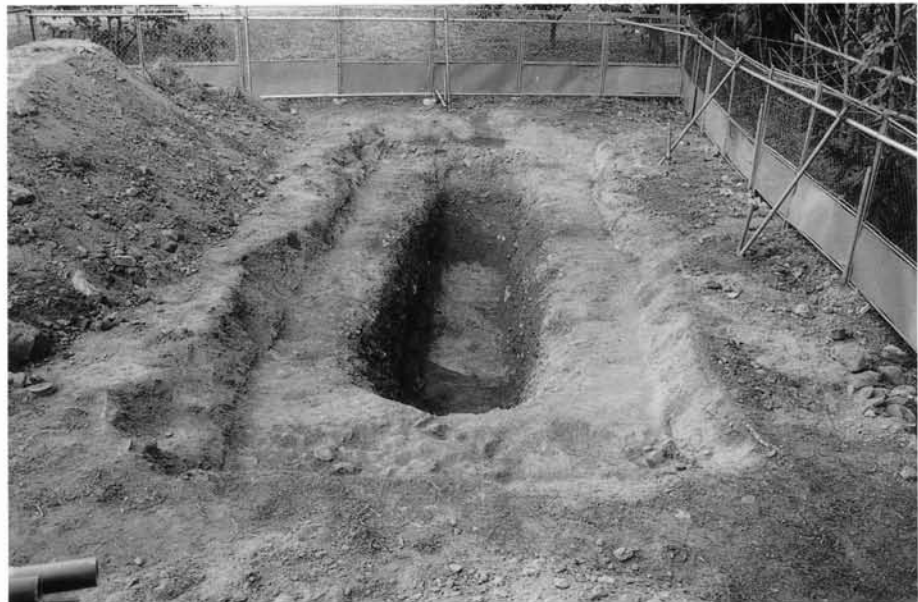
(3)駿河田(右岸)地区3トレンチ
「土堤」状遺構検出状況
(北から)



(1)駿河田(右岸)地区3トレンチ
「土堤」状遺構断面(西から)



(2)駿河田(右岸)地区流路跡断面
(北から)



(3)駿河田(右岸)地区4トレンチ
全景(南から)



(1)菩提寺地区調査地全景
(南東から)



(2)菩提寺地区調査地全景
(北西から)



(3)菩提寺地区南壁断面(北から)



(1)菩提寺地区北壁断面1(南から)



(2)菩提寺地区旧河道N R 2201
北壁断面2(南西から)



(3)菩提寺地区NO.3セクション
(南東から)



(1)尾流地区1 トレンチ作業風景
(北から)



(2)尾流地区1 トレンチ上面
(北から)



(3)尾流地区1 トレンチ
溝 S D05南断面(北東から)



(1)尾流地区2 トレンチ全景
(北から)



(2)尾流地区2 トレンチ全景
(南から)



(3)尾流地区2 トレンチ西壁断面
(東から)



(1)尾流地区3トレンチ上層遺構
検出状況(北東から)



(2)尾流地区3トレンチ下層遺構
検出状況(北東から)



(3)尾流地区3トレンチS D07
検出状況(南西から)



(1)西条・尾流・上内田地区全景(上が北)



(2)上内田地区全景(上が南西)



(1)上内田地区1トレンチ全景
(東から)



(2)上内田地区1トレンチ全景
(南から)



(3)上内田地区2トレンチ全景
(南から)



(1)上内田地区2トレンチ東壁断面
(西から)



(2)上内田地区3トレンチ全景
(南から)



(3)上内田地区3トレンチ東壁断面
(西から)



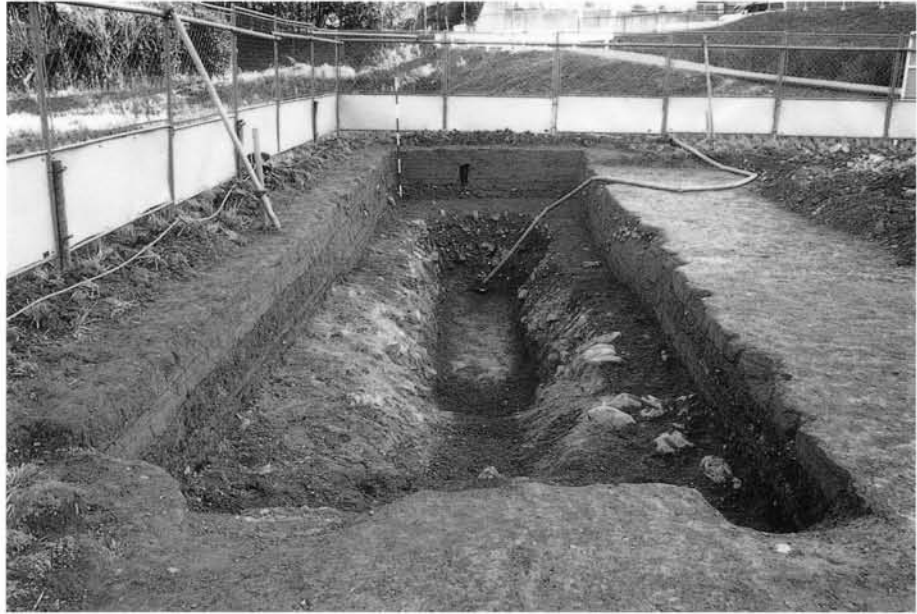
(1)上内田地区4トレンチ全景
(東から)



(2)上内田地区4トレンチ南壁断面
(北から)



(3)上内田地区5トレンチ東壁断面
(西から)



(1)上内田地区5 トレンチ全景
(北から)



(2)上内田地区6 トレンチ全景
(南から)



(3)上内田地区6 トレンチ東壁断面
(西から)



(1)川向井地区調査トレンチ全景
(南東から)



(2)川向井地区調査トレンチ全景
(北西から)



(3)川向井地区北西断面(南から)



(1)友岡地区1 トレンチ全景1
(東から)



(2)友岡地区1 トレンチ全景2
(西から)



(3)友岡地区2 トレンチ全景
(西から)



(1)友岡地区3 トレンチ全景1
(北から)



(2)友岡地区3 トレンチ全景2
(北から)



(3)友岡地区3 トレンチ全景3
(南西から)

(1)友岡地区3トレンチ東壁断面
(西から)



(2)友岡地区3トレンチ北壁断面
(南から)



(3)友岡地区3トレンチ
中央部東壁断面(西から)





(1)調子地区全景(北から)



(2)調子地区近景(南から)



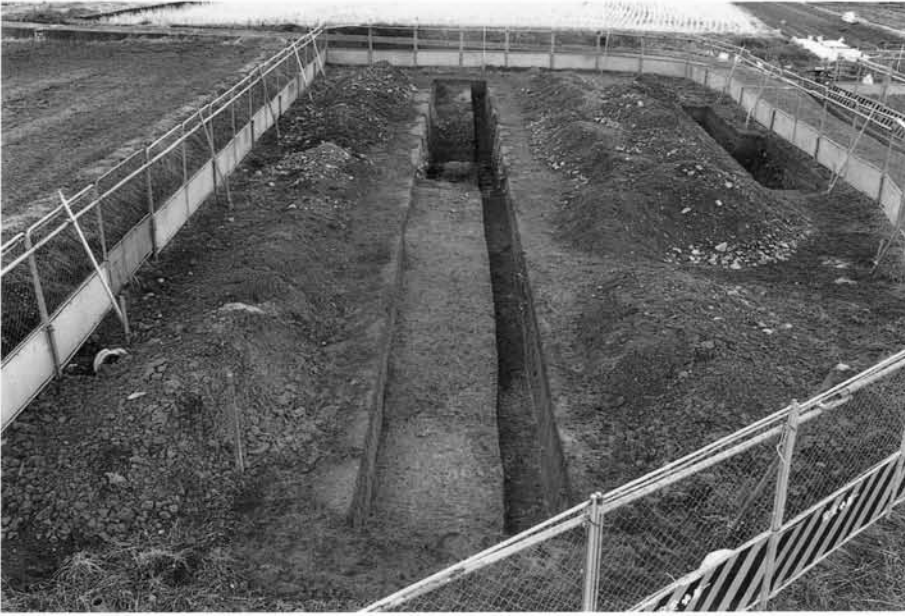
(1)調子地区1 トレンチ全景
(北から)



(2)調子地区1 トレンチ
柱穴群検出状況(北西から)



(3)調子地区1 トレンチ
流路跡検出状況(南東から)



(1)調子地区2 トレンチ全景
(南から)



(2)調子地区2 トレンチ
流路跡1・2 検出状況
(南東から)



(3)調子地区2 トレンチ
流路跡3 検出状況(北北西から)



(1)調子地区2 トレンチ
流路跡3内遺物出土状況
(北北西から)



(2)調子地区2 トレンチ
流路跡4 検出状況(北東から)



(3)調子地区2 トレンチ
流路跡4内遺物出土状況
(北から)



(1)調子地区3トレンチ
流路跡5 検出状況(南から)



(2)調子地区3トレンチ
流路跡1～3 検出状況(南から)



(3)調子地区3トレンチ西壁土層
(南東から)



(1) 調子地区4 トレンチ全景
(西から)



(2) 調子地区4 トレンチ
流路跡1 検出状況(西から)



(3) 調子地区4 トレンチ
流路跡1 内南壁土層(北東から)



(1)調子地区5トレンチ全景
(東から)



(2)調子地区5トレンチ南壁土層
(北から)



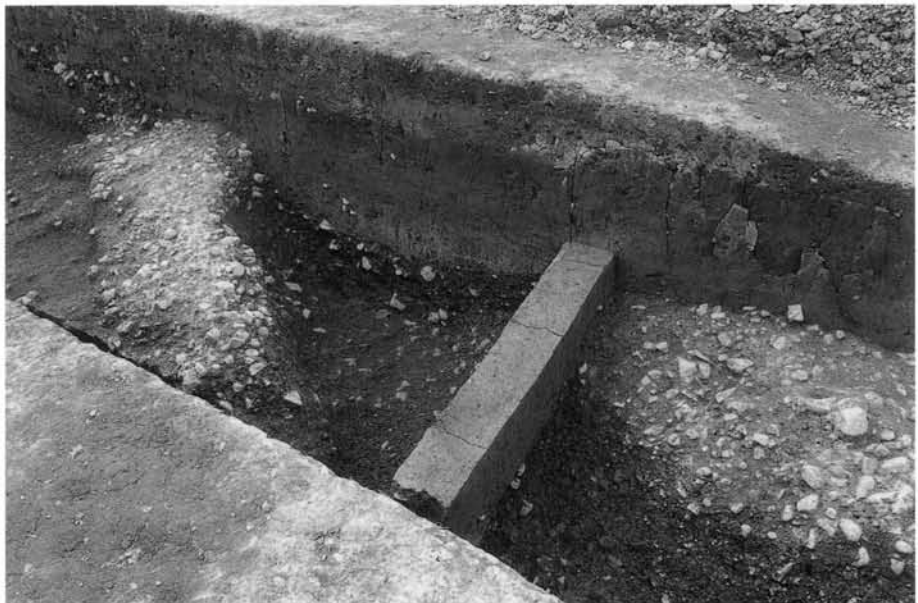
(3)調子地区5トレンチ南壁土層
(東北東から)



(1)調子地区6 トレンチ全景
(北から)



(2)調子地区6 トレンチ
流路跡1 検出状況(北北西から)



(3)調子地区6 トレンチ
流路跡3 検出状況(北東から)



(1)調子地区7トレンチ全景
(西から)



(2)調子地区6トレンチ
流路跡7内土層(南西から)



(3)調子地区7トレンチ
拡張区北壁断面(南から)



(1)調子地区6 トレンチ井戸1
(東から)



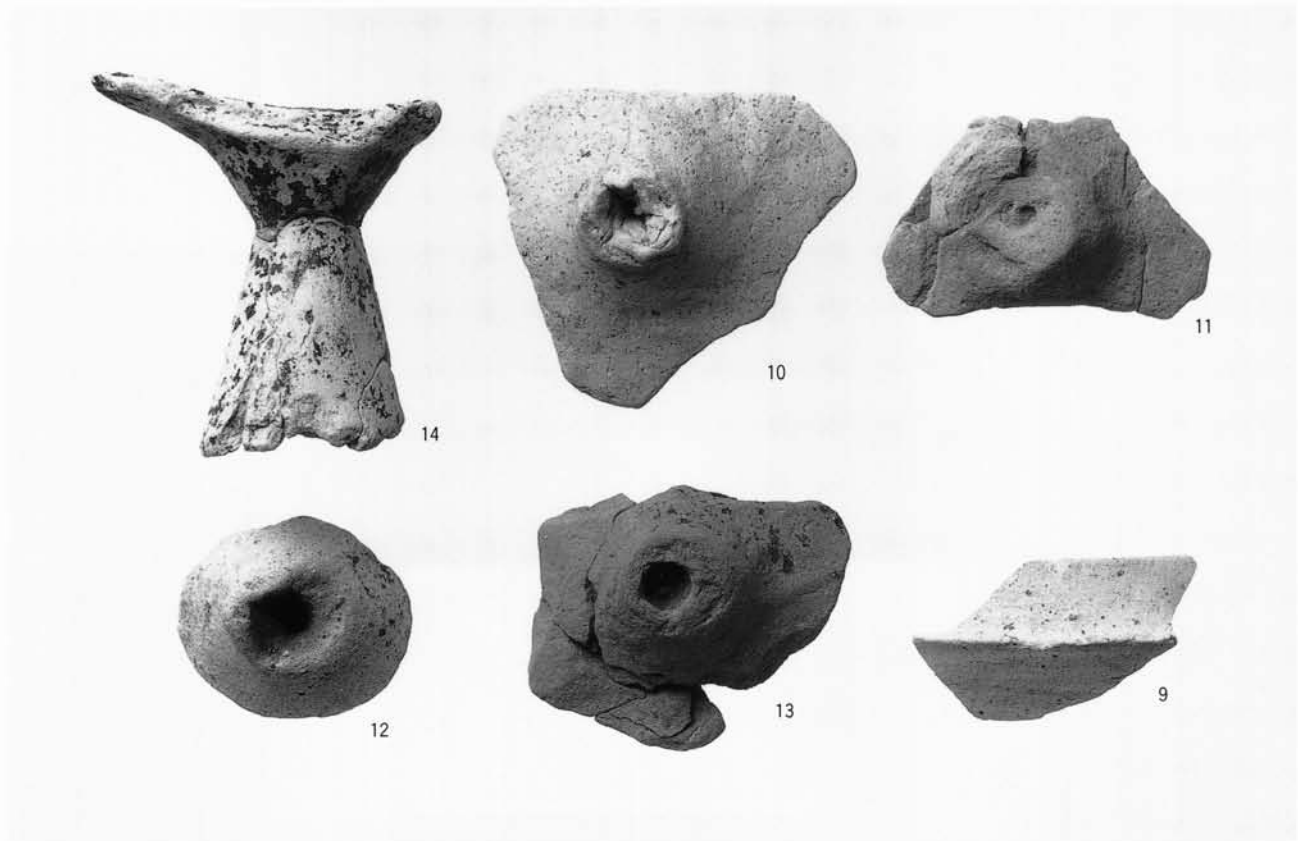
(2)調子地区7 トレンチ井戸2
(東から)



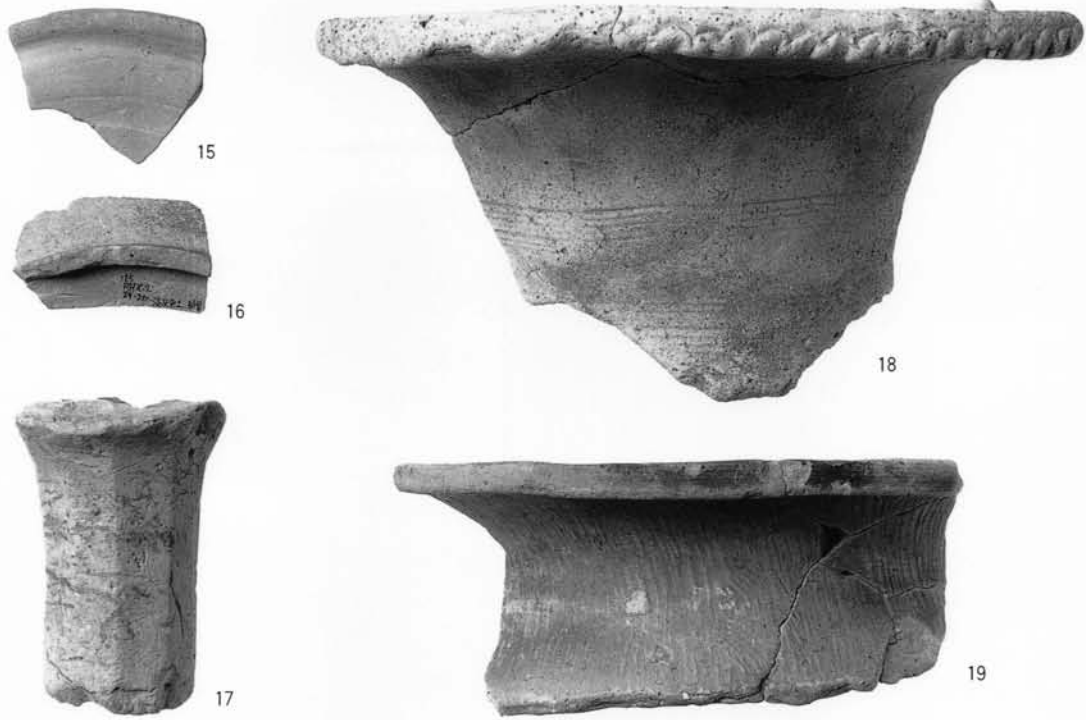
(3)調子地区8 トレンチ全景
(北北西から)



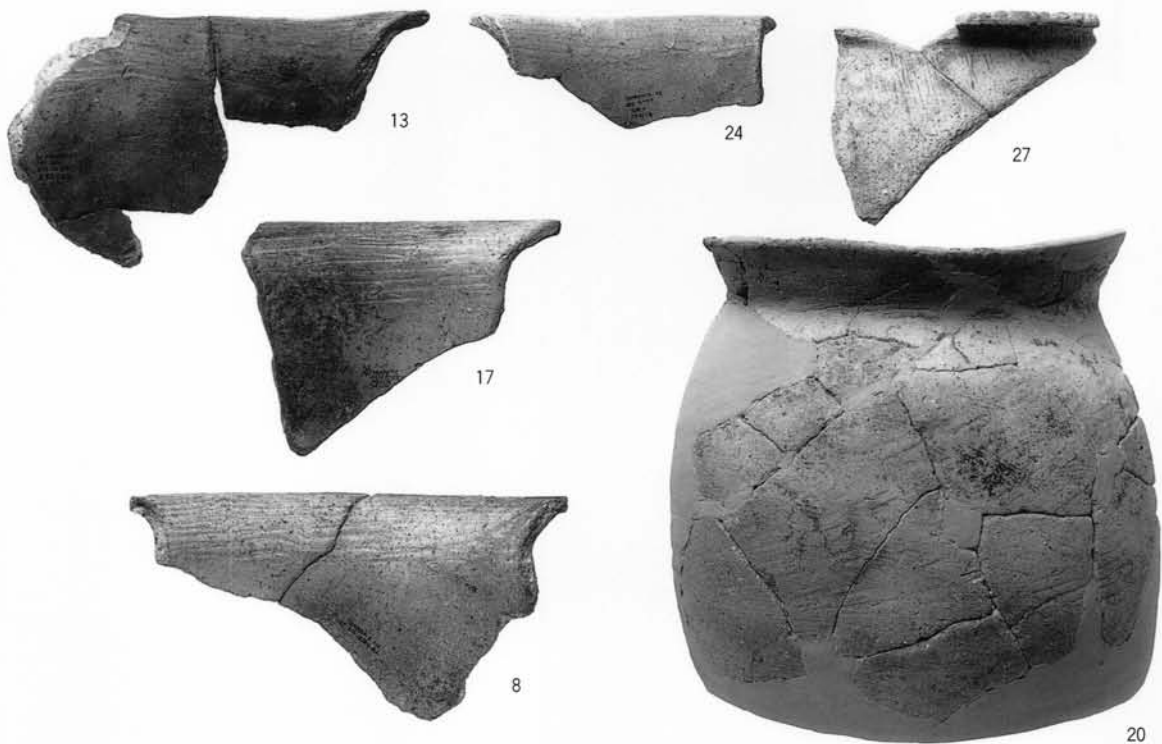
(1)尾流地区出土遺物



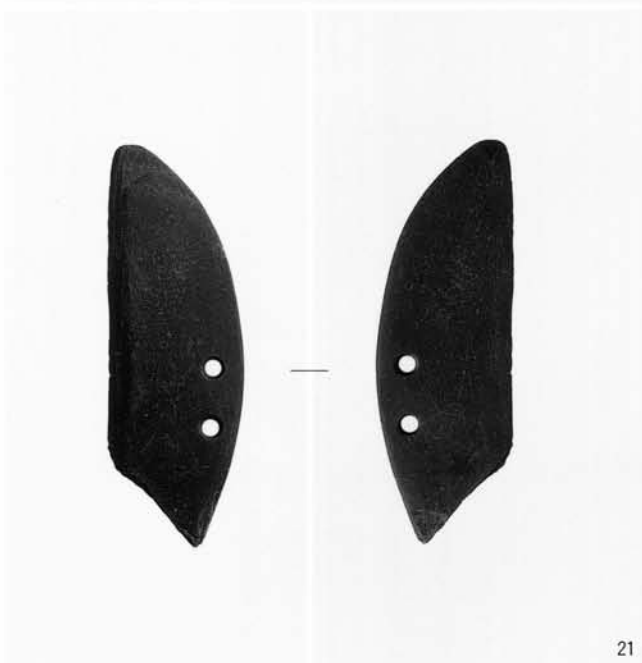
(2)菩提寺地区出土遺物



(1)調子地区出土遺物 1



(2)調子地区出土遺物 2



調子地区出土遺物 3